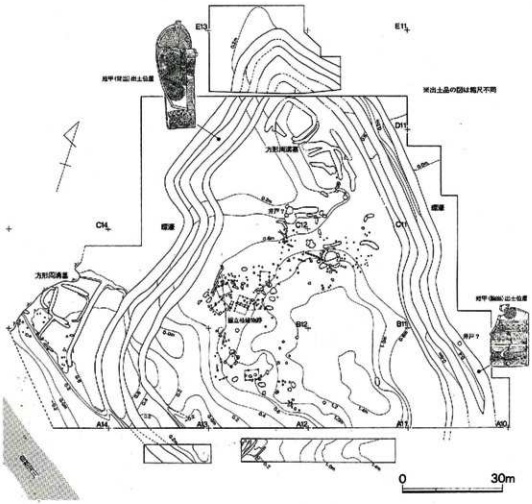
伊場遺跡発掘調査報告書 第9冊

伊場遺跡遺物編 7

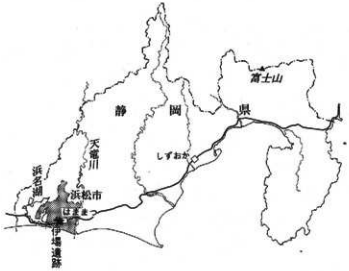


1997

浜松市教育委員会

伊場遺跡発掘調査報告書　第９冊

伊場遺跡遺物編７



例　　言

1．本書は、伊場遺跡発掘調査正式報告書の第９冊となるものである。伊場遺跡の報告書は、これまでに、当市教育委員会から８冊刊行されている。

ここで、その内容を整理しておくことにする。

第１冊『伊場木簡』　本文31ページ、別冊写真18ページ、別冊図版19ページ。
1976年３月刊行　　第３次調査から第７次調査までに出土した木簡を報告。

第２冊『伊場遺跡遺構編』　本文162ページ、写真103ページ、別冊図版40ページ。
1977年２月刊行　　第２次調査から第７次調査までのうち、第５次調査分を除いた、検出遺構に関する記録。

第３冊『伊場遺跡遺物編１』　本文77ページ、写真105ページ、別冊図版30ページ。
1978年３月刊行　　第３次調査から第７次調査までに出土した、木製品と竹製品に関する記録。

第４冊『伊場遺跡遺物編２』　本文80ページ、図版18ページ、別冊図版35ページ。
1980年３月刊行　　第３次調査から第12次調査までに出土した、墨書土器と木簡（補遺）を収録。

第５冊『伊場遺跡遺物編３』　本文78ページ、別冊写真80ページ、別冊図版63ページ。
1982年12月刊行　　第２次調査から第７次調査までに出土した、弥生式土器に関する報告書。

第６冊『伊場遺跡遺物編４』　本文100ページ、写真39ページ。
1987年３月刊行　　第２次調査から第７次調査までに出土した古墳時代の土器で、大溝からの出土品を除く。

第７冊『伊場遺跡遺物編５』　本文121ページ、写真33ページ。
1990年３月刊行　　第２次調査から第７次調査までに出土した、大溝内Ｘ層からⅥ層までの土器を掲載。

第８冊『伊場遺跡遺物編６』　本文38ページ、写真17ページ、別冊図版77ページ。
1994年12月刊行　　第２次調査から第13次調査までに出土した、大溝内Ⅴ層から上層の土器と、第８次以降の遺構内出土土器を掲載。

伊場遺跡の発掘調査のうち、第１次調査は、国学院大学によって実施され、報告書が刊行されている。第２次から第13次までの調査が浜松市の主催事業で、この一連の報告書の対象である。第８次以降の調査は報告書の刊行開始以後に実施されたため、未報告のものがある。今後の報告書刊行事業では、こうした未掲載の資料も合わせ報告する。

2．伊場遺跡報告書の刊行状況と未掲載資料の残存状況を次表に示した。

表1　伊場遺跡発掘調査次と既報告関連図

内容＼調査次		第二次	第三次	第四次	第五次	第六次	第七次	第八次	第九次	第一〇次	第一一次	第一二次	第一三次
遺構		2	2	2		2	2						
木簡		×	1	1	1	1	1	4	4	4	4	4	×
木竹製品		×	3	3	3	3	3						
土器	弥生	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	
	古墳 大溝除く	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	×
	古墳 大溝下層	7	7	7	7	7	7	×	8	8	8	8	×
	奈良	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	
	墨書	×	4 8	4 8	4 8	4 8	4 8	4 8	4 8	4 8	4 8	4 8	
	平安以後	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	
土製品等		9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	
金属器等													
石器		9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	
自然遺物													
総括													

左図の1～8が既報告書第1冊～8冊で取り扱った範囲（濃い網掛けをほどこした部分）。9が本書で取り扱う範囲（粗い網掛け）である。図中の×印は、対象となる遺構・遺物が存在しなかった。空白は、対象物の有無を含め今後整理報告する部分。

この表は便宜的なもので、各区画の遺物量がすべて等しいというわけではない。

3．本書（第9冊）では、弥生時代環濠の北部と南部を中心に未報告のままだった、弥生時代出土品をとりまとめた。また、石器・小土製品を中心に掲載し、大溝内の小貝層についても整理経過を掲載した。金属器は一部をのぞき、今回は除外した。

4．本書の編集は浜松市博物館が行った。担当は、以下のとおりである。

弥生時代補遺編　　大野　勝美※　　中村　玲子

石器・土製品等　　太田　好治※　　澤田　ひろ子

※それぞれの章の執筆者

5．自然遺物の分析は（株）パリノサーヴェイに委託し、その成果品を得た。

6．掲載した出土品は、すべて浜松市博物館で保管している。

凡　　例

1．出土位置・層位については、当時の記載のとおりに表記した。

2．遺構その他については、従前の報告書に準拠している。

3．大溝内の小貝塚（貝層）A～Z、Z2、Z3は、「S」として略記した。すなわち、SA～SZ、SZ2、SZ3のように表記している。

4．方位は、当時、磁北であったが、城山遺跡、梶子遺跡での測量成果をもとに、真北を求めた。本書掲載の地形図・遺構図等は、真北を記入してある。

5．図中の標高は、海抜を示す。

目　　次

Ⅰ　伊場遺跡発掘調査の経過と遺跡の概要（太田）……1
　1．伊場遺跡の発掘調査……1
　2．調査成果の概要……3
Ⅱ　伊場遺跡の発掘区設定方法と出土品……6
　1．発掘区とその表記方法……6
　2．伊場遺跡大溝の層位と出土品……6

弥生時代出土品２（大野）……9
Ⅰ　調査と整理……9
　1．第４次・第12次発掘調査……9
　2．整理作業の経過と問題点……10
Ⅱ　遺構の概要……13
　1．地区表示の方法……13
　2．伊場遺跡の弥生時代遺構……13
　3．環濠名称の変遷……13
　4．各調査地区の遺構……14
Ⅲ　出土遺物……20
　1．第４次調査の出土遺物……20
　2．第12次１期調査の出土遺物……34
　3．第12次２期調査の出土遺物……58
Ⅳ　まとめ……75
　1．出土土器について……75
　2．伊場遺跡群について……92

石製品・土製品等報告（太田）……101
Ⅰ　石製品……101
　1．石製品の概要……101
　2．おもな出土遺物……102
Ⅱ　土製品ほか……118
　1．紡錘……118
　2．小形土製品……122
　3．陶馬……138

4．銅製耳環とガラス小玉 ……138
5．古墳時代祭祀遺構 ……140
Ⅲ　大溝内貝層 ……143
Ⅳ　まとめ ……146

付載　浜松市伊場遺跡の自然科学的分析　　パリノ・サーヴェイ株式会社 …… 150

挿図目次

第１図　伊場・城山・梶子遺跡群のこれまでの調査範囲…… 1
第２図　伊場遺跡本調査区全図（第３次～第13次）・年次区分図…… 2
第３図　弥生時代の伊場遺跡の調査範囲と概念図…… 3
第４図　伊場遺跡周辺の小字名とこれまでの発掘区…… 4
第５図　伊場遺跡周辺の旧地形とおもな遺跡・寺社の分布…… 5
第６図　伊場遺跡大溝と枝溝周辺の発掘区・発掘小区設定状況…… 7
第７図　A15ｄ区付近の大溝断面と各層出土土器模式図…… 8
第８図　ＹＴ１土器出土状態図（第４次調査東地区）……15
第９図　ＹＴ１土器出土状態図（第４次調査西地区）……16
第10図　東地区・中地区遺構図（第12次１期調査）……18
第11図　ＹＴ２土器出土状態図（第12次２期調査）……19
第12図　ＹＴ１出土土器実測図１（第４次調査東地区）……24
第13図　ＹＴ１出土土器実測図２・出土地不詳（第４次調査東地区）……25
第14図　ＹＴ７出土土器実測図１（第４次調査西地区）……26
第15図　ＹＴ７出土土器実測図２（第４次調査西地区）……27
第16図　ＹＴ７出土土器実測図３（第４次調査西地区）……28
第17図　ＹＴ７出土土器実測図４（第４次調査西地区）……29
第18図　ＹＴ７出土土器実測図５（第４次調査西地区）……30
第19図　ＹＴ７出土土器実測図６（第４次調査西地区）……31
第20図　ＹＴ７出土土器実測図７・その他出土土器実測図（第４次調査東地区）……32
第21図　釣針・土製品実測図（第４次調査）……33
第22図　ＹＴ７出土土器実測図・ＹＴ６出土土器実測図１（第12次１期調査中地区）……38
第23図　ＹＴ６出土土器実測図２（第12次１期調査中地区）……39

第24図　ＹＴ６出土土器実測図３（第12次１期調査中地区）……40
第25図　ＹＴ６出土土器実測図４（第12次１期調査中地区）……41
第26図　ＹＴ６出土土器実測図５（第12次１期調査中地区）……42
第27図　ＹＴ８出土土器実測図（第12次１期調査中地区）……43
第28図　土堤出土土器実測図１（第12次１期調査中地区）……44
第29図　土堤出土土器実測図２（第12次１期調査中地区）……45
第30図　土堤出土土器実測図３（第12次１期調査中地区）……46
第31図　環濠内側出土土器実測図１（第12次１期調査東地区）……47
第32図　環濠内側出土土器実測図２（第12次１期調査東地区）……48
第33図　環濠内側出土土器実測図３（第12次１期調査東地区）……49
第34図　環濠内側出土土器実測図４（第12次１期調査東地区）……50
第35図　環濠内側出土土器実測図５（第12次１期調査東地区）……51
第36図　環濠内側出土土器実測図６（第12次１期調査東地区）……52
第37図　窪地出土土器実測図（第12次１期調査東地区）……53
第38図　その他出土土器実測図（第12次１期調査）……54
第39図　環濠内側上層出土土器実測図１（第12次１期調査東地区）……55
第40図　環濠内側上層出土土器実測図２（第12次１期調査東地区）……56
第41図　ＹＴ１出土土器実測図・ＹＴ２出土土器実測図１（第12次２期調査）……60
第42図　ＹＴ２出土土器実測図２（第12次２期調査）……61
第43図　ＹＴ２出土土器実測図３（第12次２期調査）……62
第44図　ＹＴ２出土土器実測図４（第12次２期調査）……63
第45図　ＹＴ２出土土器実測図５（第12次２期調査）……64
第46図　ＹＴ９出土土器実測図１（第12次２期調査）……65
第47図　ＹＴ９出土土器実測図２（第12次２期調査）……66
第48図　ＹＴ９出土土器実測図３（第12次２期調査）……67
第49図　ＹＴ９出土土器実測図４（第12次２期調査）……68
第50図　その他出土土器実測図１（第12次２期調査）……69
第51図　その他出土土器実測図２・古式土師器（第12次２期調査）……70
第52図　土製品・石製品実測図１（第12次１期調査）……71
第53図　石製品実測図２（第12次１期調査）・石製品実測図（第12次２期調査）……72
第54図　形態分類図（１）……76
第55図　形態分類図（２）……78
第56図　西遠江の弥生後期土器編年図（１）……82
第57図　西遠江の弥生後期土器編年図（２）……84

第58図　装飾高坏と褐粘土帯の分布図……89
第59図　伊場遺跡の主な出土遺物……92
第60図　遺跡群と銅鐸関係品出土地……95
第61図　伊場遺跡出土石器実測図１……104
第62図　伊場遺跡出土石器実測図２……105
第63図　伊場遺跡出土石器実測図３……106
第64図　伊場遺跡出土石器実測図４……107
第65図　伊場遺跡出土石器実測図５……108
第66図　伊場遺跡出土石器実測図６……109
第67図　伊場遺跡出土石器実測図７……110
第68図　伊場遺跡出土石器実測図８……111
第69図　伊場遺跡出土石器実測図９……112
第70図　伊場遺跡出土石器実測図１０……113
第71図　伊場遺跡出土石器実測図１１……114
第72図　伊場遺跡出土石器実測図１２……115
第73図　伊場遺跡出土石器実測図１３……116
第74図　伊場遺跡出土石器実測図１４……117
第75図　伊場遺跡出土土製紡錘実測図１……120
第76図　伊場遺跡出土土製紡錘実測図２……121
第77図　伊場遺跡出土小形土製品実測図１……124
第78図　伊場遺跡出土小形土製品実測図２……125
第79図　伊場遺跡出土小形土製品実測図３……126
第80図　伊場遺跡出土小形土製品実測図４……127
第81図　伊場遺跡出土小形土製品実測図５……128
第82図　伊場遺跡出土小形土製品実測図６……129
第83図　伊場遺跡出土小形土製品実測図７……130
第84図　伊場遺跡出土小形土製品実測図８……131
第85図　伊場遺跡出土小形土製品実測図９……132
第86図　伊場遺跡出土小形土製品実測図１０……133
第87図　伊場遺跡出土小形土製品実測図１１……134
第88図　伊場遺跡出土小形土製品実測図１２……135
第89図　伊場遺跡出土小形土製品実測図１３……136
第90図　伊場遺跡出土小形土製品実測図１４……137
第91図　伊場遺跡出土陶馬実測図……138

第92図　伊場遺跡出土銅製耳飾・ガラス小玉実測図……139
第93図　伊場遺跡出土小形土製品実測図１５　祭祀遺構内……141
第94図　伊場遺跡　祭祀遺構内　主要土器出土状態図……142
第95図　伊場遺跡　大溝内　貝層分布図……144
第96図　伊場遺跡　大溝内貝層の年代観……145

写真図版

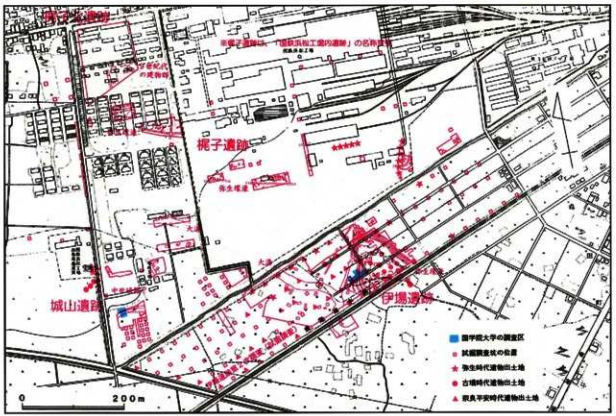
カラー写真図版１　伊場遺跡出土短甲状木製品　背当て、胸当て
カラー写真図版２　滑石製紡錘　製塩土器破片
写真図版１～８　弥生時代遺物（第４次調査）
写真図版９～１９　弥生時代遺物（第12次１期調査）
写真図版２０～２８　弥生時代遺物（第12次２期調査）
写真図版２９～３１　伊場遺跡発掘調査
写真図版３２～３６　土製品・石製品等

Ⅰ　伊場遺跡発掘調査の経過と遺跡の概要

1．伊場遺跡の発掘調査

伊場遺跡は、戦後市立西部中学校の生徒によって発見され、1949年に国学院大学が発掘調査を実施したのが最初である（文献９）。静岡県内では登呂遺跡の発掘調査が行われ、考古学上の成果に対する関心が非常に高まっていた時期にあたる。伊場遺跡は、浜松市における弥生時代遺跡発掘調査の端緒となった。またこの時、国学院大学は、後に城山遺跡と命名される浜名郡可美村地区内（当時：現在の浜松市東若林町）の発掘調査も合わせて実施し、富寿神宝や墨書灰釉陶器を検出するなどの成果もあげている。浜松市部分の弥生遺跡は、市民の希望もあって静岡県指定史跡となった。しかし、登呂遺跡のように本格的な調査は行われず、周辺整備も実施されたわけではない。

その後、国鉄東海道線の浜松駅周辺高架化計画にともない、伊場遺跡付近に貨物駅が移転する計画がおこってから事態が急転する。伊場遺跡の全容は不明のままであったので、浜松市教育委員会では、遠江考古学研究会の協力を得て、遺跡の広がりを確認するための調査を実施した。東海道本線とその北側に平行する堀留運河の間に、30mおきに試掘坑を開けるという比較的大規模な試掘調査であった。これを第２次調査と呼んでいる



第１図　伊場・城山・梶子遺跡群のこれまでの調査範囲

昭和32(1957)年の都市計画図を使用。これらの遺跡は広義の伊場遺跡群といえる。

この時、遺跡の範囲が指定地以外にも広範におよんでいることと、弥生時代以外、とくに律令期の遺構・遺物の存在がすでに予想されている（文献10）。

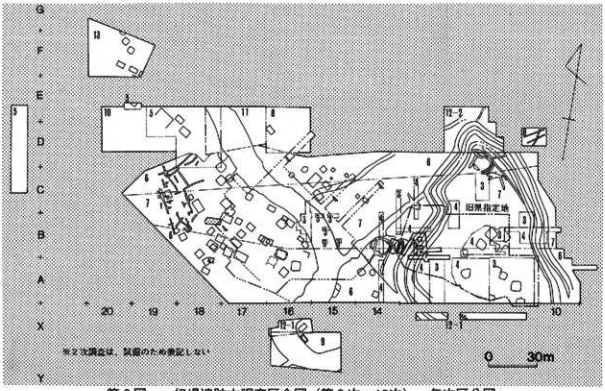
第３次以降の調査は、弥生環濠集落、５世紀代の集落などの重要な発見の上、さらに、地方としては当時きわめて多数の木簡群、墨書土器群と掘立柱建物跡群の検出など、考古学・古代史学上じゅうぶんに注目されるべき遺跡であることを明らかにしていった。

第６次、７次調査は、貨物駅開発に先だつ全面調査となった。しかし、線路下に遺構は埋め戻して保存することが確認された。調査区西半部の律令期建物跡群の下層に弥生時代の遺構が存在することは確かめられていたが、建物跡の保存を優先して、未調査とした。

第８次以降の調査は東海道線下の一部を除いて、保存用地の整備事業の一環とされた。伊場遺跡資料館の開館や博物館の建設計画が実現した。最後に実施された第13次調査は、伊場遺跡公園整備計画の中で行われ、遺構を検出したところで中断されている。

報告書の刊行事業は、第７次調査終了後から開始された。このため、初期の正式報告書では、第８次調査以降の報告が掲載されていないものがある。

その間、伊場遺跡周辺の、国鉄浜松工場内や、当時行政的には浜名郡可美村に所在した城山遺跡の発掘調査が次々に実施され、これらの遺跡は互いに関連して大規模な遺跡群を形成していることが想定できるようになった。これらの遺跡の調査内容は、伊場遺跡の正式報告書に先行して刊行されつづけている（文献17～26等）。



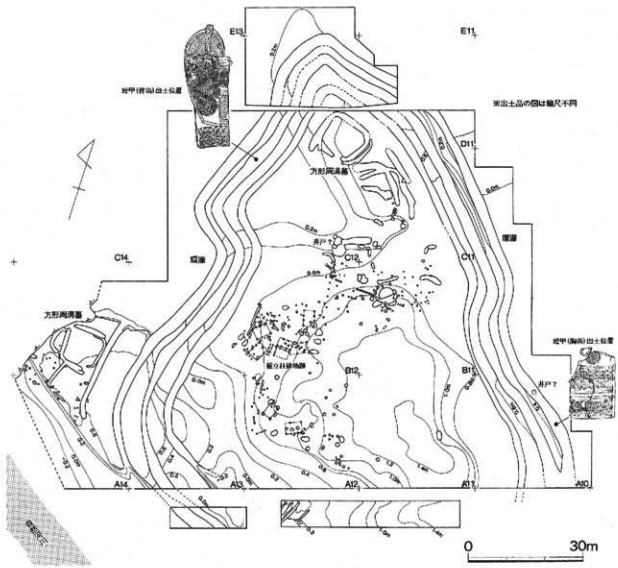
第２図　伊場遺跡本調査区全図（第３次～13次）・年次区分図

浜松市主催の第３～13次調査の範囲を示す。６、７次は３、４次調査区も再精査した。

2．調査成果の概要

伊場遺跡の調査は、西浜松貨物駅の用地を中心に、約80,000㎡の範囲で実施された。当時としては、大規模な調査であったが、現在でもなお、遺跡の全容が確認されたわけではない。発掘調査地区周辺に、未発掘区域を広く残している。先述した旧国鉄浜松工場内にある梶子遺跡や梶子北遺跡、旧可美村地区の城山遺跡は、遺跡名は便宜上別だが、広義には、伊場遺跡群とでもいうべき関連性の強い遺跡である（第２図参照）。これらすべてを合わせても、いまだ遺跡の１～２割程度が発掘されたにすぎない。

伊場遺跡（狭義）の発掘区東半では、弥生時代後期の環濠集落が発見された。基盤砂丘がひときわ高く残る部分を利用している。三重の環濠からは、おびただしい土器のほか、木製で精緻な彫刻と漆塗りがほどこされた短甲（写真図版１）が出土して注目された。



第３図　弥生時代の伊場遺跡の調査範囲と概念図

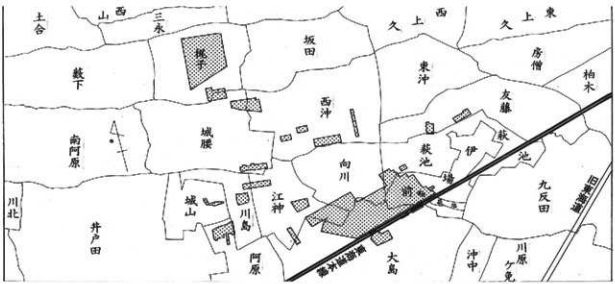
調査区以東は水田が予想されるが未発掘。以西は律令期遺構群保存のため、発掘不可。

弥生時代の集落の上から、西方にかけて、古墳時代中期の竪穴住居跡がひろがる。この住居跡群も砂丘頂部付近では、後世の耕作によって撹乱されており、これらの重複する要因が弥生環濠内の集落構造を明らかにするのに障害となった。

西半には律令期の掘立柱建物跡群が検出されているが、官衙の中心とするには規模や規格性がこころもとない。しかし、調査区の中央を南流する当時の自然河川「大溝」やその支流「枝溝」には、100点を越す木簡や大量の墨書土器、刀子などが投棄されていて、その内容から、敷智郡衙あるいは栗原駅家を調査区近在に推定する説が有力となった。敷智郡衙については、城山遺跡、梶子遺跡での調査成果によって、伊場遺跡よりも西方にその中心を推定することで、ほぼ確定したといってよかろう。駅家については、検討の仕方によっては、出土品の関連を郡衙施設に集約することも可能で、現段階でも傍証の域を出ない。以上詳細は、従前の正式報告書や概報類を参照していただきたい。

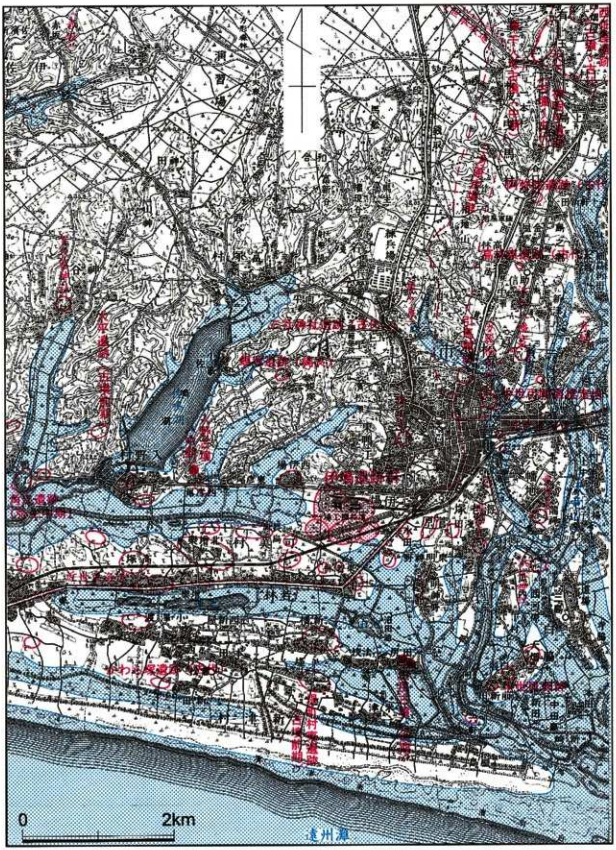
なお、梶子9次調査で、伊場大溝の延長と思われる溝が確認され、4世紀代の人工掘削の可能性が指摘された（文献26）。伊場大溝とはまだ200m離れた地区での見解であり、伊場地区での検証ができないので、ここでは従前の報告書にならっておく。

また、正式報告書第7冊までで、伊場遺跡南東、近世東海道の付近に、現浜松市街地方面から古天竜川の流路を推定していた（文献7）。けれども、その推定位置に近年高柳遺跡・浅間遺跡が相次いで確認された。したがって、古代においてこの付近に天竜川を推定することはできなくなった。むしろ、古天竜川を、瓜内町と三島町の間の低湿地などに比定し、近年まで「沼田池」が残存していたように、遠州灘から伊場遺跡付近まで天然の入江を想定したほうが、官衙の立地にも適しているように思われる（第5図参照）。



第4図　伊場遺跡周辺の小字名とこれまでの発掘区

城山遺跡北方から梶子付近には、東西、また南北方向の区画を読みとることができる。



第５図　伊場遺跡周辺の地形とおもな遺跡・寺社の分布

II　伊場遺跡の発掘区設定方法と出土品

1　発掘区とその表記方法

伊場遺跡の発掘調査は、国鉄（当時）東海道線と、その北側に並行して流れる堀留川にはさまれた東西に細長い区域を対象としていた（第1図参照）。第2次発掘調査での試掘位置を基本に、東海道線と南北横断道路の交点を基点（A1区）とした。一区は30m四方で設定され、東海道線に沿って西方向へABC列とし、北方向を123列とし、各発掘区を呼称することにした（第2図参照）。第3次以降の本調査は、この細長い敷地の中央付近に限られたため、出土品のほとんどは、東西列でいう10区から20区に集中している。

なお、東海道線以南の発掘にあたって、XY区が追加設定された（同図）。

ところで、第4次調査では、のちに「大溝」と呼称される河川の両側の調査が開始されている。この大規模な遺構の方向が、設定した発掘区に対して約45度斜行することが確認されていたので、発掘区も45度回転して再度設定している。この新発掘区も30m四方で、設定順にイロハで呼称している。したがって、大溝周辺では、出土位置について二通りの表記の仕方が生じている。本報告書では、発掘当時の記載のとおりに表記することにした。　さらに、各区は10m四方の小発掘区9区に細分されている。これをABC列の場合は英小文字のa～iで示し、イロハ区の場合は英数字の1～9で示している（第6図参照）。すなわち、ABC区では「A15b区」、イロハ区では「リ4区」のように表示される。つづけて示されているのは出土遺構または層位で、大溝ではローマ数字、その他ではABCを使用して表記されている。層位の詳細は、従前の報告書を参照していただきたい。

2　伊場遺跡大溝の層位と出土品

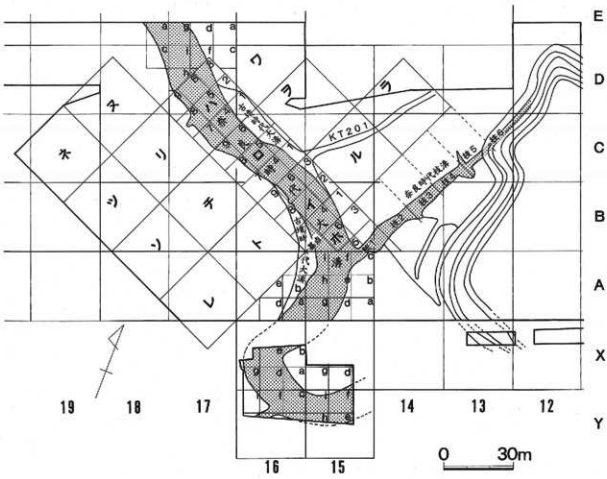
大溝の層位は、旧表土（I層）から順に下へ㈥層まで命名されている。これらは、さらに小層位に区分されているが、流路であることもあって、すべての調査区で統一的には認識されていない。調査当時、V層以上に奈良時代以降の遺物が存在し、Ⅶ層以下には古墳時代の遺物が存在すると認識されていたが（第7図参照）、V層内にも河川の攻撃斜面を中心に古墳時代の土器が集中する部分が数カ所で確認されている。これらは、浸食によって、流路肩部のより古い層位を取り込んだか、下層から巻き上げたものと考えられた。

V層とⅣ層の区分は明確ではない。この層位の認識は、各調査小区ごとに異なったのではないかという印象を受ける。流路での調査ではいたしかたないところであろう。この点では、東海道線以南で行われた、第9次調査の部分（X、Y区）での土器の混在する状況がより本質といえる。東海道線以北（A区以北）では、意識的に灰釉陶器と須恵器が分層されすぎている可能性がある。「灰釉陶器が出土するうちはⅣ層」とする認識がなかったとはいえない。ともあれ、流路を中心とする遺跡・遺物の発掘は、20年前の調査技術（とくに土木機械・排水処理等）では困難が多々あったものと想像する。

大溝の層位と出土品については、先の報告書（文献８）にまとめ、当時の調査担当者の見解も得た。今回報告するうち、古墳時代から平安時代にかけての石製品や土製品、また貝塚内出土遺物は、上記の年代推定要因の制約を前提とせざるを得ない。

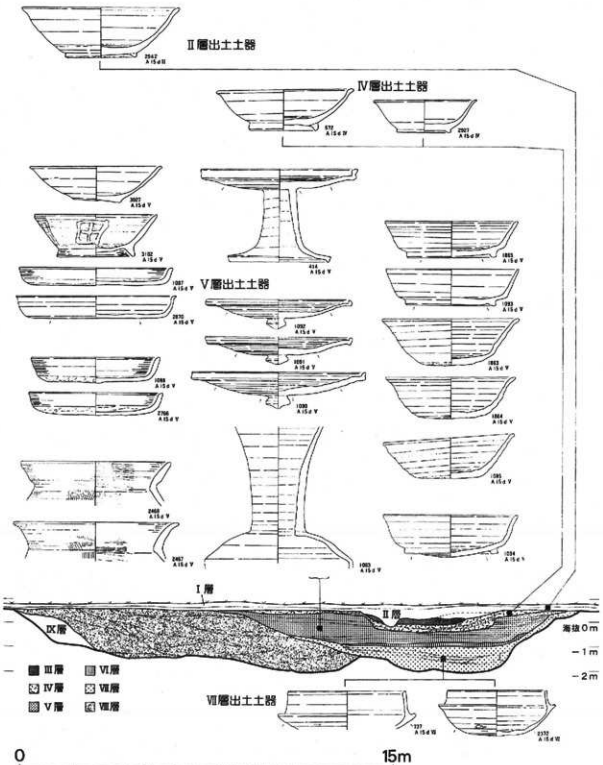
今回の報告でも遺物掲載にあたっては、出土位置の北から順に小発掘区ごと、できる限り層位ごととする方針を採用した。図版上では、近在する土器群のまとまりをある程度視覚的に把握できるものと思う。なお、溝内に廃棄された小貝塚（貝層）から出土した資料は、表記からその個体を追跡できたので、そのことは土器番号下に略号で表現した。ただし、階層の年代観も必ずしも安定したものばかりではない。

残念ながら、調査成果のすべてをここに再現することはできなかった。けれども、掲載した出土品については、何等恣意的な操作をしないで掲載してあるので、出土品の分析方法によっては、より有効な資料を提供できることになったと考えている



第６図　伊場遺跡大溝と枝溝周辺の発掘区・発掘小区設定状況

伊場遺跡では、当初（第２次調査）、堀留運河と東海道本線に平行して発掘区を設定していた。第４次調査で、大溝の方向に沿って、A15区北西杭を基点に45度変更した発掘区を想定した。このため、大溝周辺では、二通りの表記が用いられることになった。



第7図　A15d区付近の大溝断面と各層出土土器模式図

A15区付近の大溝断面と、A15d区出土土器を層位別に模式的に示した。V層には混入品もあるが、この層位区分は、おおよそ発掘当時の見解と一致するものと思われる。

弥生時代出土品2

I　調査と整理

1．第４次・第１２次発掘調査

伊場遺跡では1949年から1980年の期間に13次におよぶ発掘調査がおこなわれているが、そのなかで本編が関係しているのは第４次調査と第12次調査である。第12次調査はさらに１期調査と２期調査に分かれている。両者は同じ第12次調査と呼ばれているが、異なった期間にまったく別の地区が調査されている。そこで本編では、記述が複雑になることを避けるために、両者を別調査なみに扱うことにする。すなわち、第４次調査、第12次１期調査、第12次２期調査に３分して記述を進める。

＜第４次調査＞

第４次調査は1971年６月26日から1972年３月27日にかけて実施された。調査地区は伊場遺跡の全域にわたり、総調査面積が約 7,400㎡におよぶ大規模な発掘調査であった。伊場遺跡の東側から環濠を中心とする弥生時代の遺構が検出され、西側から大溝および掘立柱建物群を中心とする律令制時代の遺構が検出された。既刊の『月報』（文献１）では、弥生時代の遺構がある東側を東部地区と呼び、律令制時代の遺構がある西側を西部地区と呼んでいる。したがって本編もそれに従うことにする。西部地区からは弥生土器がほとんど出土していないので、記述の中心は東部地区になる。

東部地区には約10ヶ所の調査地区とトレンチが設定された。そしてそのなかの東寄りに位置するＢ10ｈ区（伊場遺跡の地区表示による）およびＢ11ｂ区と、西寄りに位置するＢ12ｉ区およびＣ12ｇ区から大量の弥生土器が出土した。本編では、このＢ10ｈ区およびＢ11ｂ区を第４次調査の東地区と呼び、Ｂ12ｉ区およびＣ12ｇ区を第４次調査の西地区と呼ぶことにする。

第４次調査について記述したものとしては、調査期間中に出された『月報』１～６とそれらを１冊の本にしたものがある（文献１）。

＜第１２次１期調査＞

第12次１期調査は1978年５月下旬から同年８月下旬にかけて実施された。調査地区は国鉄東海道線の線路敷にあたり、東西方向へ一直線に並ぶ３ヶ所が設定された。それぞれを第12次１期調査の西地区、中地区、東地区と呼ぶことにする。西地区からは弥生土器がほとんど出土していないので、本編では触れない。

第12次１期調査についての概要は、『国鉄東海道線線路敷内埋蔵文化財発掘調査報告書』（文献２）に示されている。

＜第１２次２期調査＞

第12次２期調査は1978年９月１日から同年12月２日にかけて実施された。調査地区は３重環濠の北端部分にあたり、調査面積は約 1,100㎡であった。その調査目的の一つに環濠の北端を明らかにすることがあった。そして、予想していた通り、東西から伸びた各３本の溝は北端でそれぞれ接続してい

ることが確認された。

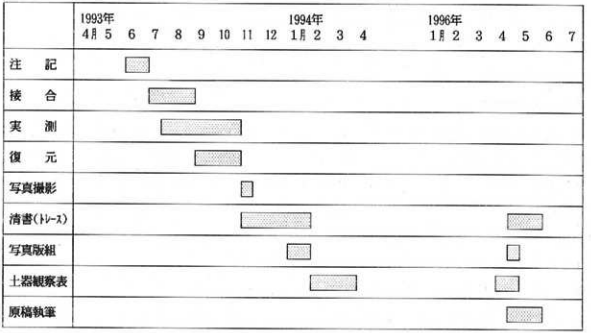
第12次２期調査についての概要は、『伊場遺跡第８～13次発掘調査概報』（文献３）の中に「第12次発掘調査」として示されている。

２．整理作業と問題点

・整理作業の経過

第４次・第12次１期・第12次２期の発掘調査で出土した弥生土器は、40cm×55cm×15cmのポリコンテナに約 120箱という大量のものであった。各コンテナには現場で洗浄・乾燥された土器片が８～12個のビニール袋に分けて詰められ、それぞれの袋には遺物取上番号と出土地区を表示した荷札が付けられていた。

整理作業は発掘現場のない、比較的手のすいた期間を利用して、小人数で地道に進めることになった。まず1993年６月に土器片の注記からはじめた。しかし長期間保存していたためか、土器片の表面がもろくなっているものが多く見られ、そのためバインダー液を塗布したのちに注記する必要があった。その後、整理作業は土器片の接合、実測図の作成、土器の復元、写真撮影、図面の清書（トレース）、写真版組、土器観察表の作成と地道ながら順調に進んでいった。詳細は下記の整理作業工程表に示した通りである。しかし1994年の４月になると、１年６ヶ月という長期間の発掘現場作業が入り、整理作業の中断を余儀なくされた。そしてその現場作業が終わった後も引き続いて２ヶ所の現場が入り、整理作業を再開したのは1996年４月になってからであった。



整理作業工程表

・既報告の弥生土器

今回整理した土器は出土後、第４次調査で24年、最も新しい第12次２期調査でも18年の歳月が経過している。したがってこの間に各調査で出土した完形品および完形品に近い土器はすでに抜き出され、既刊の『伊場　第４次発掘調査月報合本』『伊場遺跡第12次１期調査概報』『伊場遺跡遺物編３』（文献４）で報告されている。本編では、これらの既報告土器も再度載せることにする。ただし、それらの実測図の大部分は既報告図面を再トレースしたものであり、また写真図版も過去に撮影されたものを多く使用している。

既報告土器は第４次調査で８点、第12次１期調査で13点、第12次２期調査で９点存在する。そのうちの第12次１期調査の２点は見つけ出すことができなかった。

既報告土器の本編における図面番号と既刊報告書の図面番号の関係を別表に示した。

・整理作業の問題点

今回の整理作業を進めるにあたって３つの問題点があった。第１点は、情報量が非常に少ないことである。各調査は現地作業が終わってすでに約20年が経過しているため、担当者に詳細な記憶がなく、また遺物台帳等の記録も失われているからである。例えば、最も情報量の少ない第４次調査の場合を見てみよう。当時の人手不足や伊場遺跡保存問題による混乱のためと思われるが、特に弥生時代の遺構に関する図面が少なく、本編の第８図および第９図に示した土器出土状態図と数枚の土層断面図が残っているだけである。さらに悪いことには、遺物取上台帳が残っていなかった。そのために出土状態図に描かれている土器と実物を照合するのに非常に苦労することとなった。完形品に近い土器でも図面に番号が入っていないのは、土器を特定できなかったからである。

第２点は、不明品や混入品が存在することである。土器が入ったビニール袋には、調査次数、出土地区、取上番号が記載された荷札が付けられていた。しかし、長期間にわたる保管のために荷札が破損または紛失しているものが多く存在した。また落下などの事故があったのであろうか、調査次数だけが記載されたポリコンテナに土器片が山積みされていたものもあった。これらについては、極力、正確な出土地区を調べる努力をしたが、それでも不明なものは出土地不詳とした。

第３点は、筆者の力量不足である。今回の整理をはじめる以前は伊場遺跡の発掘調査についてほとんど何も知らなかった。そこで急遽、各報告書を開いて調べはじめたのである。しかし時間的な制約があるため、一方で過去の発掘調査について調べながら、一方で整理作業を進めるという状況にならざるを得なかった。そのために今から考えると整理作業の進め方や図面の配列等で反省すべき点が多くある。

このような状況から、土器の遺構別分類は大まかなものにならざるを得なかったし、環濠の層位による分類もしていない。しかし本編の最大の意義は、第４次・第12次調査によってこのような土器が出土している、と実測図と写真図版を提示できる点にあると考える。

	本編の図面番号	第４次発掘調査月報合本の図面番号	伊場遺跡第12次１期調査概報の図面番号	伊場遺跡遺物編３（別冊図版）の図面番号
第４次調査	2	1		93
	3			90
	4	30		86
	5	2		87
	6	15		92
	7			88
	8			85
	9			96
	10	14		97
	12			95
	13			99
	17	40		101
	18			103
	22	48		107
	23	22		112
	37			559
	44			562
	59			564
	60			565
	61			560
	70			561
	72			566
	119			568
	130			569
	134			876
	135			883
	136			885
	137			882
	138			881
第12次1期調査	3		11	907
	26		2	903
	50		4	906
	103		8	911
	124		6	913
	126			910
	148		13	
	154		9	909
	192		1	905
	222		3	904
	281		12	908
	290		5	912
第12次2期調査	1			490
	3			492
	15			523
	20			525
	32			533
	33			537
	65			538
	74			539
	81			540

第1表　既報告土器図面番号対照表

II　遺構の概要

1．地区表示の方法

伊場遺跡では南北180m、東西840mの範囲にグリッドが設定され、各調査はこのグリッドに基づいて実施されている。したがって本編においても調査地区や出土位置を表示する場合にこのグリッド名を使用する。

各グリッドは次のように設定されている。まず最初に30m間隔で東西方向に線を引き、各線に挟まれた区間を南からY、X、A～Dとする。次に30m間隔で南北方向に線を引き、各線に挟まれた区間を東から1～28とする。そして両者が交差している一辺の長さ30mの区画が大グリッドである。例えばC12Kと言えば、C区間と12区間が交差している区画を指す。大グリッドはさらに一辺の長さ10mの中グリッドに細分されている。中グリッドは、大グリッドの南東隅にあるaから始まり、順次北および西に進み、北西隅がiとなるように設定されている（第6図参照）。例えばC12e区と言えば、C12区の真ん中にある中グリッドを指す。基準杭については、各中グリッドの北東端に打たれているものをその中グリッドと同じ名称で呼んでいる。基準杭は図面上で十字線で示した。

2．弥生時代の遺構

伊場遺跡は東側の弥生時代遺構と西側の律令制時代遺構に大別される。本編が関係しているのは東側の弥生時代遺構である。弥生時代遺構は海岸平野に形成された第二砂堤列の高みを利用し、周囲に三重の環濠をめぐらせた集落がつくられている。その規模は外濠で測って東西約120m、南北約140mであり、環濠集落としてはやや小規模である。環濠内側からは多数の小穴群と土坑群が検出され、これらの小穴群は掘立柱建物の柱穴、土坑群は土坑墓であったと推定されている。また竪穴住居も検出されている。環濠内側北端とセ氏側環濠外からは複数の方形周溝墓が検出されており、墓域を形成していたと考えられている。土器は環濠から膨大な量が出土している。今回整理した分も加えると、総個体数は約4700点を越え、完形品および復元された土器だけでも優に1000点を越えている。

3．環濠名称の変遷

環濠の名称は検出された順序にしたがって付けられている。最初に環濠の一部が検出されたのは第3次調査のときであった。穴（ピット）と考えられ、ＹＰ１と名付けられた。次の第4次調査では、ＹＰ１が溝となることが確認され、ＹＴ１と訂正された。またこの第4次調査では、他にＹＴ５までの４条の溝が発見されている。第6次調査では、さらにＹＴ６からＹＴ９までの４条の溝が発見され、調査の進展に伴って、ＹＴ３とＹＴ６、ＹＴ４とＹＴ７が接続していることが確認された。そのため、これらの溝はＹＴ６、ＹＴ７に統一された。第6次調査が終了した時点で、弥生時代遺構の東側で内

側からＹＴ１、ＹＴ２、ＹＴ９の３条の溝が発見されており、西側で内側からＹＴ７、ＹＴ６、ＹＴ８の３条の溝が発見されていた。そして、それぞれの溝は接続して三重の環濠になるであろうと推測されていた。それが確認されたのは本編の第12次調査である。１期調査によって南端が接続することはほぼ確実となり、２期調査によって実際に北端が接続していることが確認された。

このように現在では環濠名称が非常に複雑なものとなっている。位置関係が簡単にわかるように環濠名称を変更しようと考えたが、既刊報告書との関係でさらに複雑さを増す恐れがあるため、本編もあえて従来どおりの名称で呼ぶことにする。各報告書等で使用している環濠名称を下表に示す。

		３次	４次	６次	遺構編	12次１期	12次２期	本　編
東側	外	－	－	ＹＴ９	ＹＴ９	－	ＹＴ９	ＹＴ９
	中	－	ＹＴ２	ＹＴ２	ＹＴ２	－	ＹＴ２	ＹＴ２
	内	ＹＰ１	ＹＴ１	ＹＴ１	ＹＴ１	－	ＹＴ１	ＹＴ１
西側	内	－	ＹＴ４	ＹＴ７	ＹＴ７	ＹＴ７	ＹＴ７	ＹＴ７
	中	－	ＹＴ３	ＹＴ６	ＹＴ６	ＹＴ６	ＹＴ６	ＹＴ６
	外	－	－	ＹＴ８	ＹＴ８	ＹＴ８	ＹＴ８	ＹＴ８

環濠名称の変遷

４．各調査区の遺構

＜第４次調査＞

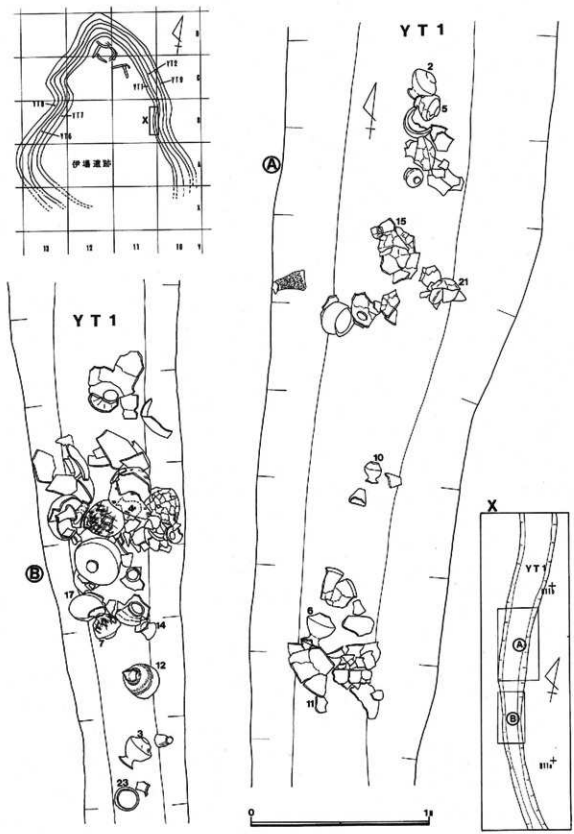
第４次調査は調査地区が伊場遺跡全域におよぶ大規模な調査であり、弥生時代遺構のある東部地区だけでも約10ヶ所の調査地区およびトレンチが設定された。しかし弥生土器の大部分はそのなかの東地区と西地区から出土したものである。したがって他の調査地区およびトレンチに関する記述は省略する。

東地区は伊場遺跡の地区表示でＢ10ｈ区とＢ11ｂ区にあたり、Ｂ11ｂ区では南北方向に伸びるＹＴ１が検出され、Ｂ10ｈ区では南北方向に伸びるＹＴ２が検出された。ＹＴ１からは大量の弥生土器が出土しており、第８図のＹＴ１土器出土状態図に示したとおりである。そしてＹＴ２からも弥生土器が出土したはずであるが、今回の整理品のなかにはそれに相当する土器は見当たらなかった。

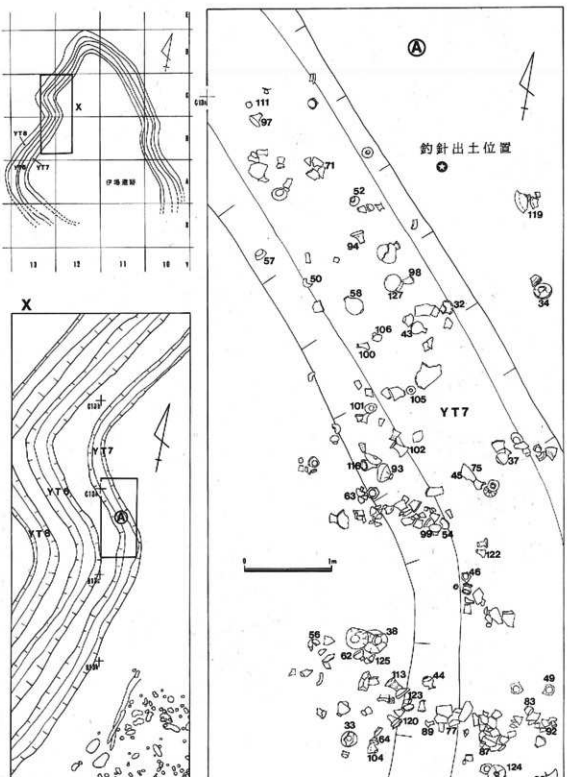
西地区は伊場遺跡の地区表示でＢ12ｉ区とＣ12ｇ区にあたり、ここから南北方向に伸びるＹＴ７が検出された。ＹＴ７からも大量の弥生土器が出土している。第９図のＹＴ７土器出土状態図に示したとおりである。広範囲な図面が残っていたため、土器の出土地点が比較的明確になっている。またＹＴ７に近接した地点から銅製釣針が発見された。図上に星印で示した地点が出土位置であり、三重環濠の内側にあたる。

＜第12次１期調査＞

弥生時代の遺構は中地区と東地区から検出されている。中地区では、中央部を斜めに切るＹＴ６と、その二位側からＹＴ８が検出された。また東側からＹＴ７と推定する溝の一部が検出されたが、その



第8図　YT1土器出土状態図（第4次調査東地区）



第9図　YT7土器出土状態図（第4次調査西地区）

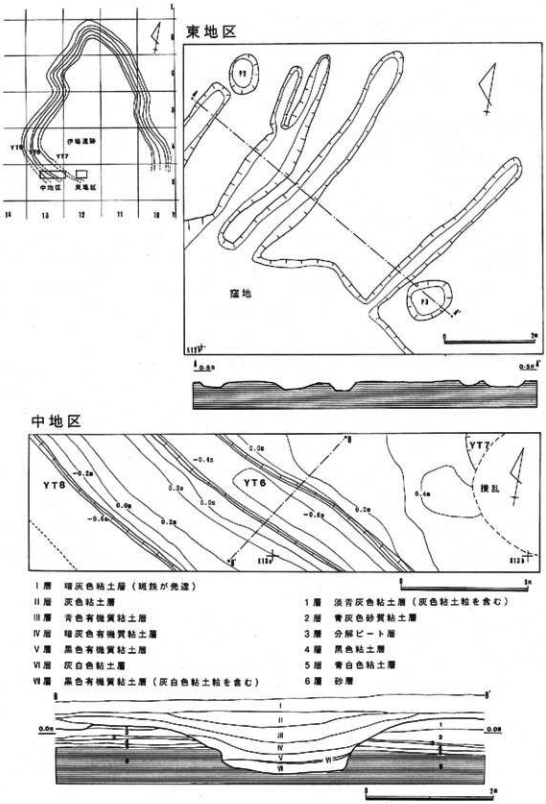
大部分は攪乱されていた。ＹＴ６とＹＴ７の中間に幅約５ｍの土を盛り上げた遺構があり、既刊の報告ではこれを土堤と呼んでいる。本編も土堤と呼ぶことにする。土器はＹＴ６とＹＴ８からも出土しているが、それほど多いものではなかった。大量に出土したのは前期した土堤からであり、ここに土器片が密集していた。ここから出土した土器を土器実測図では「土堤出土土器」（第28図～第30図）と表示した。

東地区では、竪地と溝状遺構および小穴が検出された。東地区の南西隅を中心にして深さ20cmの窪地があり、この窪地から４条の溝状遺構が北東方向に伸びていた。その位置関係からみて、おそらく竪地の近くにＹＴ７があると推測される。また溝状遺構に接して２個の小穴が検出された。土器は主に窪地を中心とした南半部分から大量に出土しており、土器実測図では、窪地から出土した土器を「窪地出土土器」（第37図）と表示し、それ以外（溝状遺構を含む）から出土した土器を「環濠内側出土土器」（第31図～第36図）と表示した。また出土地点が明確でない土器を「その他出土土器」（第38図）と表示した。他に、主としてＸ12ｆ区の上層から出土した古式土師器がある。これを「環濠内側上層出土土器」（第39図・第40図）と表示した。

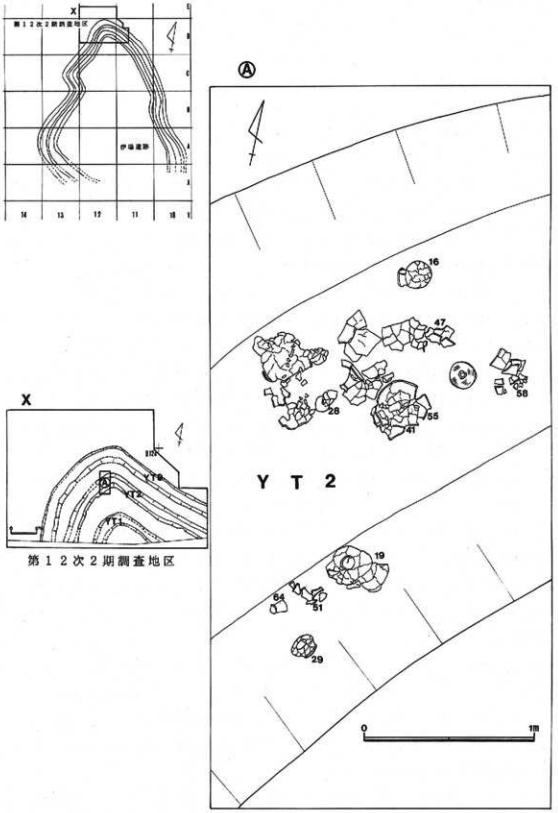
＜第12次２期調査＞

２期調査では、調査地区の西側で内側からＹＴ７、ＹＴ６、ＹＴ８が検出され、東側で内側からＹＴ１、ＹＴ２、ＹＴ９が検出された。そして、ＹＴ７とＹＴ１、ＹＴ６とＹＴ２、ＹＴ８とＹＴ９が接続して、文字通り環濠になることが確認された。既刊の報告書では環濠名称が東側と西側で異なっているが、本編では記述が複雑になるのを避けるために、ＹＴ１、ＹＴ２、ＹＴ９に統一する。

土器の大部分は３条の環濠から出土したものであるが、出土位置および出土状態がわかる記録は第11図に示したＹＴ２土器出土状態図だけである。土器実測図では、各環濠から出土した土器を「ＹＴ１出土土器」（第41図）、「ＹＴ２出土土器」（第41図～第45図）、「ＹＴ９出土土器」（第46図～第49図）と表示した。少数であるが環濠以外から出土した土器もあり、これを「その他出土土器」（第50図・第51図）と表示した。古式土師器（第51図）も５点ほど含まれていた。



第10図　東地区・中地区遺構図（第12次1期調査）



第１２次２期調査地区

第11図　YT2土器出土状態図（第12次2期調査）

III　出土遺物

1．第4次調査の出土遺物

＜弥生土器＞

・東地区ＹＴ1出土土器（第12図・第13図）

1～15は壺であり、そのほとんどが体部下半に稜をもつ。1は折返口縁部を有し、口唇部にハケメ、口縁部内側に櫛描波状文が施されている。2は折返口縁部に棒状貼付文をつけ、頸部と肩部の境に突帯がめぐらされている。肩部に櫛描横線文、櫛刺突列点文、櫛描扇状文が交互に施されている。3は無文である。4は肩部に櫛描横線文と扇状文が交互に、口縁部内側に扇状文が施されている。5は肩部に櫛描横線文と櫛刺突列点文が交互に施されている。また口唇部に棒状貼付文、肩部に円形貼付文がつけられている。6は肩部に横線文、波状文、扇状文が交互に、口縁部内側に波状文が施されている。7は肩部に櫛による縦線および斜格子文、口縁部内側に櫛描扇状文が施されている。また胴部に楕円形の貼付文がつけられている。8は肩部に横線文と波状文が施され、体部中央は横方向のヘラミガキが行われている。9は口唇部に櫛刺突列点文が施され、体部に横方向の丁寧なヘラミガキが行われている。10は肩部に波状文、扇状文、横線文を交互に、口縁部内側に扇状文が施されている。11はラッパ状に開く口縁部をもち、口唇部の断面が円頭状につくられている。頸部と口縁部内側にヨコナデが行われている。これは天竜川以東の菊川式、あるいは菊川式の影響を受けた土器である。12は口縁部を欠いている。肩部に櫛押圧列点文、櫛描横線文、波状文、櫛刺突列点文を交互に施されている。体部下半に横方向のヘラミガキが行われている。13も口縁部を欠いている。上げ底であり、体部下半に横方向と縦方向のヘラミガキが行われている。14は体部を欠いている。肩部に櫛刺突列点文が施され、頸部と口縁部内側にヘラミガキが行われている。これは菊川式、あるいは菊川式の影響を受けた土器である。15は長頸壺の口縁部である。外面は縦方向のヘラミガキが行われた後で赤彩されている。

16は高坏の口縁部である。折返口縁部をもち、その下面に指頭圧痕が見られる。菊川式あるいは菊川式の影響を受けた高坏である。

17～21は台付甕である。17はくの字状に強く曲がる口縁部と浅い体部をもち、口唇部の角に刻目が入れられている。また体部と台部の接合部分に粘土帯がまかれている。18は胴長の体部をもつ。台部を欠いている。19は口唇部の断面が円頭状につくられ、角に刻目が入れられている。20は口唇部にやや広い面をもち、角に長い刻目が入れられている。21は口唇部の全面に刻目が入れられている。これは三河以西で使われている調整技法である。

22と23は鉢である。22はくの字状に屈折した口縁部とやや上げ底の底部をもつ。外面は体部上半に斜方向のハケメ、体部下半にヘラミガキが残っている。23は口唇部にやや内傾する面をもつ。口縁部に櫛刺突列点文、体部上半に櫛描横線文と扇状文が施されている。

・出土地不詳（第13図）

24は壺の肩部の破片である。低い突帯上に櫛刺突羽状文が施されている。菊川式の影響を受けた土器であろう。

25と26は台付甕である。25は球形の体部にくの字状に屈折する口縁部をもつ。26はS字状の口縁部を有するものであり、外面に刺突文が施されている。

27と28は高坏の口縁部である。27は浅い椀状の坏部であり、内外面に細かなヘラミガキが行われている。28は折返口縁部の角に刻目が入れられ、口唇部に縄文が施されている。天竜川以東の菊川式の影響を受けた土器である。

29は器種不明である。櫛描横線文と櫛刺突列点文が交互に施されている。

30は手づくねの高坏であり、脚部に細かなヘラミガキが行われている。

31は壺蓋の破片であり、小孔が見られる。指頭圧痕とヘラミガキが残っている。

・西地区ＹＴ７出土土器（第14図～第20図）

32～73は壺である。32～42は折返口縁部をもち、他は単純口縁部をもつ。32は口唇部に棒状貼付文、肩部に円形貼付文がつけられている。口唇部と口縁部内側に櫛描波状文が施され、肩部に波状文、横線文、扇状文が交互に施されている。33は肩部と頸部の境に低い突帯がめぐらされ、口縁部内側に波状文、肩部に波状文と横線文が施されている。34は口唇部に棒状貼付文がつけられ、口縁部内側に異なる波長の波状文が施されている。35は口縁部内側に水平面をもち、そこに波状文が施されている。36は口唇部に棒状貼付文がつけられ、口縁部内側の水平面に縄文が施されている。菊川式の影響を受けた土器であろう。37は口縁部内側に櫛刺突羽状文、肩部に横線文や扇状文が施されている。38～40は口縁部内側に櫛刺突羽状文、41と42は口縁部内側に波状文が施されている。42は口唇部に端面をもち、そこにヨコハケが見られる。43は口縁部が外反して開き、肩部に櫛押圧横線文が施されている。44は口縁部が外反して開く小型壺であり、外面が体部で縦方向、頸部で横方向のヘラミガキが行われている。45は口縁部内側に波状文、肩部に櫛描波状文と横線文が交互に施されている。頸部と体部下半に丁寧なヘラミガキが行われている。46は口縁部内側にヘラミガキと扇状文が施されている。47は口唇部の断面がやや円頭状につくられている。48は口唇部に５個１組の棒状貼付文がつけられ、口縁部内側に櫛描波状文と横線文が施されている。49は口唇部に棒状貼付文がつけられている。50は肩部に横線文と波状文が施されている。51は直線状に開く口縁部をもち、頸部外面にヘラミガキが行われている。菊川式の影響を受けた土器である。52は口唇部をやや肥厚し、その面上に櫛刺突列点文が施されている。また口縁部内側に櫛刺突列点文、頸部に櫛押圧横線文が施されている。53と54は無文である。55は口唇部の断面が尖頭状につくられている。56は口唇部に棒状貼付文がつけられ、口縁部内側に櫛刺突列点文が施されている。57は肩部と頸部の境に低い突帯がめぐらされ、やや内湾した口縁部をもつ。口唇部の断面が円頭状につくられている。58は肩部に櫛描による斜格子文と波状文が施されている。59は胴部に稜をもつ小型壺である。60は肩部と頸部の境に突帯がめぐらされた小型壺であ

る。両者とも口縁部を欠いている。61は肩部に横線文と波状文が交互に施されている。62は胴部に強い稜をもつ。63は肩部に数段の櫛刺突羽状文が施され、体部下半に横方向のヘラミガキが行われている。64は頸部に縦方向のヘラミガキが行われ、肩部に縄文が施されている。65は頸部と肩部の境に櫛押圧横線文、肩部に縄文が施され、体部下半に縦方向のヘラミガキが行われている。底部は上げ底である。66～69は肩部の破片であり、縄文が施されている。63～69は天竜川以東の菊川式の影響を受けた土器であろう。70は磨滅のため調整等は不明である。頸部から上を欠いている。71は平底の底部、72はやや上げ底気味の底部、73は上げ底の底部である。

74～88は台付甕である。74～78は体部上半の破片であり、すべて口唇部の角に刻目が入れられている。外面は斜方向のハケ調整、内面は横方向の板ナデが行われている。79は口唇部に刻目が入れられていない。80～82は口縁部の小破片であり、すべてに刻目が入っている。83～88は台部の破片である。88は接合部分に粘土帯が巻かれ、その上に指頭圧痕が残っている。

89～ 124は高坏である。89～91は坏部の途中に稜をもち、口縁部が大きく外反するものである。口唇部の断面は、89が尖頭状に、90は方頭状に、91は円頭状につくられている。92は浅い椀状の坏部の破片であり、口唇部に内傾面がある。内外面とも、縦方向の丁寧なヘラミガキが行われた後で赤彩されている。93は坏部の途中に弱い稜をもち、口唇部が円頭状につくられている。スカシ孔は3方向にもつ。94～ 114はすべてラッパ状に開く脚部である。102と104が脚端に端面をもつが、他はすべて断面が円頭状または尖頭状につくられている。外面は、103と104の無文のものを除き、すべて櫛描横線文や櫛刺突列点文等が施されている。107は二枚貝による刺突文、108は竹管文が施されている。またすべて縦方向のヘラミガキが行われている。スカシ孔は97と 103が4方向にもち、他のものは3方向にもつ。98は未貫通のスカシ孔を2個1組で4方向にもつ。99は表面の一部に赤彩が残っている。
112～114は複合口縁状の脚台部をもつ高坏、いわゆる伊場の装飾高坏と呼ばれているものである。112と113は脚柱部に櫛描横線文と櫛刺突列点文が交互に施され、脚台部に鍔状突帯がめぐらされている。113の外面はヘラミガキが行われている。113は脚台部の上部に長方形のスカシ孔を4方向にもち、下部に切り込みを4方向にもつ。114と115は脚台部の小破片であり、低い鍔状突帯がめぐらされている。 115は外面に強いヨコナデが見られる。 115については多少疑問も残るが、装飾高坏の破片と見てよかろう。

116～123は漏斗状の坏部と複合口縁状の脚部を有する高坏であり、天竜川以東の菊川式あるいは菊川式の影響を受けた土器である。117～119は折返口縁部をもち、下面に指頭圧痕または刻目が見られる。坏部と脚部の接合部分に断面三角形の突帯が116と120で1条、119と123で2条巻かれている。122ではこの接合部分に、櫛押圧横線文が施されている。116、120、121 は脚端部に縄文が施されている。坏部と脚部の外面は縦方向のヘラミガキが行われ、坏部の内面は横方向のヘラミガキが行われている。124も菊川式の影響を受けた高坏であろう。

125～131は鉢である。 125は内湾した口縁部をもち、外面に顕著なヨコナデが見られる。126は口

縁部の外面に櫛刺突列点文、肩部に櫛描横線文と波状文が施されている。127は口縁部に櫛刺突列点文が施されており、外面に縦方向の細かなヘラミガキが行われている。128は折返口縁部を有し、内外面とも横方向のヘラミガキが行われている。菊川式の影響を受けた土器であろう。129は内湾した口縁部をもつ。130は体部下半に明確な稜をもつ小型鉢である。131は内湾気味の口縁部をもつ。132は下端が欠損しているために断定はできないが、おそらく鉢であろう。133は台付鉢の台部と推測する。

・その他出土土器（第20図）

134は壺である。なめらかに外反して開く口縁部をもち、肩部に櫛押圧横線文と櫛刺突列点文が施されている。口唇部の断面が尖頭状につくられている。菊川式の影響を受けた土器であろう。

135は口唇部の断面が尖頭状につくられた小型鉢である。

136は高坏である。稜をもち内湾気味に開く深い坏部と直線的に開く脚部をもつ。

137と138は口縁部を欠く小型壺である。両者とも、外面に縦または斜め方向に細かなヘラミガキが行われている。

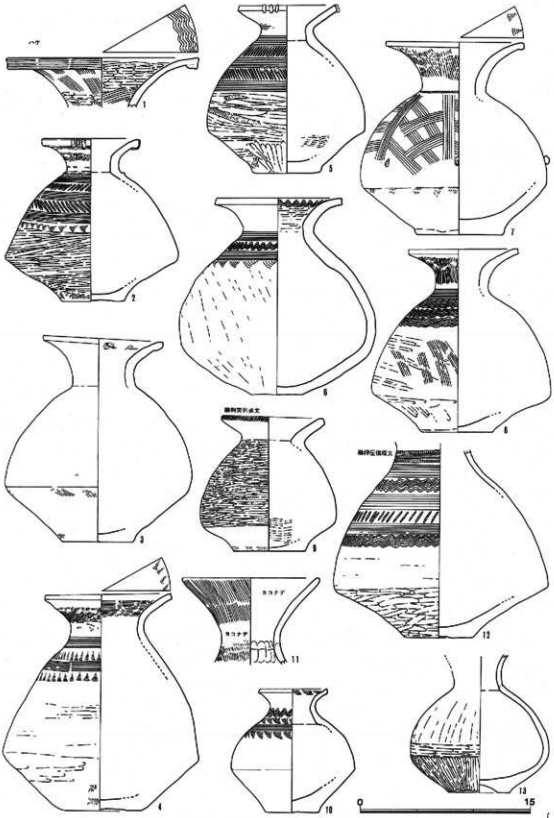
＜釣針・土製品＞（第21図）

1は銅製釣針である。縦8.2cm、横4.3cm、径 0.7cm、重さ29.5ｇを測る。出土地点は西地区のＣ12ｇ区であり、内側の環濠（ＹＴ７）からわずかに内部に入った地点である。第21図に実測図（原寸大）、第９図に正確な出土地点を示した。釣針の科学分析の結果は次のとおりである（文献５）。蛍光Ｘ線法による化学組成の測定では、主として銅・スズ・鉛の合金であり、アンチモン、銀が微量含まれることが明らかになった。また鉛同位体比法による原料産地推定では、釣針の材料は朝鮮半島製であることがわかった。朝鮮半島産の銅利器は青銅伝来の初期に位置づけられていることから、この釣針は古い時期につくられたものか、あるいは古い銅製品を鋳潰してつくられたものと考えられる。

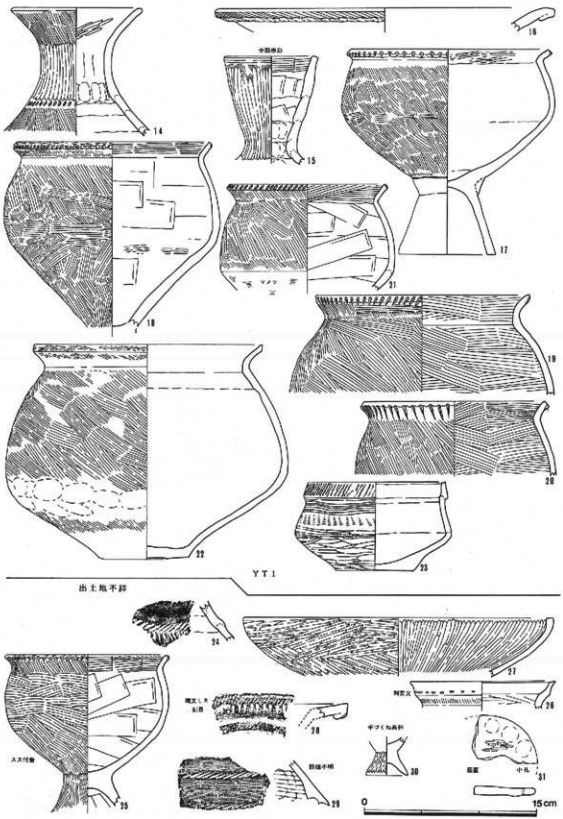
2は算盤玉状土製品であり、径4.1cm、厚さ3.4cm、重さ49ｇを測る。中央部が穿孔されており、紡錘車である可能性がある。西地区のＣ12ｇ区から出土した。

3と4は土製紡錘車であり、3が径6.4cm、厚さ1.6cm、重さ現37ｇ、4が径4.4cm、厚さ1.5cm、重さ現27ｇを測る。両者とも中央部が穿孔され、4の表面には指頭圧痕が残っている。これらは西地区のＢ12ｉ区から出土した。

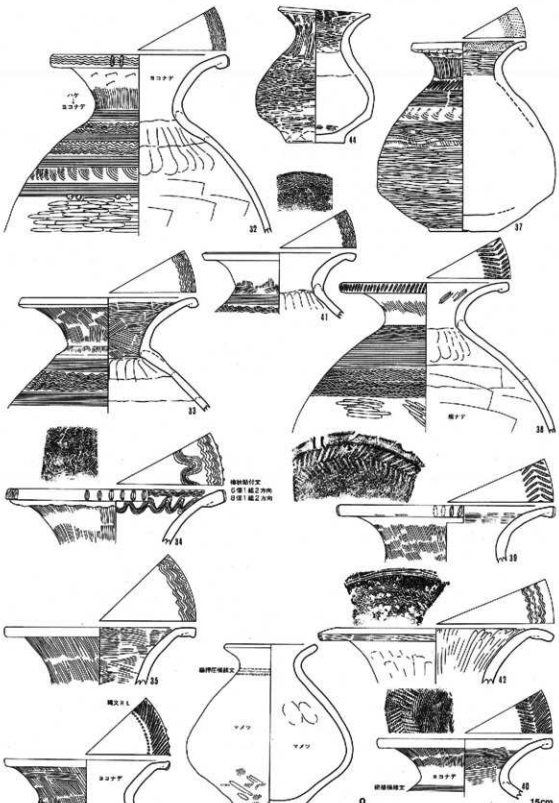
5は壺形土製品であり、最大径3.6cm、高さ4.7cmを測る。中央部が穿孔されており、表面下部には指頭圧痕が残っている。西地区のＢ12ｉ区から出土した。



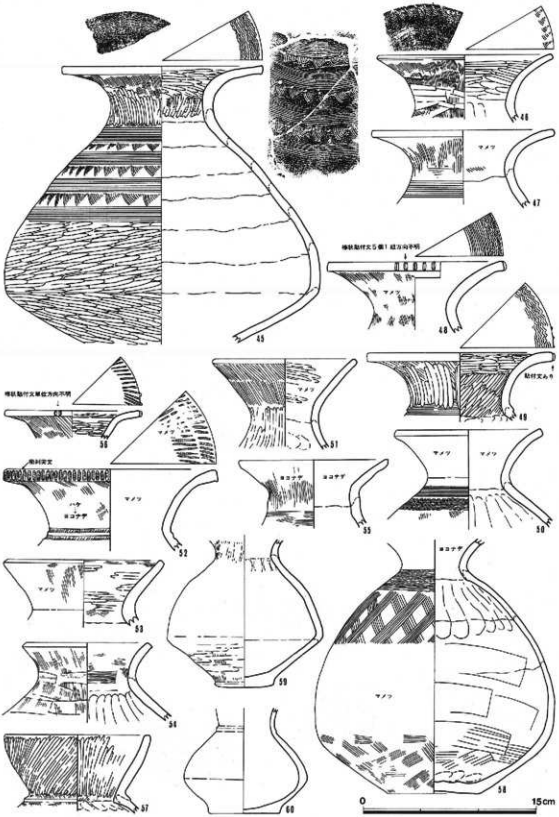
第12図　YT1出土土器実測図1（第4次調査東地区）



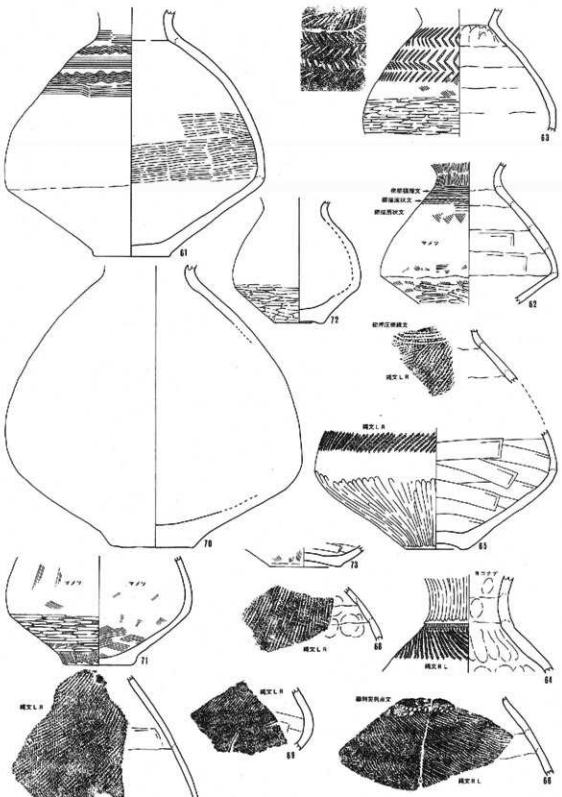
第13図　YT1出土土器実測図2（第4次調査東地区）・出土地不詳（第4次調査）



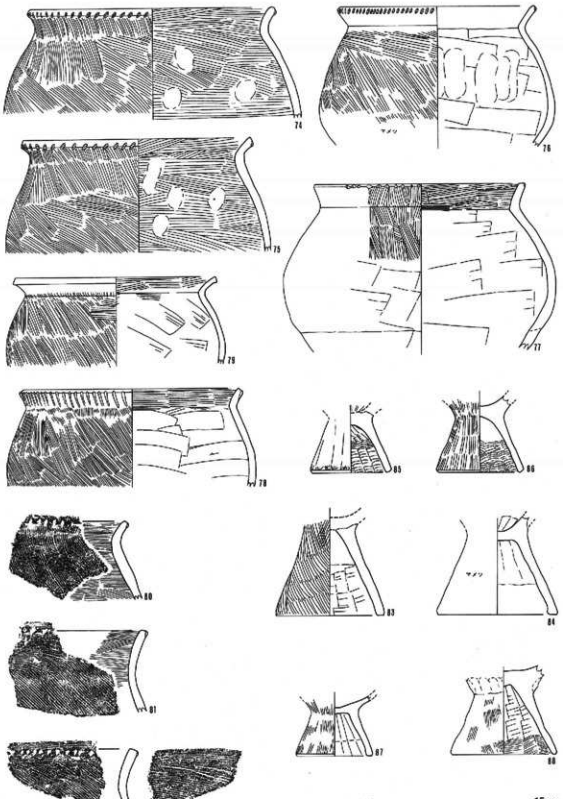
第14図　YT出土土器実測図1（第4次調査西地区）



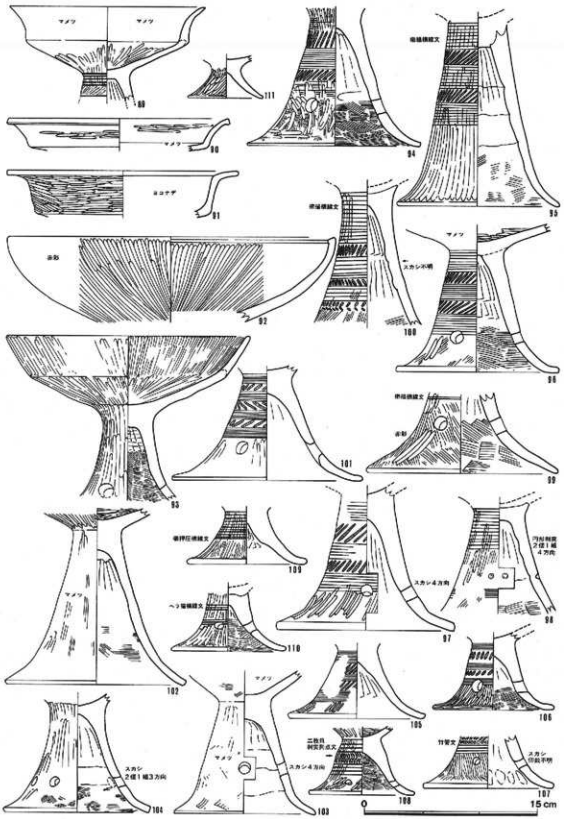
第15図　YT7出土土器実測図2（第4次調査西地区）



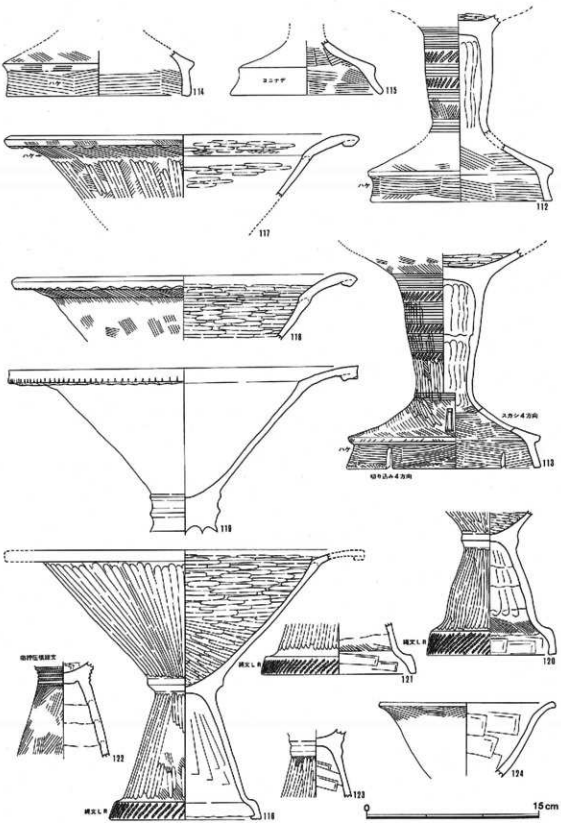
第16図　YT7出土土器実測図3（代4次調査西地区）



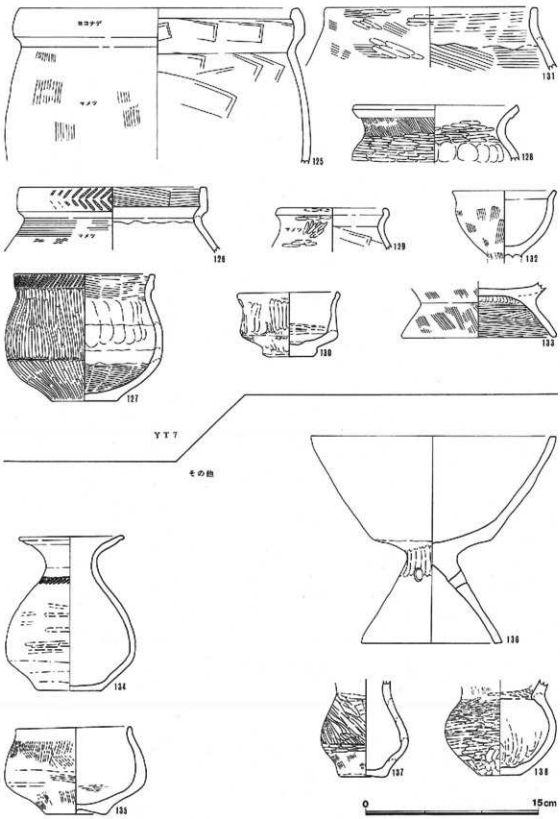
第17図　YT7出土土器実測図4（第4次調査西地区）



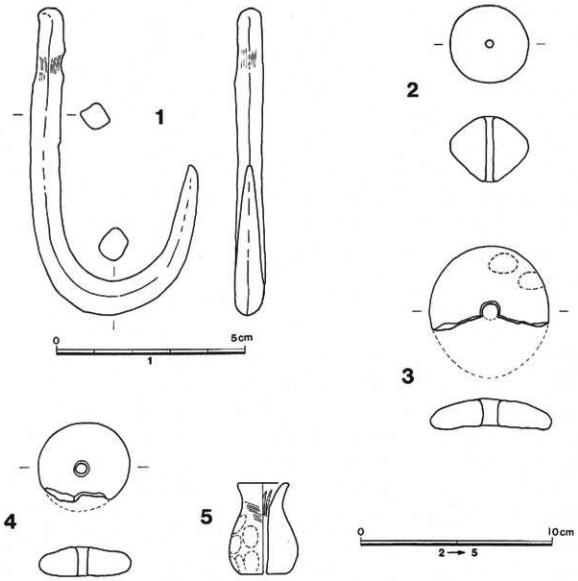
第18図　YT7出土土器実測図5（第4次調査西地区）



第19図　YT7出土土器実測図6（第4次調査西地区）



第20図　YT7出土土器実測図7・その他出土土器実測図（第4次調査西地区）



第21図　釣針・土製品実測図（第4次調査西地区）

2．第12次１期調査の出土遺物

＜弥生土器＞

・中地区ＹＴ７出土土器（第22図）

１～３は壷である。１は口縁部の先端がわずかに屈曲している。２は平底の底部である。３は小型壷であり、口唇部の断面が尖頭状につくられている。口縁部にヨコナデが行われている。４と５は高坏の口縁部の破片であり、４は坏部の途中に稜をもち大きく外反している。５は折返口縁部をもつ漏斗状の坏部である。天竜川以東の菊川式あるいは菊川式の影響を受けた土器である。

・中地区ＹＴ６出土土器（第22図～第26図）

６～58は壷である。そのなかの６～25が口縁部の破片、32～49が肩部の破片、52～58が底部の破片である。６～10は折返口縁部をもち、口唇部に明瞭な端面をもつ。８は口唇部に櫛刺突列点文が施され、６・７・９は口縁部内側に波状文が施されている。20～24は口縁部が内湾している。45は櫛刺突羽状文が施されている。46～49は縄文が施されている。これらは菊川式の影響を受けた土器であろう。50は体部下半に明瞭な稜をもち、肩部に４条の櫛押圧横線文が施されている。菊川式あるいは菊川式の影響を受けた土器である。51は口縁部を欠き、また磨滅のために文様や調整等は不明である。52～53は上げ底、54と58はやや上げ底気味となっている。また54は裏面に木葉痕が残されている。

59～82は台付甕である。59～65が体部上半および口縁部の破片であり、66～82が台部の破片である。63は口唇部に面をもち、面上に刻目を入れている。これは三河以西で使われている調整技法である。64は口唇部の断面を尖頭状につくり、やや内湾している。65は折返口縁部の小破片であろう。菊川式の影響を受けた土器であろう。66～82は台付甕の台部であり、外面はすべて縦または斜方向のハケ調整が行われている。69・74・75の脚端にヨコナデが見られる。77～82は体部と台部の接合部分に粘土帯がまかれ、粘土帯の上に指頭圧痕が残っている。西遠江だけに見られる技法である。

83～103は高坏である。83～85、89～91、102が坏部の破片であり、86～88、92～ 101、 103が脚部の破片である。89は碗状の坏部であり、口唇部に明確な内傾面をもつ。内外面とも細かなヘラミガキが行われている。92と93は脚端部の破片である。肥厚した面上に櫛刺突羽状文を施している。99～101は伊場の装飾高坏と呼ばれている高坏の脚部であり、屈折部に鍔状突帯がめぐらされている。100は鍔状突帯の上面に櫛刺突羽状文が施されている。上部のスカシは４方向にある。99の上部は、縦方向のヘラミガキが行われている。102は折返しをもつ鍔状口縁部の破片であり、103は脚端を台状に屈曲させた脚部の破片である。102と103は菊川式あるいは菊川式の影響を受けた土器である。

104～108は鉢である。104は小型鉢と思われるが、ワイングラス形の小型高坏である可能性もある。外面が横方向のハケ調整が行われている。 106は台付鉢である。台部に三角形の切り込みを４方向にもつ。外面は縦方向のヘラミガキが行われ、内面は横方向にナデ調整が行われている。107は肥厚した口縁部の破片である。108は直線状に開く口縁部をもつ小型鉢である。内外面とも細かな縦方向のヘラミガキが行われている。

・中地区ＹＴ８出土土器（第27図）

109～111は壷である。109は口唇部の断面がやや円頭状につくられている。内外面とも横方向のハケ調整が行われている。110は口唇部の断面を尖頭状につくった小型壷である。外面はハケ調整が行われ、内面に指頭圧痕が残っている。111は壷の体部であり、外面に横方向のヘラミガキを行っている。

112～117は台付甕である。112と113は体部上半の破片であり、外面に斜方向のハケ調整、内面に横方向の板ナデが行われている。114はハケ調整した後で横方向のナデ調整が行われている。115～117は接合部分に粘土帯がまかれた台部の破片である。

118～121は高坏である。118は漏斗状の坏部であり、口唇部の断面が尖頭状につくられている。119と120はラッパ状に開く脚部であり、脚端の断面が尖頭状につくられている。スカシはない。121は外面に縦方向のヘラミガキが見られることから、高坏の脚部であろう。接合部分に粘土帯がまかれている。

122～126は鉢である。122は鉢の口縁部の小破片であり、ヘラ状工具によって斜格子文が施されている。123は小型鉢である。外面下部に指頭圧痕、内面に板ナデが見られる。124は片口鉢であり、口縁部に櫛刺突列点文が施されている。125は折返口縁部をもち、内外面ともヘラミガキが行われている。126は折返口縁部をもち、口唇部に縄文が施されている。外面上部は斜方向のハケ調整、外面下部は横方向のヘラミガキが行われている。内面は丁寧な横方向のヘラミガキが行われている。菊川式あるいは菊川式の影響を受けた土器である。

・中地区土堤出土土器（第28図～第30図）

127～147は壷である。127は折返口縁部をもち、口縁部の内側に波状文が施されている。128は分厚い折返口縁部をもち、129は口唇部が下方に拡張され、端面上に櫛刺突横線文が施されている。130は磨滅が甚だしい。133は口縁部内側に波状文が施され、内外面にヨコナデが行われている。134は口縁部外面にヨコナデが見られる。135は口縁部がやや内湾し、口唇部にヨコナデが見られる。136は広く開いた複合口縁部の破片であり、２個１組の棒状貼付文をつけている。137は長頸壷の口縁部であり、赤彩されている。138は肩部に扇状文等が施されている。139は体部の断面がおむすび形をしており、底面に木葉痕がある。140～142は肩部の小破片であり、141に櫛描Ｊ字文、142に縄文が施されている。143は器種不明の小破片であり、外面にＵ字形の貼付文がつけられている。144～147は底部の破片であり、144と146がやや上げ底、145と147が平底である。148は蓋であり、中央に円錐状の把手がついている。

150～165は台付甕である。155～165が台部の破片であり、155～158は接合部分に粘土帯がまかれている。155は粘土帯の上にヒレ状のものがつけられている。同様なものが伊場遺跡から過去に２点出土している。154は口縁部および台部が内湾している小型甕であり、端部に顕著なヨコナデが見られる。

166～188は高坏である。166～171は坏部の破片であり、中途に稜をもち口縁部が外反している。167・170・171は口唇部に明瞭な面をもつ。173～175は内側に稜をもち水平方向に屈折する口縁部の破片である。176は碗状の坏部である。174には小孔がある。183と184が装飾高坏の脚台部、181が装飾高坏の脚柱部であろう。

189と190は鉢である。190の口縁部に櫛刺突羽状文が施されている。

・東地区環濠内側出土土器（第31図～第36図）

191～256は壺である。191～202が折返口縁部をもち、203～219が単純口縁部をもつ。191は口唇部に5個1組の棒状貼付文を4方向につけ、口唇部と口縁部内側に波状文、肩部に横線文、波状文等が交互に施されている。192は算盤玉状の体部をもち、口縁部内側に波状文、肩部に横線文と波状文が交互に施されている。193は断面三角形の口唇部に6個1組の棒状貼付文を4方向につけている。119は口縁部内側に羽状縄文が施されている。200は口唇部にややド方に拡張された端面をもち、面上に櫛刺突羽状文が施されている。221は口唇部が下方に大きく拡張され、面上に櫛刺突羽状文が施されている。これは三河以西の土器に見られる手法である。222はやや内湾した口縁部と口唇部に面をもつ。外面は縦方向のハケ調整が行われている。菊川式あるいは菊川式の影響を受けた土器である。232～256は肩部の小破片である。232は櫛描J字文が見られる。254～256は縄文が施されている。菊川式の影響を受けた土器であろう。

257～259は装飾鉢である。

260～262は坩であり、縦方向の細かなヘラミガキが行われている。

263～277は台付甕であり、263～272が体部上半、273～277が台部である。

278～282は大型鉢と小型鉢である。278は内外面にヘラミガキが行われている。

283と284は蓋であり、283に未貫通の小孔、284に貫通の小孔がある。

285～304は高坏である。

・東地区窪地出土土器（第37図）

305～309、315～318は壺である。306は細い頸部にヘラミガキが見られる。菊川式の影響を受けた土器である。315は細線で山形文が施されている。316は口唇部が垂下され、端面に竹管文が施されている。三河以西の土器に見られる調整手法である。317には縄文が施されている。318は壺の底部であり、刺痕が2つ残っている。

310～313、319～321は台付甕である。311は口唇部の面上に刻目が入れられている。三河以西の土器に見られる調整手法である。313は脚端の断面が尖頭状であり、接合部分に粘土帯がまかれている。

314、322は高坏である。314は2個1組のスカシ孔を3方向にもつ。

323はおそらく極小鉢であろう。外面下部に多くの指頭圧痕が残っている。

・その他出土土器（第38図）

324～337は壺である。326は横線文と大きな波状文を描いた後に縦方向のヘラミガキが行われてい

る。329はやや内湾した口縁部の破片である。331は口縁部外面と口唇部に縄文が施されている。天竜川以東の菊川式の影響を受けた土器であろう。 332は肩部の小破片であり、縦横の細かな櫛描波状文が施されている。

338～340は台付甕である。340は接合部に粘土帯がまかれている。

341 は壷であろうか。太く短い口縁部をもち、外面にハケメが見られる。

342～346は高坏である。344は装飾高坏の脚柱部と考える。345の外面に櫛押圧横線文がある。 346は外面にヘラミガキが見られることから高坏の脚部と推測する。

347～349は鉢である。347は内面もヘラミガキが行われている。

＜古式土師器＞

・東地区環濠内側上層出土土器（第39図～第40図）

350～368はＳ字状口縁部台付甕であり、350～360が口縁部の破片、361～364が台部の破片、365～368が体部の破片である。350～354は１段目が垂直に立ち上がる口縁部をもち、外面に押引が見られる。355～357、359～360は頸部に沈線をもち、口縁部が大きく外に開いている。 364は脚端が折返されている。

369～378は甕である。369はＳ字状口縁部台付甕の模倣品であろう。370は口縁部が内湾し、内外面に顕著なヨコナデが見られる。 376は、タタキ調整された痕跡が残っている。371と372は磨滅が甚だしい。 378はスリバチ状の甕である。

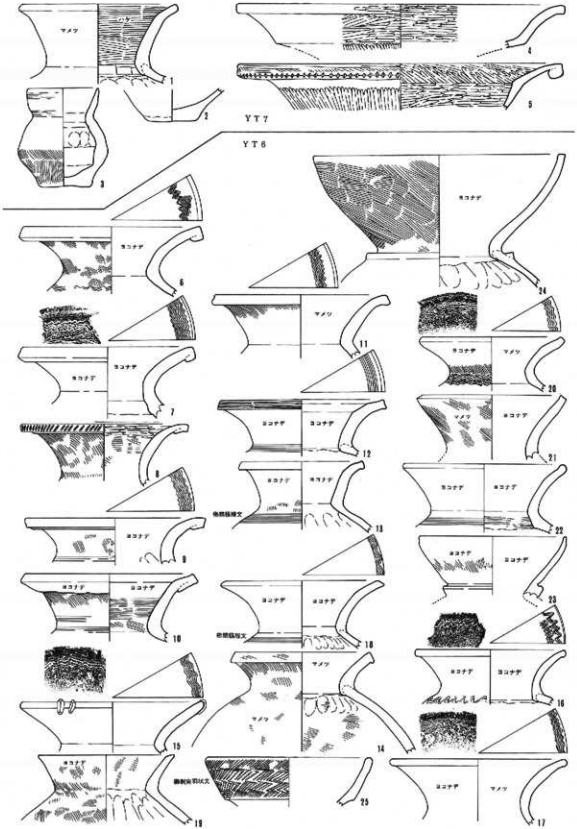
379 は下部が欠損しているため明確ではないが、おそらく小型鉢であろう。

380～387は高坏である。380と381は台部が内湾している。 382は直線的にのびた長い口縁部と尖頭状の口唇部をもつ。386はワイングラス形高坏の破片であろう。

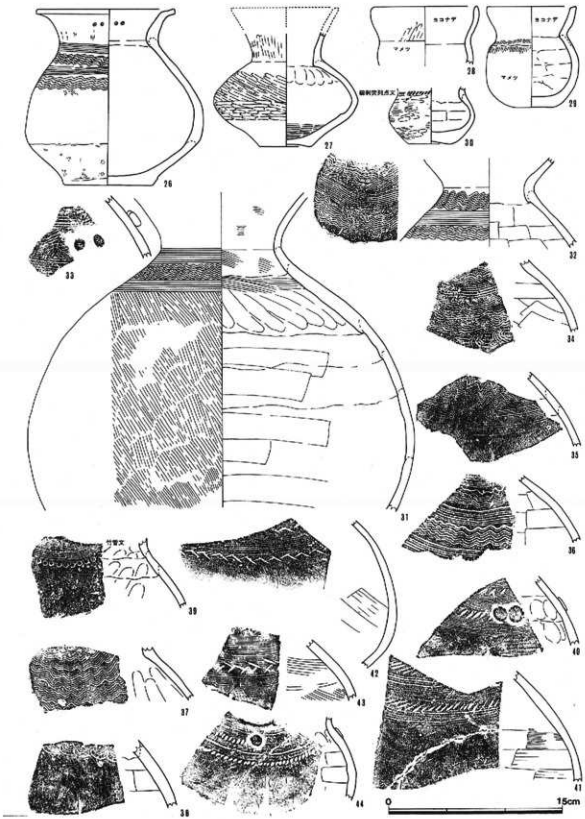
388～401は壷である。389～395の口唇部は断面が尖頭状につくられている。 399は櫛描による山形文が施されている。

＜石製品・土製品＞（第52図～第53図）

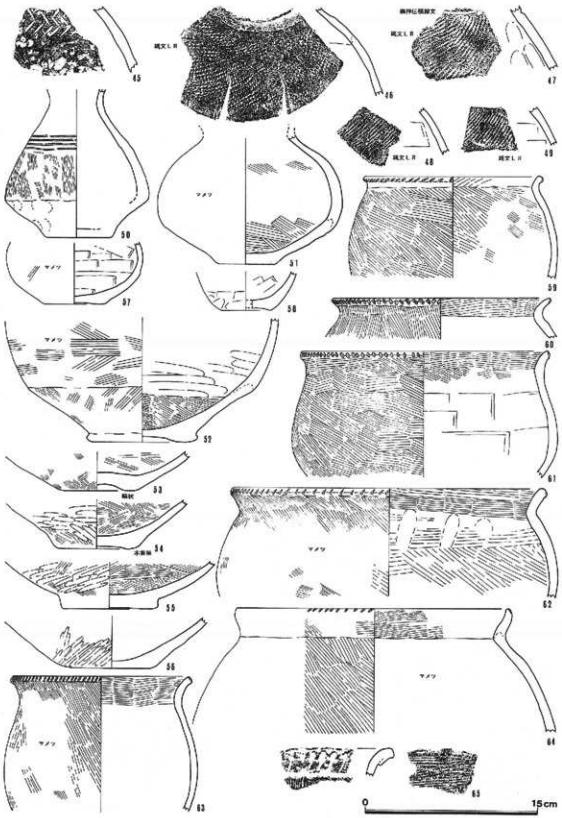
１は磨製石斧であり、長さ16.7cm、幅5.4cm、厚さ3.3cmを測る。２は叩石、３～４は磨石、５～13は凝灰岩製の砥石である。それぞれには明瞭な使用痕が残っている。14は算盤玉状土製品であり、約半分が欠損している。15～21は軽石であり、全面を使用したと見られる痕跡が残っている。



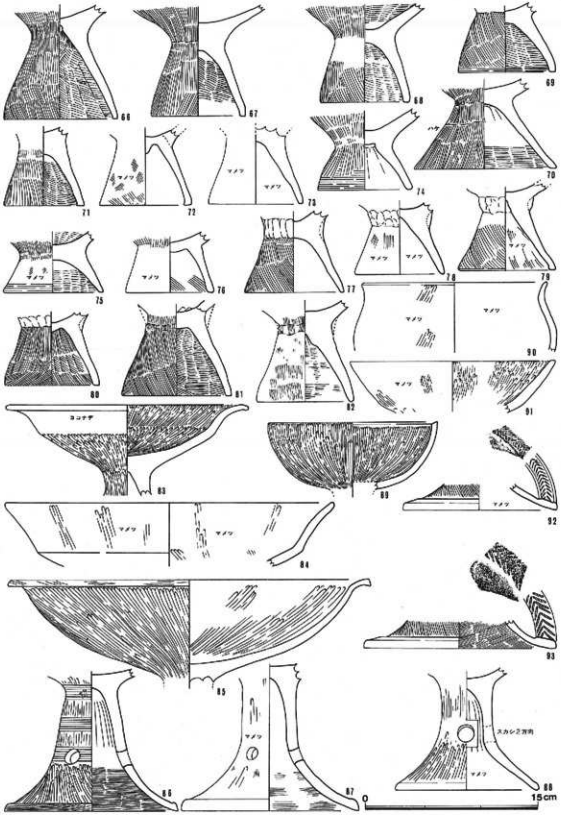
第22図　YT出土土器実測図・YT6出土土器実測図1（第12次1期調査中地区）



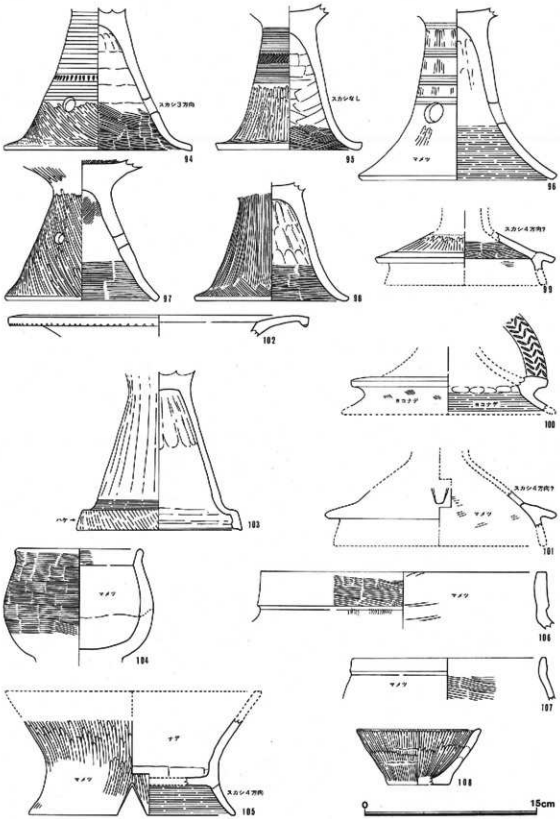
第23図　YT6出土土器実測図2（第12次1期調査中地区）



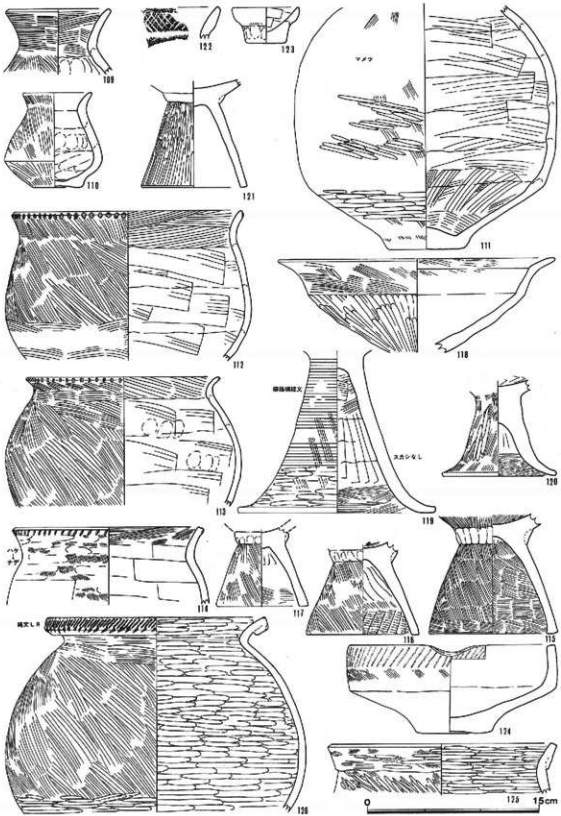
第24図　YT6出土土器実測図3（第12次1期調査中地区）



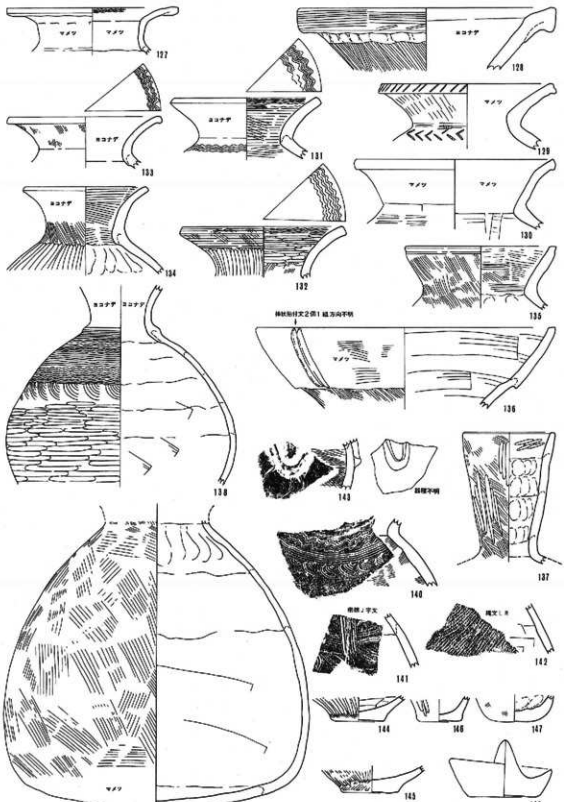
第25図　YT6出土土器実測図4（第12次1期調査中地区）



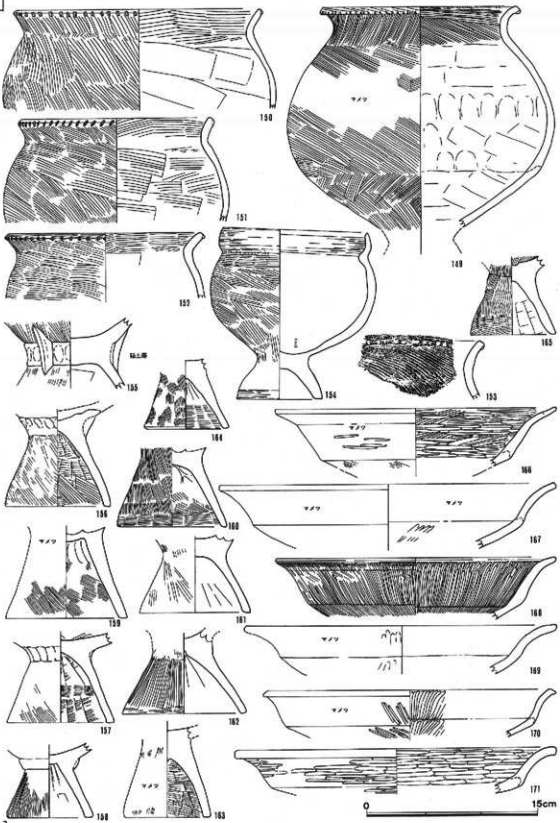
第26図　YT6出土土器実測図5（第12次1期調査中地区）



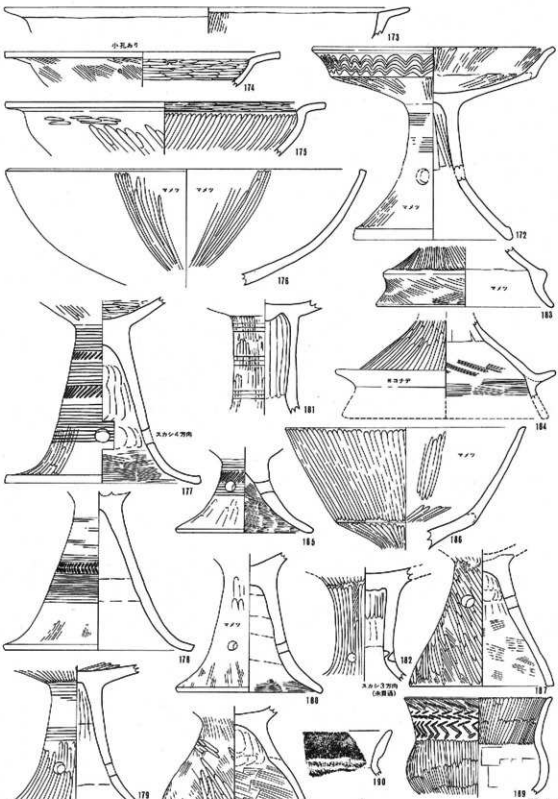
第27図　YT8出土土器実測図（第12次1期調査中地区）



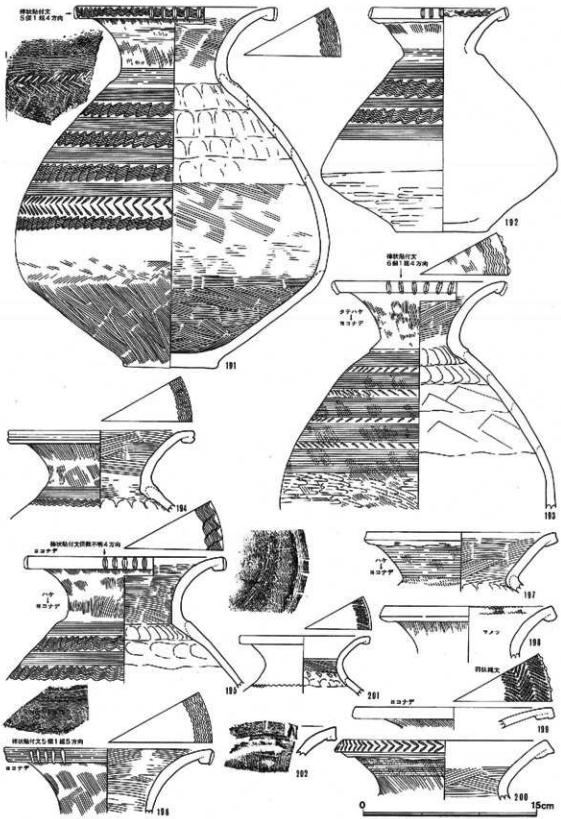
第28図　土堤出土土器実測図1（第12次1期調査中地区）



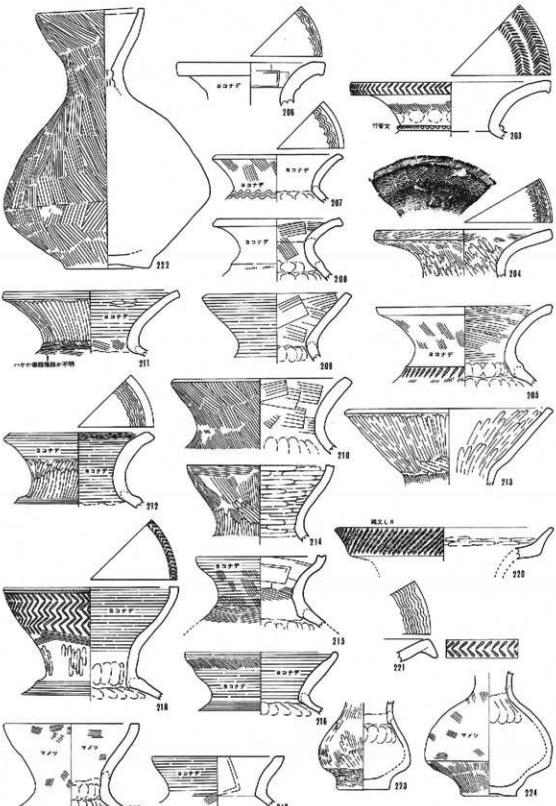
第29図　土堤出土土器実測図2（第12次1期調査中地区）



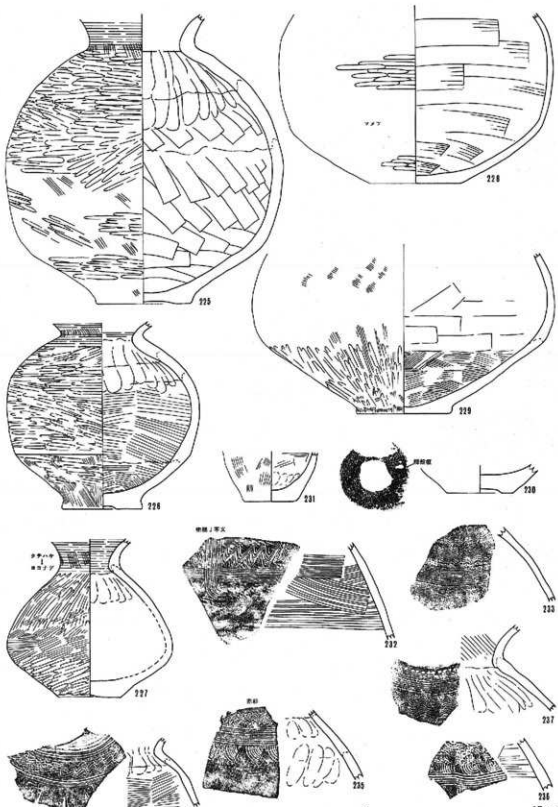
第30図　土堤出土土器実測図3（第12次1期調査中地区）



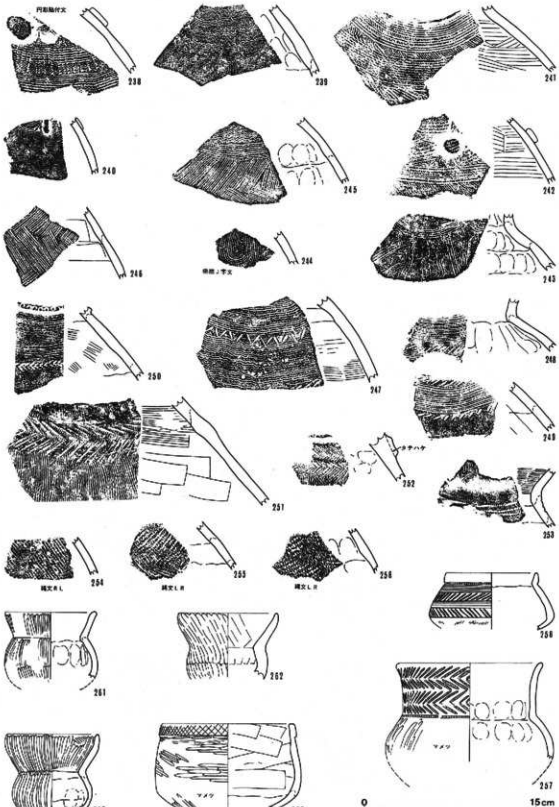
第31図　環濠内側出土土器実測図1（第12次1期調査東地区）



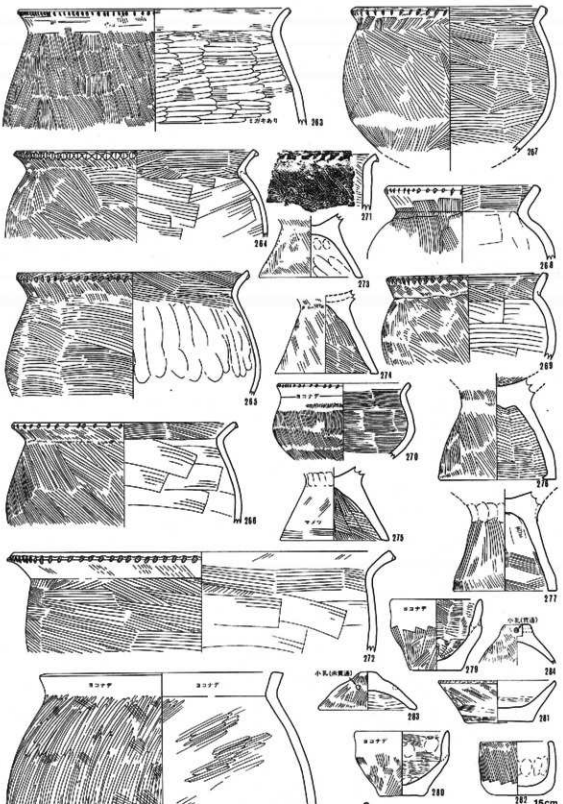
第32図　環濠内側出土土器実測図2（第12次1期調査東地区）



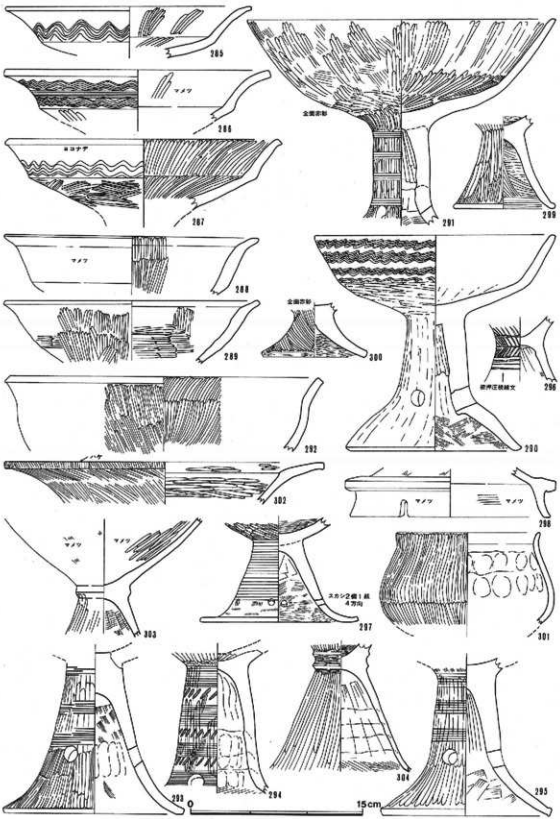
第33図　環濠内側出土土器実測図3（第12次1期調査東地区）



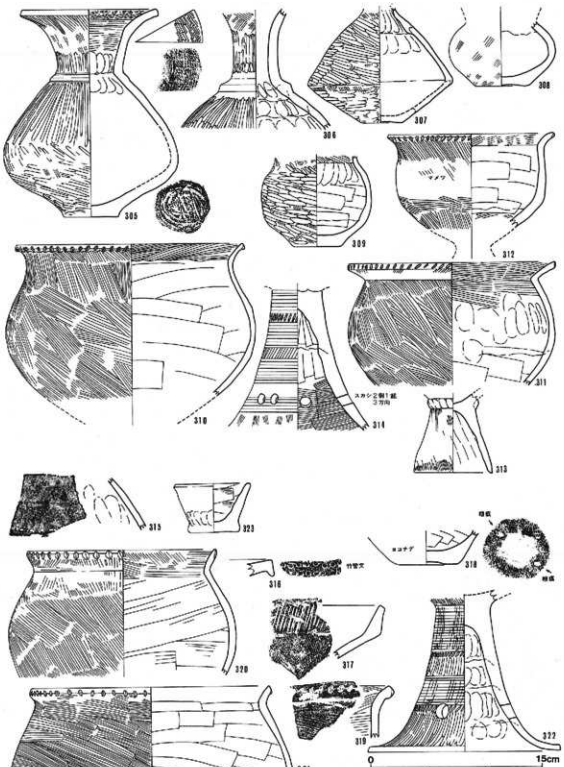
第34図　環濠内側出土土器実測図4（第12次1期調査東地区）



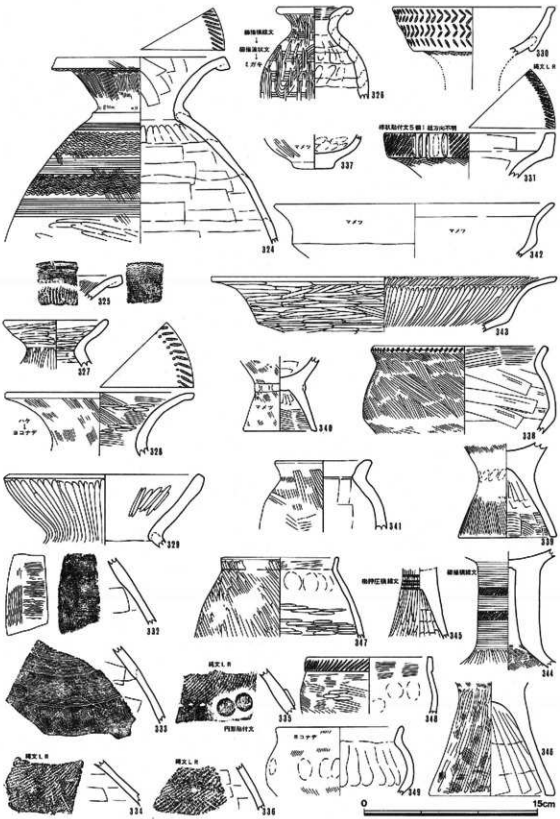
第35図　環濠内側出土土器実測図5（第12次1期調査東地区）



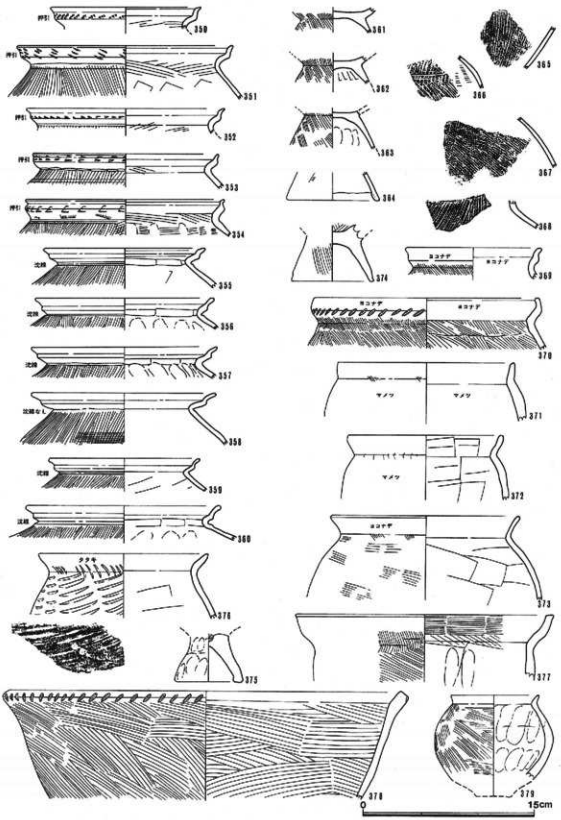
第36図　環濠内側出土土器実測図6（第12次1期調査東地区）



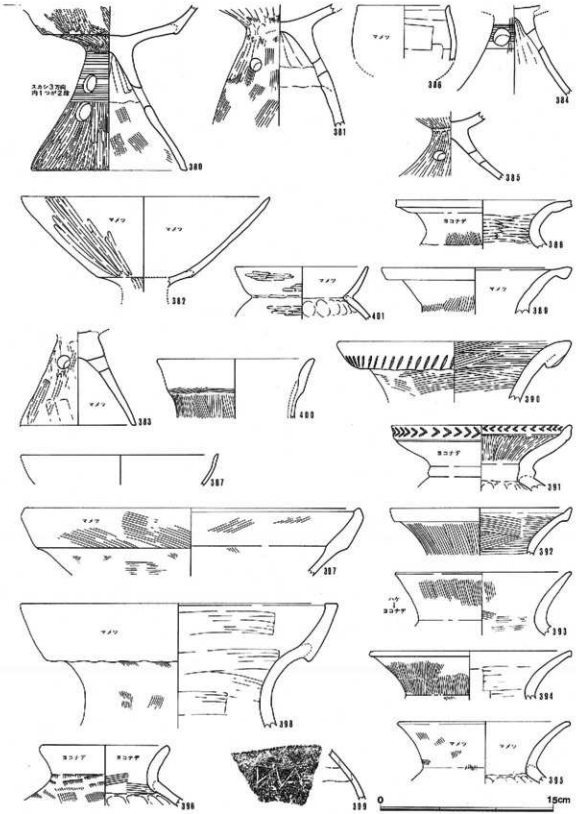
第37図　窪地出土土器実測図（第12次1期調査東地区）



第38図　その他出土土器実測図（第12次1期調査）



第39図　環濠内側上層出土土器実測図1（第12次1期調査東地区）



第40図　環濠内側上層出土土器実測図2（第12次1期調査東地区）

3. 第12次２期調査の出土遺物

＜弥生土器＞

・ＹＴ１出土土器（第41図）

１～７は壷である。１は口唇部の断面が円頭状につくられ、口縁部内側に波状文が施されている。２は口唇部の端面に櫛描横線文、口縁部内側に波状文が施されている。肩部に断面三角形の突帯をもつ。３は折返口縁部をもち、口唇部の端面と口縁部内側に波状文が施されている。また肩部に横線文、波状文、扇状文が施されている。４は折返口縁部をもち、頸部に縦方向のヘラミガキが行われている。５は肩部の小破片であり、横線文と扇状文が交互に施されている。６は肩部の小破片であり、縄文が施されている。菊川式の影響を受けた土器であろう。７は体部下半に稜をもつ小型壷であり、口縁部が内湾している。外面に横方向のヘラミガキが行われている。

８～９は台付甕である。８は短い口縁部をもち、口唇部の角に刻目を入れている。９は小型壷の台部であろう。

・ＹＴ２出土土器（第41図～第45図）

10～27は壷である。10は折返口縁部をもち、断面形が三角形を呈している。11は口唇部をやや下方に肥厚し、端面に×印の櫛刺突文が施されている。12は口唇部の角に刻目が入れられ、頸部に縦方向のヘラミガキが行われている。13は口縁部の内外面にヨコハケが見られる。14は口縁部の先端を水平方向に屈折している。15は体部下半に稜をもつ小型壷であり、肩部に横線文と波状文が施されている。16は全面に丁寧な縦方向のヘラミガキが行われている。17は長い頸部に縦方向のヘラミガキが行われている。また内側にもヘラミガキが見られる。18は直線的に開く口縁部をもち、肩部に横線文と波状文が交互に施されている。19は球形の体部に直線的に開く口縁部をもち、体部に横方向の細かなヘラミガキが行われている。口唇部に水平な面をもつ。20は球形の体部にまっすぐ伸びる口縁部をもつ。体部に縦方向の細かなヘラミガキが行われている。21と22は肩部に横線文、突列点文等が交互に施されている。23は口縁部を欠く小型壷であり、体部に横方向の細かなヘラミガキが行われている。24は肩部から頸部にかけての破片である。縄文が施され、頸部に縦方向のヘラミガキが見られる。円形貼付文が３個１組で２方向についている。天竜川以東の菊川式もしくは菊川式の影響を受けた土器である。25は球形の体部をもち、肩部に幅の広い横線文と刺突文が施されている。26と27は肩部の小破片である。

28は坩である。球形の体部に直線上に開く口縁部をもち、口唇部の断面が尖頭状につくられている。外面および口縁部内側に縦方向のヘラミガキが行われている。体部の内面に指頭圧痕が見られる。

29～35は鉢である。29は口縁部がやや外反し、口唇部が円頭状につくられている。外面に櫛刺突羽状文が施されている。30は口縁部の破片であり、３段の櫛刺突羽状文が施されている。31は口縁部を幅広く肥厚させ、体部に横方向のヘラミガキが行われている。32と33は小型鉢であり、両者とも口唇部に水平な面をもち、ヨコナデが見られる。外面に斜方向の細かなヘラミガキが行われている。34は

小型鉢の底部であろうか。35は台付鉢と思われる。半球状の体部にわずかに外反する台部がついている。問題となるのは、台部内面にヘラミガキが行われている点である。体部の内外面が磨滅している。

36～40は高坏である。36は高坏の脚部であり、3段の櫛描横線文を施した後に縦方向のヘラミガキが行われている。スカシ孔を4方向にもつ。37と39は無文であり、スカシ孔もない。39は脚端が尖頭状につくられている。40は口縁部がやや内湾気味に開く深い坏部と内湾気味に開く脚部をもつ。口唇部が円頭状につくられている。スカシ孔はない。内外面に丁寧な縦方向のヘラミガキが見られる。

41～64は台付甕である。41～56は台付甕の体部であり、くの字状に屈折した口縁部をもつ。すべて口唇部の角に刻目が入れられている。外面に斜方向のハケ調整、内面に横方向
の板ナデが行われている。53～56は口唇部の断面が円頭状もしくは尖頭状につくられている。57は台付甕の体部であるが、刻目が口唇部の端面上に入れられている。これは三河以西の調整手法である。58と59も台付甕の体部であるが、口唇部に刻目は入れられていない。60と61は口縁部の小破片である。60は刻目が長い。62～64は台部である。62は接合部分に粘土帯がまかれ、その上に指頭圧痕が残されている。

・ＹＴ９出土土器（第46図～第49図）

65～76は壺である。65は非常に均整のとれた小型壺であり、口唇部と肩部に円形貼付文がつけられている。肩部に横線文と波状文が施され、体部下半に横方向のヘラミガキが行われている。66は口唇部に顕著なヨコナデが見られる。67は口唇部の断面が尖頭状につくられている。71～73は肩部の小破片であり、羽状縄文が施されている。菊川式の影響を受けた土器であろう。75と76は壺の体部下半の破片であり、両者とも平底である。74は体部中央に強い稜をもつ長頸壺であり、体部外面に細かなヘラミガキが行われている。

77～81は鉢である。77は内面にヘラミガキが行われているから、鉢とみて間違いなかろう。上げ底である。78と79は装飾鉢である。78は口縁部に櫛刺突羽状文が施されている。79は肥厚した口縁部に櫛刺突列点文が施されている。体部は斜方向の細かなヘラミガキが行われている。80は小型鉢であろう。口唇部に端面をもつ。外面に縦方向の細かなヘラミガキ、内面に横方向の板ナデが行われている。81はくの字状に屈折する口縁部をもち、外面にヘラミガキが行われている。

82は手づくねであり、外面にヨコナデが見られる。内面に指頭痕が多く残っている。

83～99は台付甕である。すべて口唇部に刻目が入れられている。83はやや内湾した台部をもち、接合部分に粘土帯がまかれている。88は球形の体部にくの字状に強く屈曲した口縁部をもつ。90～92は口縁部に端面をもち、その面上に刻目が入れられている。93はやや内湾する甕の口縁部である。94～99は台部であり、97と99がやや内湾している。95～99は接合部分に粘土帯がまかれている。

100～116は高坏である。100～113は坏部の破片であり、途中に稜をもち、口縁部が外反している。104は脚部に3方向のスカシ孔をもち、櫛描横線文が施されている。105は脚部がラッパ状に開き、脚端が水平方向に強く屈折している。ヘラミガキが行われたのちにヘラ描横線文と櫛押圧横線文が施さ

れている。 106は脚端が少し上方につまみ上げられている。横線文と刺突文が交互に施されている。107は碗形の坏部とラッパ状に開く脚部をもつ。

・その他出土土器（第50図～第51図）

117～126は壷である。117と118が折返口縁部の破片であり、118～122が単純口縁部の破片である。121は口縁部が円頭状につくられ、122の口唇部は下方にやや肥厚されている。 119はやや長い頸部に縦方向のヘラミガキが見られる。124と125は口縁部を欠いている。 125は算盤玉状の体部上半に櫛刺突列点文が4段ほど施されている。下半はヘラミガキが行われている。菊川式の影響を受けた土器か。123は複合口縁部の破片であり、4個1組の棒状貼付文がつけられている。方向は不明である。 126は平底の底部である。

127～134は台付甕である。129は水平方向に強く屈折する口縁部をもつ。130は口唇部に端面をもち、その面上に刻目を入れている。三河以西の調整手法である。 131は口唇部に刻目が入れられていない。132～134は直線状に開く台部であり、そのなかの132が接合部分に粘土帯がまかれている。

135～137は高坏である。 135は坏部の破片であり、途中に稜をもち口縁部が大きく外反している。136は脚端が台状に屈折した脚部であり、坏部との接合部分に櫛押圧横線文が施されている。菊川式もしくは菊川式の影響を受けた土器である。 137は接合部分に5条のヘラ描き横線文が見られる。これも菊川式の影響か。

138～142は鉢である。 141と142は折返口縁部をもち、内外面とも細かいヘラミガキが行われている。これらは菊川式もしくは菊川式の影響を受けた土器であろう。

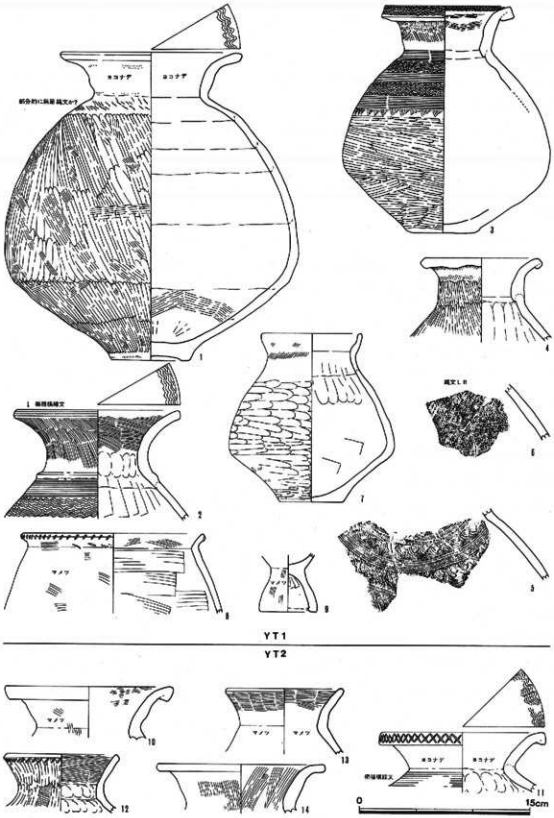
・古式土師器（第51図）

143と144は高坏である。 143は浅い椀状をした坏部の破片でも、口唇部の断面が尖頭状につくられている。 144は直線的に開く脚部であり、スカシ孔を3方向にもつ。

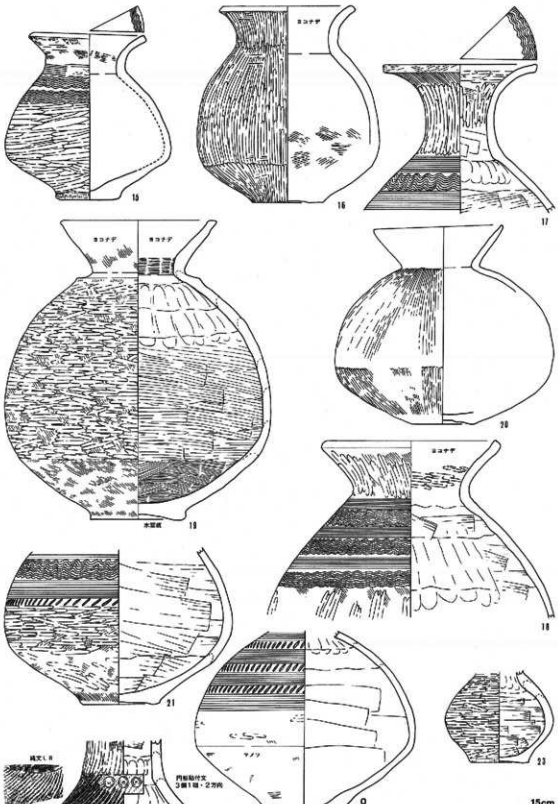
145～146はS字状口縁部台付甕である。145と146は口縁部の破片であり、147は台部の破片である。145はS字状をした口縁部が、外に大きく開いている。

＜石製品＞（第53図）

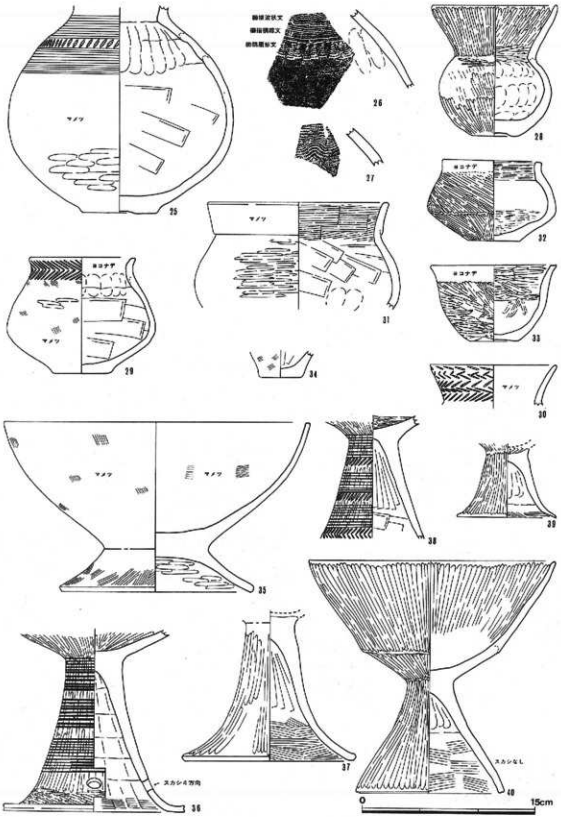
1～4が叩石、5～6が砥石である。4は磨石としても使用している。石材は、1が輝緑石、3が緑色片岩、他は白色凝灰岩である。



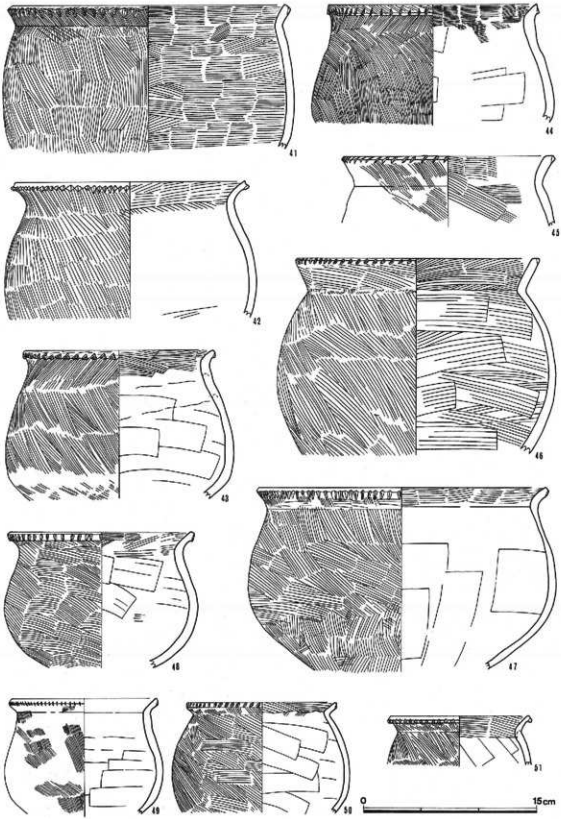
第41図　YT1出土土器実測図・YT2出土土器実測図1（第12次2期調査）



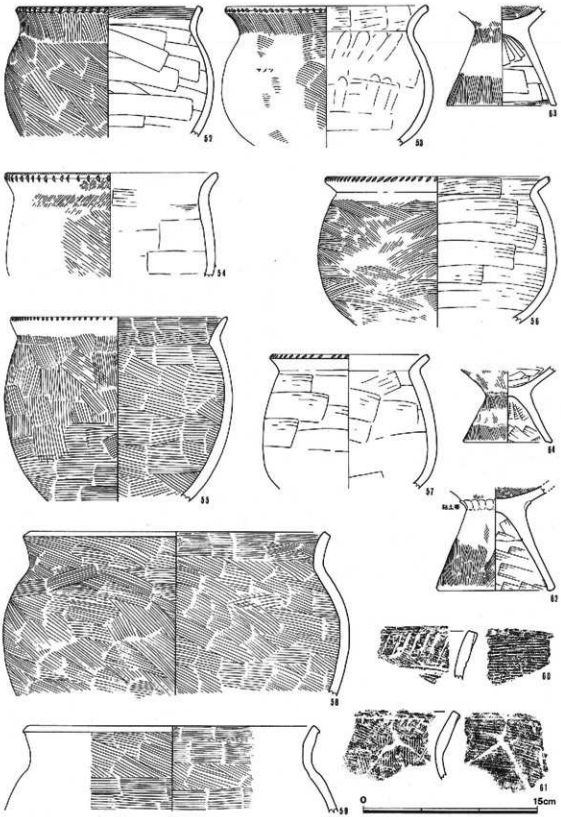
第42図　YT2出土土器実測図2（第12次2期調査）



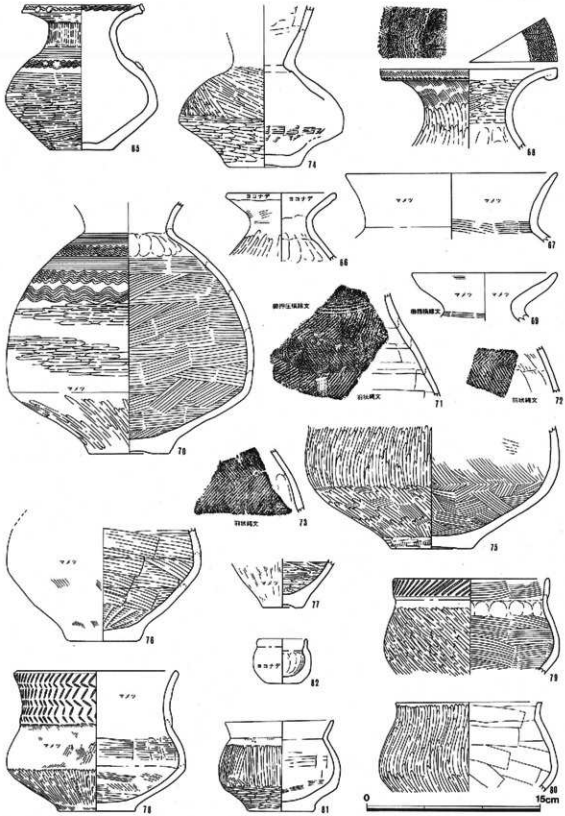
第43図　YT2出土土器実測図3（第12次2期調査）



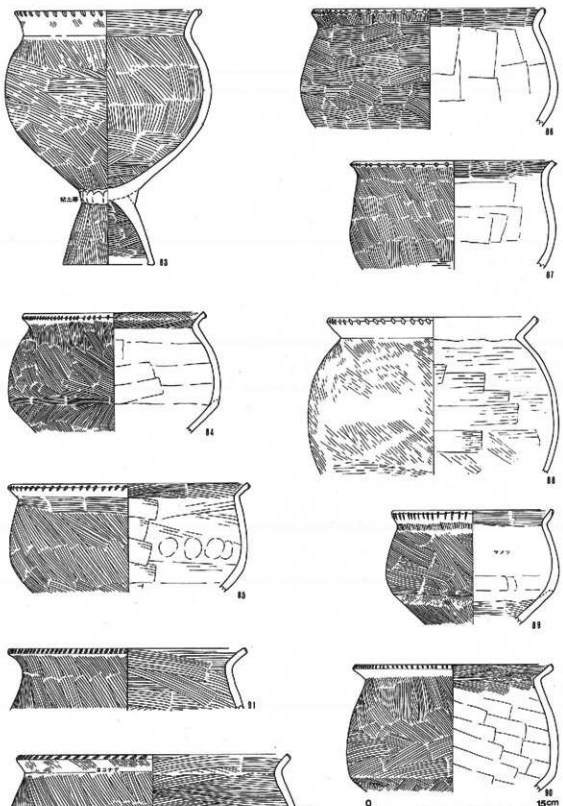
第44図　YT2出土土器実測図4（第12次2期調査）



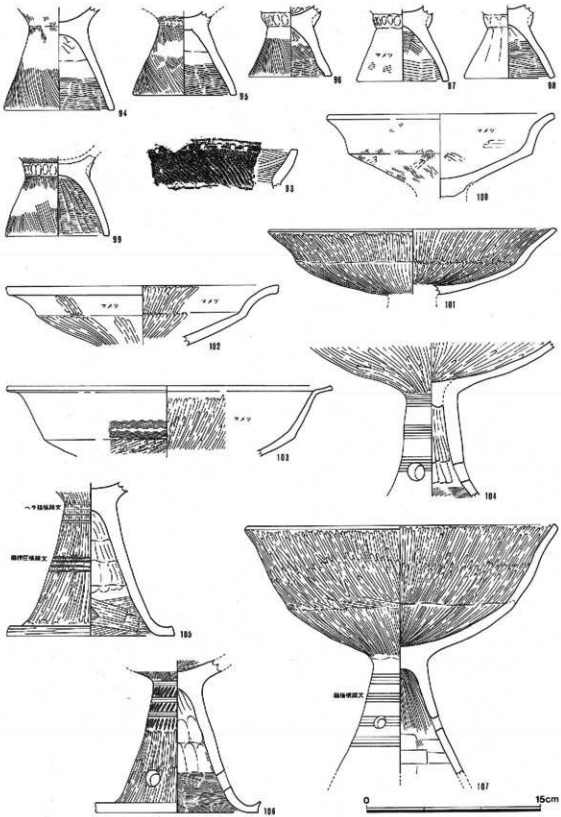
第45図　YT2出土土器実測図5（第12次2期調査）



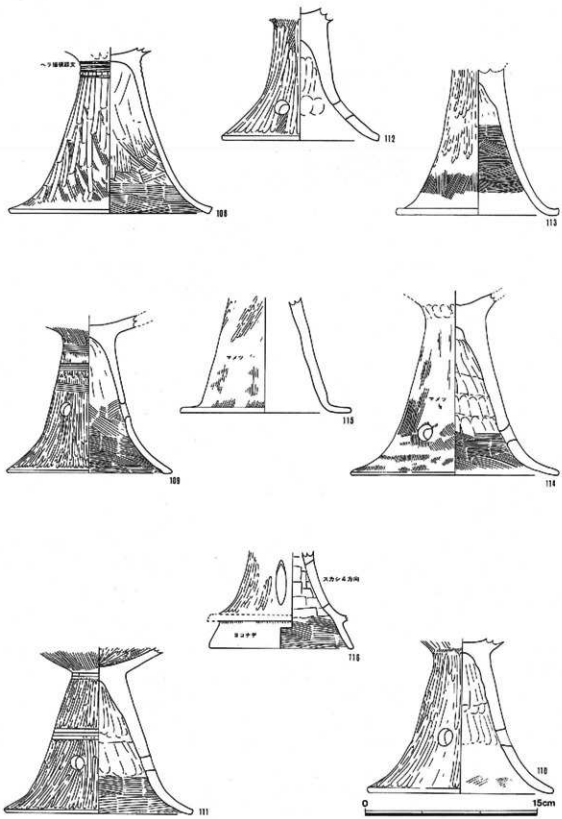
第46図　YT9出土土器実測図1（第12次2期調査）



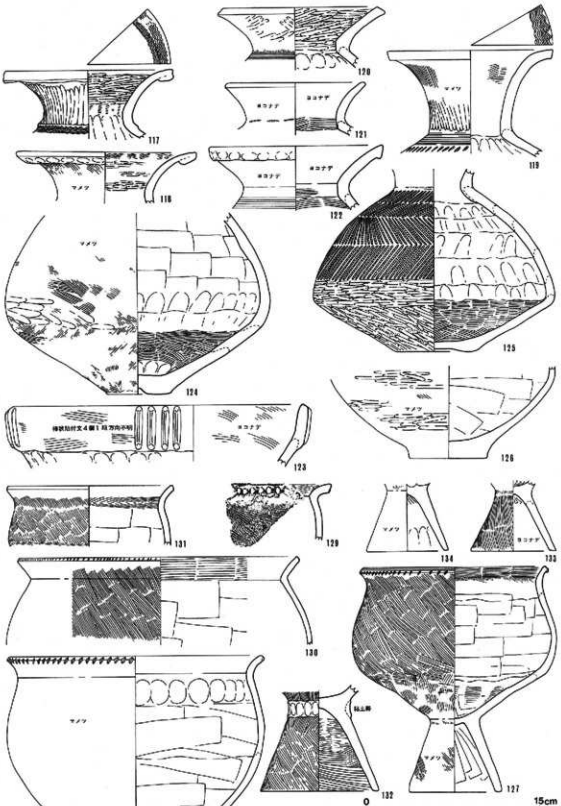
第47図　YT9出土土器実測図2（第12次2期調査）



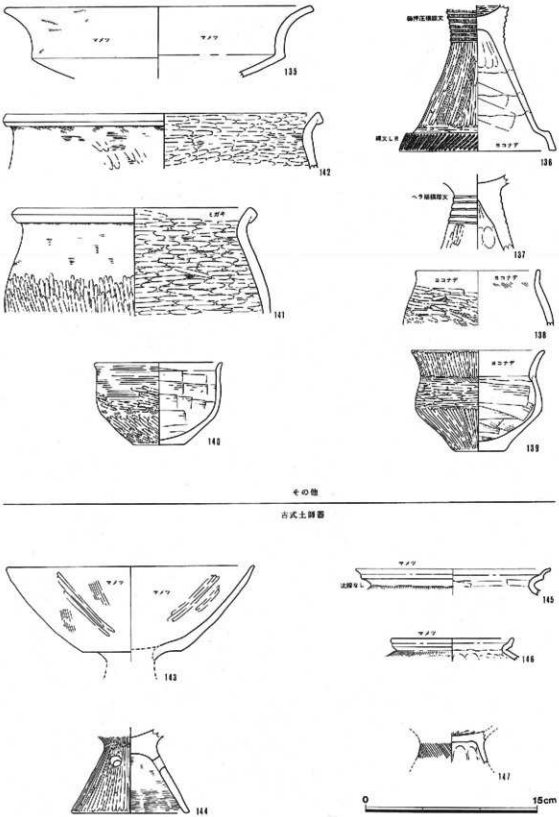
第48図　YT9出土土器実測図3（第12次2期調査）



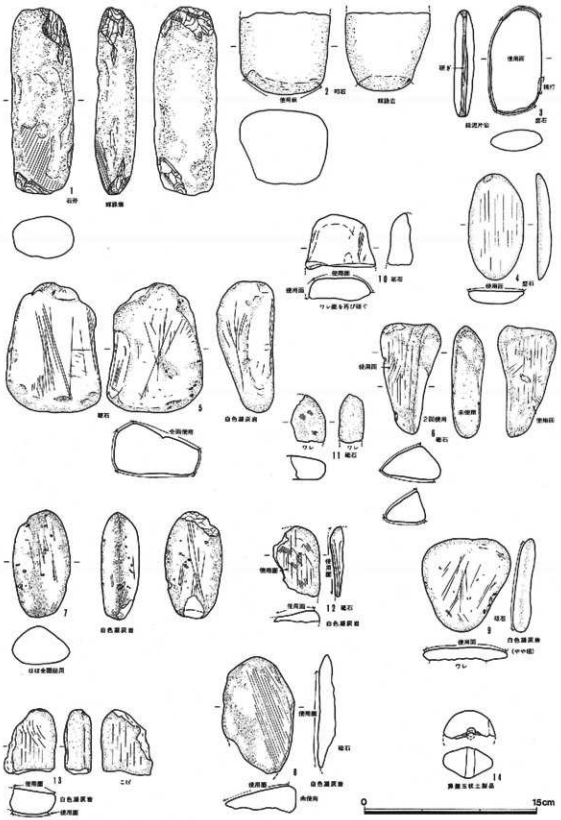
第49図　YT9出土土器実測図4（第12次2期調査）



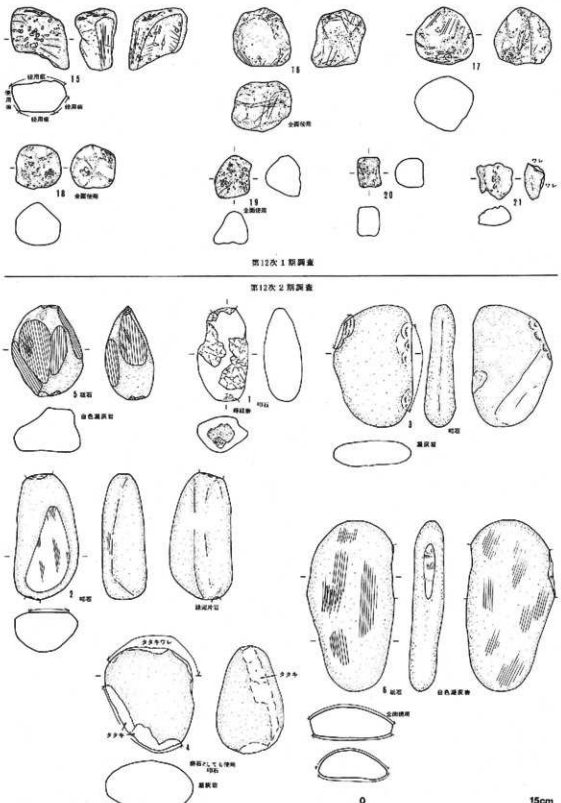
第50図　その他出土土器実測図1（第12次2期調査）



第51図　その他出土土器実測図2・古式土師器（第12次2期調査）



第52図　土製品・石製品実測図1（第12次1期調査）



第53図　石製品実測図2（第12次1期調査）・石製品実測図（第12次2期調査）

図版番号	図面番号	器種	石質	寸法（cm） 長さ	幅	厚さ	出土位置	備考
第52図	1	磨製石斧	輝緑岩	16.7	5.4	3.3	X13c	
〃	2	叩石	輝緑岩	7.4	7.8	7.4	X13c-YT6	半分欠損
〃	3	磨石	緑泥片岩	9.5	4.5	1.7	X13f-YT6	
〃	4	磨石	凝灰岩	9.5	4.8	1.1	X12c	
〃	5	砥石	凝灰岩	11.6	8.3	5.0	X12c	
〃	6	砥石	凝灰岩	9.9	5.1	2.7	X13f	
〃	7	砥石	凝灰岩	9.6	5.0	3.2	X13f	ほぼ全面使用
〃	8	砥石	凝灰岩	10.4	6.3	2.4	X12c	
〃	9	砥石	凝灰岩	8.3	7.8	1.2	X13c-YT6	
〃	10	砥石	凝灰岩	4.7	6.0	2.9	X12f	
〃	11	砥石	凝灰岩	4.4	3.0	2.1	X12f	
〃	12	砥石	凝灰岩	6.2	4.1	1.1	X13c-YT6	
〃	13	砥石	凝灰岩	5.7	4.6	2.3	X12c	焼け焦げあり
第53図	15	砥石	軽石	5.6	5.0	2.9	X12c	
〃	16	砥石	軽石	5.3	4.8	4.5	X13c	全面使用
〃	17	砥石	軽石	5.1	5.0	5.0	X12f	
〃	18	砥石	軽石	3.8	3.9	3.9	X12f	全面使用
〃	19	砥石	軽石	3.8	3.0	3.0	X12f	全面使用
〃	20	砥石	軽石	2.7	2.0	2.7	X12c	
〃	21	砥石	軽石	3.2	3.2	1.7	X12f	

第2表　石製品一覧表（第12次1期調査）

図版番号	図面番号	器種	石質	寸法（cm） 長さ	幅	厚さ	出土位置	備考
第53図	1	叩石	輝緑岩	8.4	4.4	3.2	D12f-YT9	
〃	2	叩石	緑泥片岩	11.3	5.4	3.9	D12b-YT1	
〃	3	叩石	凝灰岩	11.0	6.9	2.7	D12c-YT9	
〃	4	砥石	凝灰岩	9.6	7.7	5.7	D12b-YT1	磨石としても使用
〃	5	砥石	凝灰岩	8.1	6.2	4.3	D12f-YT9	
〃	6	砥石	凝灰岩	15.2	7.5	2.7	D12e-YT2	全面使用

第3表　石製品一覧表（第12次2期調査）

Ⅳ　まとめ

1．出土土器について

今回整理した弥生土器は出土後、第４次調査で24年、第12次調査で18年の歳月が経過している。そしてこの間に完形品や完形品に近い土器はほとんどが抽出され、既刊の報告書および概報等で報告されている。またそれらをもとにして伊場遺跡から出土した弥生土器の分類・編年も行われている。当然、その過程で第４次調査と第12次調査の未整理品も考慮されたことであろう。したがって、今回あらたに第４次調査と第12次調査の出土土器だけを対象にして分類・編年を行う意味はないと考える。そこで、この第１節では、過去に行われた西遠江における後期弥生土器の分類・編年をもとにしてその位置づけを試みる。

・後期弥生土器の分類と編年

西遠江における後期弥生土器の分類・編年には、第７次調査までの伊場遺跡出土品を中心にしてまとめられたものと（文献４）、梶子遺跡第８次調査出土品に伊場遺跡出土品を加えてまとめられたものがある（文献６）。本節では、後者の分類・編年をそのまま利用し、今回の整理品がどこに位置づけられるのか見てみよう。ただし一部を変更している。また形態分類図や編年図には、板力今回の整理品を使用するように心がけた。なお、形態分類および型式組列等の詳細については既刊の報告書（文献６）を参照いただきたい。

◎形態分類

基本的には、壺、甕、高坏、鉢の４種類が存在する。

＜壺＞

壺は広口壺、直口壺、長頸壺、瓢壺、小型壺がある。広口壺は口縁部の作り方によって４形態、長頸壺は３形態、小型壺は２形態に分けられる。他に、壺蓋、坩、脚付坩がある。

広口壺Ａ　単純口縁部を有するものであり、口唇部の処理の仕方によって５分類される。

(A1)は口縁部が水平になるまで大きく外反し、口唇部に明確な端面をもつもの。

(A2)は口縁部に端面を有するが、ヨコナデのために全体的に丸味をもつもの。

(A3)は口縁部が直線化し、口縁部に外傾する端面をもつもの。

(A4)は口縁部の断面が円頭状で、器壁の厚さが先細りしないもの。

(A5)は口縁部内面に稜をもつもの。

広口壺Ｂ　折返口縁部を有するものであり、口唇部の折返し方によって４分類される。

(B1)は折返し幅が広く、断面が長方形かつ丁寧につくられたもの。

(B2)は折返し断面が正方形かつ丁寧につくられたもの。

(B3)は折返し端面が鈍角または鋭角であり、頸部に顕著なヨコナデが見られるもの。

(B4)はB3と同様の折返しを有するが、加えて内面に稜をもつもの。

広口壺C　内湾する口縁部を有するものであり、口唇部処理の仕方によって3分類される。

(C1)は口唇部に水平面または外傾面をもつもの。

(C2)は口唇部の断面が円頭状であるもの。

(C3)は口唇部に内傾面をもつもの。

広口壺D　複合口縁部を有するものであり、2分類される。

(D1)は口縁部が屈折して上にのびるもの。

(D1)は口縁部が屈折して逆ハの字状に開き、屈折部が垂下するもの。

直口壺　口縁部が頸部から直線的に開くものである。

長頸壺A　袋状口縁部を有する細頸壺であり、2分類される。

(A1)は袋状部分が細長く、口縁部の内湾度が高いもの。

(A2)は口縁部全体が縮小化したもの。

長頸壺B　直線的に開く長い口頸部を有するものであり、3分類される。

(B1)は細頸で、直線的にのびる長い口頸部をもつもの。

(B2)は太頸で、直線的にのびる長い口頸部をもつもの。

(B3)はやや頸が太く、口頸部の長さが縮小化したもの。

長頸壺C　口縁部が頸部から直線的に閉じ、口頸部に櫛描文や櫛刺突文が見られるもの。

甕壺　内湾する口縁部を有し、口唇部に内傾面を有するものである。

小型壺　小型の壺であり、2分類される。

(A) は広口壺をそのままスケールダウンしたものであり、単純口縁部をもつものが多い。

(B) は直線的に開く口縁部、またはやや内湾する口縁部を有するもの。

壺蓋　形態によって3分類される。

(A) は皿を伏せたような形状をしたもの。

(B) は円盤に突起状のつまみをつけたもの。

(C) は断面形が台形もしくは弓状のものに、円錐状の把手をつけたもの。

坩　扁球形の体部に太くて長い口縁部をもつものであり、2分類される。

(A) は口縁部が直線的に開くもの。

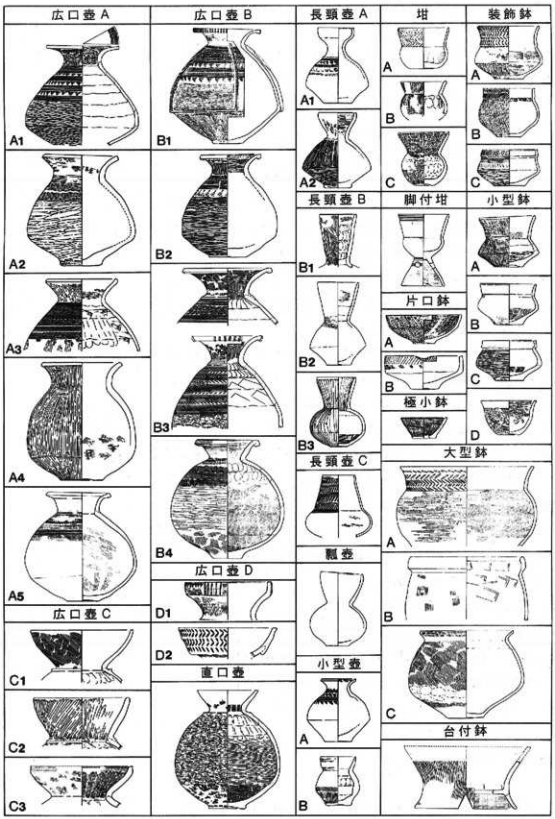
(B) は口縁部が内湾して開くもの。

脚付坩　脚部を有する坩である。

＜鉢＞

鉢には大型鉢、台付鉢、小型鉢、装飾鉢、片口鉢、極小鉢がある。

大型鉢　大型の鉢であり、形態によって3分類される。


広口壺A
A1
A2
A3
A4
A5
広口壺B
B1
B2
B3
B4
広口壺C
C1
C2
C3
広口壺D
D1
D2
直口壺
長頸壺A
A1
A2
長頸壺B
B1
B2
B3
長頸壺C
鉢
小型壺
A
B
坩
A
B
C
脚付坩
片口鉢
A
B
極小鉢
D
大型鉢
A
B
C
台付鉢
装飾鉢
A
B
C
小型鉢
A
B
C

第54図　形態分類図（1）

(A) は口縁部が外反するものであり、外面に櫛刺突羽状文が施されている。

(B) は口縁部が内湾するものを一括する。

(C) は口縁部が外反するものを一括する。

小型鉢　口縁部の作り方によって4分類される。

(A) は長い口縁部をもつもの。

(B) は口縁部が複合口縁状を呈するもの。

(C) は口縁部が屈折して受口状をなすもの。

(D) は口縁部がやや外反気味に開くもの。

装飾鉢　口縁部に櫛刺突文が施されたものであり、3分類される。

(A) は小型鉢(A) と同じ形態であり、口縁部に櫛刺突文が施されたもの。

(B) は小型鉢(B) と同じ形態であり、口縁部に櫛刺突文が施されたもの。

(C) は小型鉢(C) と同じ形態であり、口縁部に櫛刺突文が施されたもの。

台付鉢　台部を有する鉢である。上体部が外反するものと内湾するものを一括する。

片口鉢　浅い体部をもち、口縁部に注ぎ口を有するものである。注ぎ口の無いものも含む。　(A) は体部が丸みを帯びているもの。

(B) は体部に明瞭な稜を有するもの。

極小鉢　口縁部が直線的に開くものと内湾するものがある。一括する。

手づくね　壷形と鉢形がある。一括する。

＜高坏＞

高坏には、高坏A、高坏B、高坏C、高坏D、装飾高坏、小型高坏がある。

高坏A　稜をもち外反する坏部とラッパ状に開く脚部を有するものであり、3分類される。

(A1)は直立気味の口縁部と筒状に長い脚部をもつもの。

(A2)は口縁部が一旦上に伸びてから外反し、口唇部に明確な端面をもつもの。脚部は太く、脚端が大きく開くもの。

(A3)は口縁部と脚部がきれいに外反するものである。ほとんどの坏部に波状文を描く。

高坏B　碗状の坏部とラッパ状に開く脚部を有するものであり、4分類される。坏部は施文されず、口唇部に水平面もしくはやや外傾面をもつ。

(B1)は脚部が脚端近くで外反度を強めるもの。

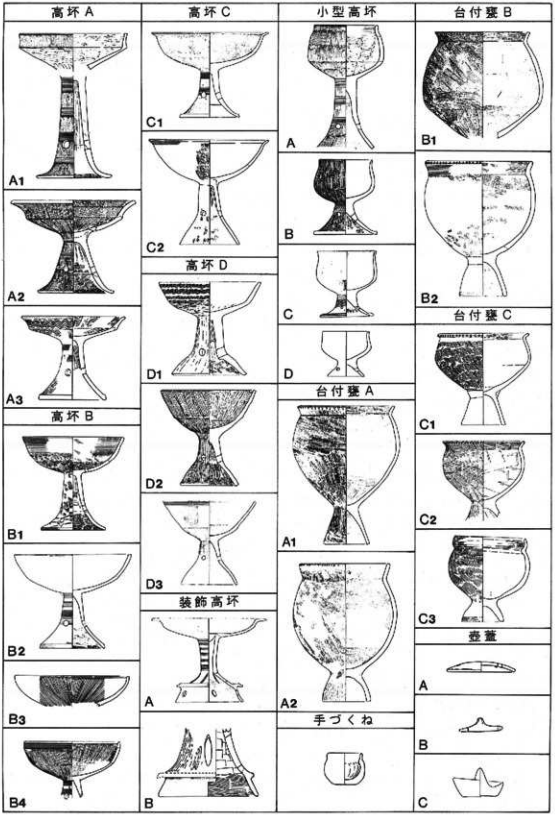
(B2)は脚部が弧状に外反するものであり、脚端が断面三角形にされる場合が多い。

(B3)は(B2)と同様の脚部をもつが、口唇部に強いヨコナデが行われたもの。

(B4)は口唇部に内傾面をもつもの。

高坏C　碗状坏部の口縁部がくの字状に屈折しているものであり、脚部の形態によって2分類される。

(C1)は脚部がラッパ状に開くもの。


高坏A
A1
A2
A3
高坏B
B1
B2
B3
B4
高坏C
C1
C2
高坏D
D1
D2
D3
装飾高坏
A
B
小型高坏
A
B
C
D
台付甕A
A1
A2
手づくね
台付甕B
B1
B2
台付甕C
C1
C2
C3
壺蓋
A
B
C

第55図　形態分類図（2）

(C2)は脚部下半が屈折して直線的に開くか、または内湾気味に開くもの。

高坏D　直口縁の有稜高坏であり、脚部下半が屈折して直線的または内湾気味に開くものである。3分類される。

(D1)は坏底部が広く、直線的な口縁部がそれほど長くなっていないもの。

(D2)は坏底部が縮小化し、口縁部の長さがやや伸びたもの。

(D3)は坏底部が縮小化し、口縁部の長さが長大化し内湾気味になったもの。

装飾高坏　複合口縁状の脚部に鍔状突帯が巻かれているものであり、色々な形態の坏部がつく。脚部の違いによって2分類される。

(A) は脚上部が円柱状になっているもの。

(B) は脚部全体が円錐状になっているもの。

小型高坏　小型高坏はワイングラス形の1形態だけであり、4分類される。

(A) はラッパ状に開く長脚の脚部をもち、口縁部が坏底部よりも狭いもの。

(B) は(A) と同様の坏部をもつが、脚部が大きく外反し、坏部の深さと同じ高さのもの。

(C) は口縁部がやや広く、脚部が小型化したもの。

(B) は坏部が浅く、脚部が短く直線状に開くもの。

＜甕＞

甕はすべて台付甕であり、体部と台部の接合部分に粘土帯を巻くものと、巻かないものがある。台付甕A、台付甕B、台付甕Cの3形態に分けられる。

台付甕A　体部が上下に長いものであり、さらに2分類される。

(A1)は体部中央に稜をもち、台部が高いもの。

(A2)は体部に丸味をもち、台部が低いもの。

台付甕B　体部の高さと最大幅がほぼ等しいものであり、2分類される。

(B1)は体部下半に稜をもつもの。

(B2)は体部に丸味をもち、台部が低いもの。

台付甕C　小型の甕であり、体部の形態によって3分類される。

(C1)は体部に稜をもち、扁平なもの。

(C2)は台付甕Bを小型化したものであり、体部下半に稜をもつもの。

(C3)は体部が球胴化したもの。

◎編年

弥生時代後期を大きく前半と後半に分け、前半を伊場様式とし、後半を欠山様式とする。さらに前半の伊場様式を古段階と新段階に分け、後半の欠山様式をⅠ～Ⅲの小様式に分ける。また後期初頭に不確定様式をおく。

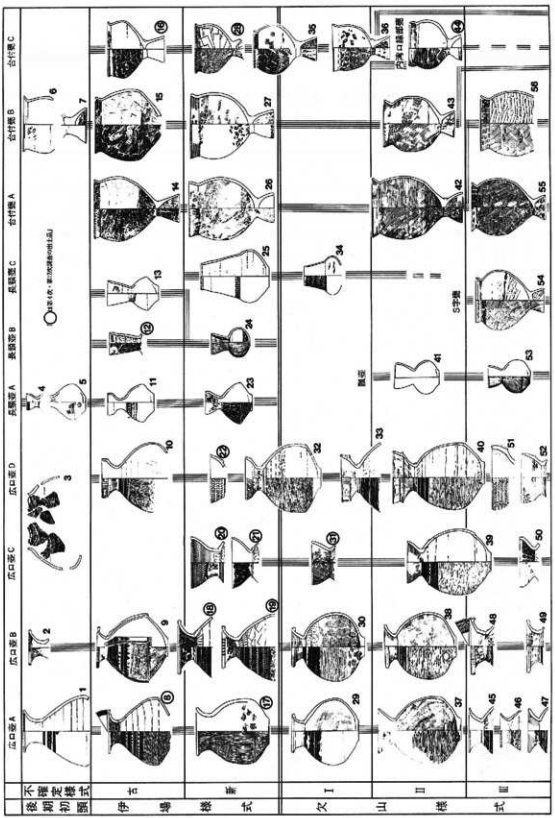
型式名	形態分類図使用図	伊場4次類例	伊場12次1期類例	伊場12次2期類例	伊場遺跡他類例
広口壺A 1	伊場4次 －45	6,7,8			9~13,84~88
A 2	伊場12次2－15	4			
A 3	伊場12次2－18	5			
A 4	伊場12次2－16	43			
A 5	梶子8次B－261			1	
B 1	伊場－914			118	21,24
B 2	伊場4次 －37		191,192,195	3	22
B 3	伊場4次 －33 伊場12次1－193				
B 4	梶子8次A－330		128		
C 1	伊場12次1－24		214,218		
C 2	伊場4次 －57				
C 3	梶子8次B－11		216		
D 1	伊場－576				
D 2	伊場12次1－330		25		
直口壺	伊場12次2－19			20	
長頸壺A 1	伊場－731				1,3,659
A 2	伊場－627				
B 1	伊場12次1－137	15			512,513,532
B 2	伊場－508				827
B 3	梶子4次 －16				
C	伊場－178				
甕壺	伊場－544				
小型壺 A	伊場4次 －10		110,326	65	
B	伊場12次1－3				
坩 A	梶子8次A－278				
B	伊場12次1－261		29		
C	伊場12次2－28				
脚付坩	梶子8次B－104				
大型鉢 A	梶子8次B－451				
B	伊場4次 －125		106		
C	伊場4次 －22				
台付鉢	伊場12次1－105	133		35	522,896
片口鉢 A	伊場－448				263,447,626
B	伊場12次1－124				483,702
装飾鉢 A	伊場12次2－78		257		316,319,322
B	伊場－321			29	
C	伊場4次 －23	127	259,348	79	77,652,884

第4表　形態分類図使用図一覧表（1）

型式名	形態分類図使用図	伊場４次類例	伊場12次1■ 類例	伊場12次2■ 類例	伊場遺跡他類例
小型鉢 A	伊場－801	126			619
B	伊場－870			81,139	122,715,869
C	伊場－520				
D	伊場12次2－ 33			140	537,765
極小鉢	伊場12次1－108	130	281,323		804,874
高坏 A 1	掘子８次B－312				613
A 2	掘子８次B－174		4,170		53,416,650
A 3	伊場12次1－172		168		414,415
B 1	掘子８次B－184				
B 2	掘子８次B－375				
B 3	伊場４次 －92	27			
B 4	掘子８次B－469				
C 1	掘子８次A－179				
C 2	掘子８次B－372				
D 1	伊場12次1－290				
D 2	伊場－730				
D 3	掘子８次B－97		187	40	
装飾高坏 A	伊場－286	112~115	183,184,99~101		288,807,833
B	伊場12次2－116				809
小型高坏 A	掘子８次B－192				
B	伊場－624		297		656,786
C	掘子５次 －32	108~110			
D	伊場－326				
台付甕 A 1	掘子８次B－173				
A 2	伊場－400				
B 1	掘子８次B－304				39,40,103
B 2	掘子８次B－353			83	
C 1	伊場４次 －17			127	
C 2	伊場４次 －25				34,46,47
C 3	伊場12次1－154				
壺蓋 A	伊場－829	31	283,284		875
B	掘子８次A－349				185,684
C	伊場12次1－148				683
手づくね	伊場12次2－82	30	123		

単に「伊場」との記載は伊場遺跡報告書『遺物編3』（別冊図面）の図面番号を示す。

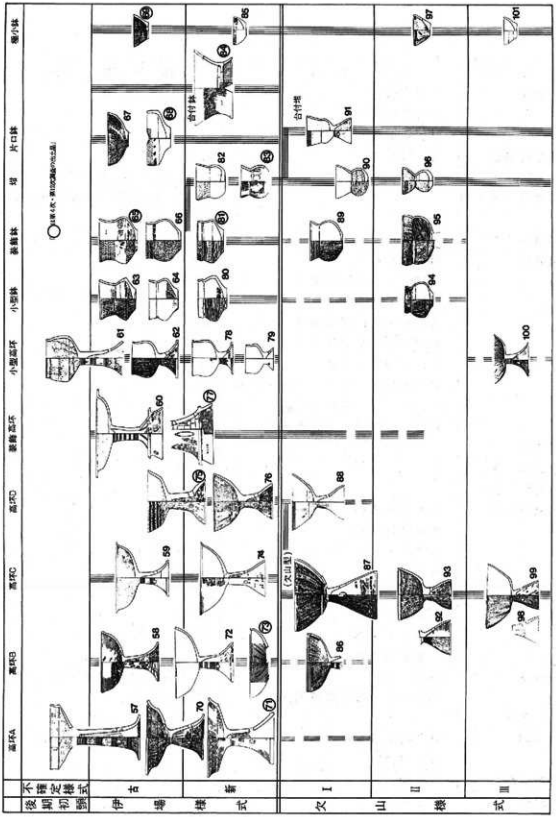
第5表　形態分類図使用図一覧表（2）



第56図　西遠江の弥生後期土器編年図（1）

遺跡名	出土遺構	編年図 No.
向山遺跡	3号住居跡	1,6
	23号住居跡	2,3
	窯状遺構	7
瓦屋西古墳群	A3号墓	4,5
伊場遺跡4次		8,16,18,28,31,73,81
伊場遺跡12次1期		12,19,20,21,22,44,68,69,71,75,83,84
伊場遺跡12次2期		17,65,77
伊場遺跡	第1次調査	9,85
	A10区・B10区YT2	26,67
	A13区YT7	11
	A13区・B13区環濠外	63,64
	B12・13区YT7	10,23,62
	B12・13区YT8	76
	C10・11区 D11・12区YT1	13,80
	C10・11区 D11・12区	41
	D群（A10区YT9西縁）	34,60,66,79
梶子遺跡4次		24
梶子遺跡5次		78,82
梶子遺跡6次		25
梶子遺跡8次	A地区SK30	59
	A地区包含層	30
	B地区SD01	50,88,90,91
	B地区SD02	14,58,61,70
	B地区SK01	29
	B地区SK02	15,57
	B地区SK06	27,35,72,74
	B地区包含層	86
椿野遺跡	1982 溝	33,37,40,42,45,48,94,95,97
	1985 第1方形周溝墓南溝	32,36,87,89
三和町遺跡		38,39,43,92,93,96
中村遺跡	Q23区土器集積	46,47,53,54,55,56,99,100
	D区包含層	51,
山の神遺跡	SX30	49,52,98
中平遺跡	F7区	101

第6表 土器編年図使用図一覧表



第57図　西遠江の弥生後期土器編年図（2）

・今回整理した弥生土器の検討

＜器種比率＞

壷：甕：高坏：鉢の器種比率は、第４次調査が35%：22%：37%：６%、第12次１期調査が35%：26%：34%：５%、第12次２期調査が38%：25%：33%：４%であった。伊場様式の壷：甕：高坏：鉢の器種比率が約40%：25%：32%：３%であるから、今回の数値はそれとほぼ同じと考えてよかろう。参考までにあげると、次の欠山様式では、壷：甕：高坏：鉢の器種比率が45～50%：25%：20～25%：５%であり、高坏の比率が低くなった分だけ壷の比率が高くなっている。

＜壷＞

口縁部の形状－なめらかに外反して開く口縁部をもつ壷（単純口縁部をもつ壷と折返口縁部をもつ壷がある）が各調査とも全体の80%前後を占め、内湾口縁部をもつ壷が20%弱、複合口縁部をもつ壷が数%を占めている。これは伊場様式の数値とほぼ同じである。内湾口縁部をもつ壷（広口壷Ｃ）は伊場様式の新段階で出現し、欠山様式で主体を占めるものである。複合口縁部をもつ壷は天竜川以東の菊川式の影響を受けたものと考えられる。

口唇部の形状－単純口縁部および内湾口縁部をもつ壷では、口唇部に平坦面をもつものが主流を占めている。折返口縁部をもつ壷では、折返し断面が正方形または長方形を呈している。これらは伊場様式に多く見られる口唇部調整手法である。欠山様式では、前者においては口唇部の断面が円頭状または尖頭状になり、後者においては折返し断面の上端角が鈍角または鋭角のものが多くなる。

プロポーション－今回の整理品の中には体部下半に明確な稜をもつものが多く見られる。これは中期弥生土器の伝統を受け継ぐものであり、伊場様式の特徴でもある。次の欠山様式になると、稜はなくなり、球胴化したものが主体を占めるようになる。

文様－壷の上体部の広い範囲に櫛描横線文、波状文、扇形文、櫛刺突列点文を交互に描く文様が多用されている。また文様帯を縦方向に切るＪ字文やＴ字文なども多く見られる。これらは伊場様式で多く使われている文様であり、そのなかのＪ字文、Ｔ字文、扇形文は伊場様式の古段階に属するものと考えられる。欠山様式では、文様の描かれる範囲が狭くなり、櫛描横線文と櫛刺突列点文を交互に描く文様が主体を占める。また文様の描かれない無文の壷も増加する。

長頸壺－伊場様式では長頸壺Ａと長頸壺Ｂが多く見られるが、欠山様式になると消滅すると考えられている。今回の整理品の中には、第４次－15、第12次１期－27,137、第12次２期－74の４点があった。

瓢壺－欠山様式で出現するものであり、今回の整理品には１点も含まれていなかった。

＜甕＞

プロポーション－甕は形態変化が乏しく明確に分類できないが、伊場様式では体部下半に稜をもつものが多く見られ、欠山様式では球胴化したものが主体を占めると考えられる。今回の整理品の中には体部下半に稜をもつものが多く含まれている。

器種比率

	壺	甕	高坏	鉢	サンプル数
第４次調査	35 %	22 %	37 %	6 %	119
第12次１期調査	35 %	26 %	34 %	5 %	660
第12次２期調査	38 %	25 %	33 %	4 %	165
伊場遺跡全体	40 %	25 %	32 %	3 %	3757

壺口縁部の形状

	単純口縁	折返口縁	内湾口縁	複合口縁	サンプル数
第４次調査	44%	43%	13%	0 %	54
第12次１期調査	53%	27%	17%	3 %	275
第12次２期調査	40%	37%	20%	3 %	40

壺底部の形状

	平底	上げ底	サンプル数
第４次調査	75%	25%	48
第12次１期調査	72%	28%	266
第12次２期調査	69%	31%	67

甕粘土帯の有無

	あり	なし	サンプル数
第４次調査	39%	61%	26
第12次１期調査	38%	62%	149
第12次２期調査	34%	66%	39

壺口唇部の刻目

	刻目あり		刻目なし	サンプル数
	角	面		
第４次調査	88%	7 %	5 %	43
第12次１期調査	88%	8 %	4 %	241
第12次２期調査	88%	9 %	3 %	64

壺口唇部の形状

	平坦面	円頭状	尖頭状	折返し	サンプル数
第４次調査	77%	16%	7 %	0 %	43
第12次１期調査	81%	13%	2 %	4 %	235
第12次２期調査	86%	14%	0 %	0 %	63

高杯脚端部の形状

	外反		内湾	複合口縁状	サンプル数
	単純	折返			
第４次調査	76%	3 %	0 %	21%	33
第12次１期調査	37%	41%	15%	7 %	134
第12次２期調査	68%	18%	5 %	9 %	22

口唇部の形状－口唇部に平坦面をもつものが各調査とも80%前後あり、口唇部の断面が円頭状のものが15%前後、尖頭状のものが数%ある。また口唇部の角に刻目を入れたものが約90%ある。これらの数値は伊場様式の数値とほぼ同じである。欠山様式でき口唇部の断面が円頭状または尖頭状のものが増加する。

内湾口縁部甕－口縁部が内湾化した甕は欠山様式で出現する。また台部も低くなり、内湾化している。今回の整理品の中には１点（第12次１期－154）あるだけである。

＜高坏＞

A2型・A3型高坏－伊場様式では途中に稜をもち口縁部が外反する坏部となめらかに外反する脚部をもった高坏（A2型・A3型）が主体を占めるが、欠山様式ではこの高坏が初期段階にわずかに残るだけでほぼ消滅している。今回の整理品を見ると、この高坏（A2型・A3型）が大多数を占めていることがわかる。

欠山型高坏－欠山様式では前期のA2型・A3型高坏に代わり坏部と脚部が内湾化した欠山型高坏が主体を占める。そこで今回の整理品を見ると、明確に欠山型高坏と呼べるものはまったく存在していない。数値的には、各調査とも脚端部が外反して開くものが全体の80～90%を占め、脚端部が内湾しているものは第４次調査で０%、第12次１期調査で15%、第12次２期調査で５%あるだけである。

小型高坏－ワイングラス形の小型高坏は伊場様式だけに存在し、欠山様式には存在しないと考えられている。今回の整理品の中には、第12次１期－ 301,386、第12次２期－ 80,138のように小型高坏の坏部と思われる破片がある。また第４次－105～110、第12次１期－297，300のように小型高坏の脚部と思われる破片もある。

＜まとめ＞

以上のことから次のことが言える。今回整理した弥生土器は、予想していた通り、一部に欠山様式に属するものが見られるものの、その主体は弥生時代後期前半の伊場様式古段階から新段階に属するものである。

・東西からの外来系土器

在地土器の直接的な系譜をひかない土器を外来系土器と呼ぶことにする。従来から伊場遺跡出土土器の中には外来系土器が５%前後の割合で混入していることが知られており、今回の整理品の中にもほぼ同率で外来系土器が含まれていた。そして外来系土器には、東からの外来系土器と西からの外来系土器の２種類がある。

東からの外来系土器は天竜川以東に分布する菊川式土器およびその影響を受けてつくられた土器であり、器形や口縁部調整手法等が伊場様式の土器とは大いに異なり、また文様も縄文または櫛刺突羽状文を多様していることから、簡単に識別することができる。さらに東からの外来系はつくられた場所によって次のように４分類される。

A類－太田川流域でつくられた菊川式の土器が伊場遺跡へ運ばれてきたもの（搬入品）。
B類－磐田原台地南部または天竜川東岸平野でつくられた菊川式の土器が伊場遺跡へ運ばれてきたもの（搬入品）。
C類－天竜川西岸平野でつくられた菊川式を模倣した土器が伊場遺跡へ運ばれてきたもの（模倣・搬入品）。模倣の程度でさらに細分が可能であろう。
D類－伊場遺跡またはその近辺でつくられた菊川式を模倣した土器（模倣品）。これも模倣の程度でさらに細分が可能であろう。

上記のA～D類は胎土の違いによって識別できる。A類は胎土に堆積岩の丸い砂粒を多く含み、灰褐色または黒褐色を呈している。B類とC類の胎土は非常に似ているが、B類は赤色粒を多く含みかつ灰褐色が強いという特徴をもち、C類は全体的にやや明るい褐色を呈する特徴をもつ。D類は砂粒が非常に細かく、橙色または肌色を呈している。

今回の整理品の中には、東からの外来系土器として、第4次－11，14,16,28,51,64,116～123、第12次1期－5,50,103,126,222,302～304,306、12次2期－24,136,141,142等（数字は各図面番号を示す）がある。

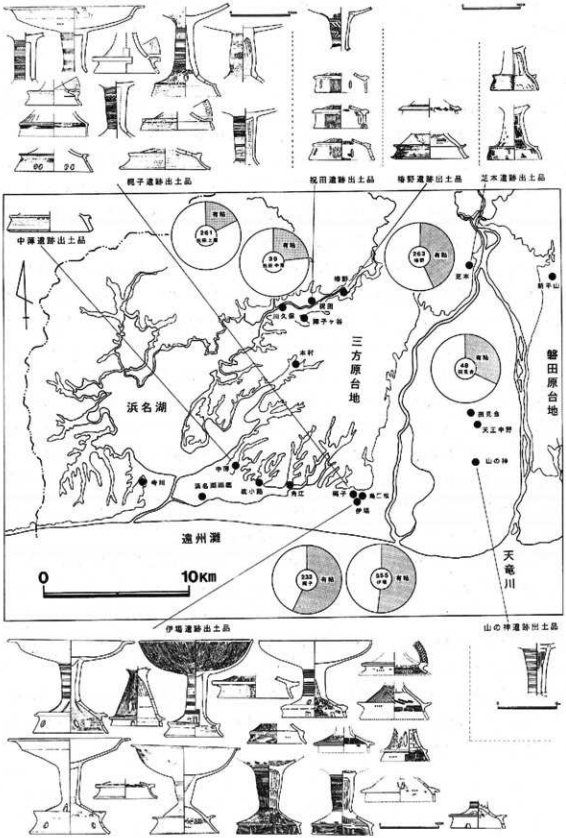
西からの外来系土器は三河以西に分布する櫛描文系土器およびその影響を受けてつくられた土器である。そして伊場様式土器も同じ櫛描文系土器に属している関係で器形および文様等が非常に類似している。そのために西からの外来系土器を識別することは難しい。しかし口唇部調整手法で判別できる場合がある。例えば、壺の口唇部を垂下しているものや、甕口唇部の端面全体に刻目を入れているものである。これらは尾張を中心とした地域で一般的に使われている手法であり、その地域からの搬入品もしくは模倣品であろう。

今回の整理品の中には、西からの外来系土器として、第4次－21、第12次1期－63,221,311,316、12次2期－57,90～92,130（数字は各図面番号を示す）がある。

・いわゆる伊場の装飾高坏

伊場の装飾高坏とは、脚台部に鍔状突帯を巻き、下細りの脚柱部をもつ、非常に装飾性に富んだ高坏である。従来この装飾高坏は伊場様式特有の器形であるとされたが、椿野遺跡や祝田遺跡の発掘調査によって欠山様式にも存在することがわかってきた。すなわち装飾高坏は伊場様式から欠山様式にかけての西遠江特有の器形である。今回の整理品の中に11点（4次－112～115、12次1期－99～101,183,184,298、12次2期－116）含まれていた。

装飾高坏は次の遺跡から出土している。南部海岸平野では、伊場遺跡から20数点、梶子遺跡から10数点、鳥居松遺跡から1点（現在報告書刊行中）、角江遺跡から約6点（現在報告書準備中）、中瀬遺跡から1点が出土している。天竜川西岸平野では、山の神遺跡から1点、芝本遺跡から2点が出土している。北部の都田川流域では、祝田遺跡から4点、椿野遺跡から2点が出土している。天竜川東岸平野では、加茂東原Ⅰ遺跡から1点出土している。また遠方では、長野県倉平遺跡、愛知県見晴台遺



第58図　装飾高杯の粘土帯の分布図

跡、神奈川県本郷遺跡から各1点が出土している。これらの装飾高坏は西遠江から運ばれたものと考えられる。

・台付甕接合部の粘土帯

粘土帯とは甕の体部と台部の接合部分に巻かれた帯のことであり、その多くの表面に指頭圧痕が残されている。この粘土帯は伊場様式特有の技法であり、伊場様式のメルクマールとなるものと考えられていた時期もあった。しかし、その後の発掘調査等によって、欠山様式にも粘土帯が存在することがわかってきた。すなわち台付甕接合部の粘土帯は伊場様式から欠山様式にかけての西遠江特有の技法である。そして今回整理した中にも数多く含まれていた。第4次－17,88、12次1期－77～82,115～117,155～158,275,277,313,340、12次2期－62,83,95～99,132等がある。

粘土帯が巻かれている比率（有粘率）が調査された遺跡が6遺跡ある。伊場遺跡、梶子遺跡、田見合遺跡、祝田遺跡、椿野遺跡、中平遺跡である。伊場様式の土器を主体とする伊場遺跡では、555点中の299点（53.9％）が有粘であった。同じく伊場様式の土器を主体とする梶子遺跡では、232点中の133点（57.3％）が有粘であった。伊場様式新段階から欠山様式への移行期の土器を主体とする田見合遺跡では、48点中の16点（33.3％）が有粘であった。同じく欠山様式への移行期の土器を主体とする祝田遺跡では、上層が261点中の46点（17.6％）が有粘であり、下層が39点中の9点（23.1％）が有粘であった。次に、欠山様式の土器を主体とする椿野遺跡では、全体で263点中の128点（48.7％）が有粘であり、1982溝に限定すると243点中の108点（44.4％）が有粘であった。また元屋敷様式の土器を主体とする中平遺跡では、269点中の2点（0.7％）が有粘であった。以上の結果から、有粘率は伊場様式で55％前後、欠山様式で40％代、元屋敷様式でほぼ0％となると考えられる。ただし祝田遺跡の有粘率が低い点からみて、地域差も考慮に入れる必要があろう。

他にも粘土帯が巻かれた甕が出土している遺跡がある（以下は既刊報告書の土器実測図を参考にしている）。複数個が出土している遺跡に、南部海岸平野の角江遺跡（現在報告書準備中）、鳥居松遺跡（現在報告書刊行中）、鹿小路遺跡、曙東遺跡、浜名湖東岸の本村遺跡、都田川流域の障子ケ谷遺跡、川久保遺跡がある。単数個が出土している遺跡に、浜名湖南岸の寺川遺跡、弁天島湖底遺跡、天竜川以東の鶴松遺跡と新平山遺跡がある。

今回整理した台付甕の有粘率は、第4次調査で39％、第12次1期調査38％、第12次2期調査34％であった。これらの数値はこれまでの伊場遺跡の有粘率と比べてやや低いものであり、その原因がどこにあったのか検討する必要がある。

2．伊場遺跡群について

近年、伊場遺跡周辺では数多くの発掘調査が行われ、その結果として次々と新しい発見がなされている。そのなかでも特に弥生時代後期についての成果がめざましく、伊場遺跡周辺には複数の集落が存在していたことが確認されている。したがって、もはや伊場遺跡だけを問題にしていても大きな意味を持たず、周辺の遺跡を含めた伊場遺跡群という視点でとらえる必要性が言及されている。そこで本節では、簡単ではあるが、伊場遺跡と伊場遺跡群の関係および平野部に点在する遺跡群について見てみよう。

・伊場遺跡の主な出土品

伊場遺跡の三重環濠内側からは次のような遺物が出土している。

＜木製短甲＞木製短甲の胸当部分が外側環濠の東部分（ＹＴ９）から、背当部分が中央環濠の北西部分（ＹＴ６）から出土している。全面に厳手文等の精緻な彫刻が施され、黒漆と赤漆で塗り分けられている。木製短甲はこれまでに数遺跡から出土しているが、これほど装飾性に富み、かつ華麗なものは他に存在しない。

＜ヒレ付土器＞外面の縦横にヒレ状の突帯をつけた壺であり、これまでに伊場遺跡から２点が発見されている。発見当初には、ヒレ付土器は伊場様式のメルクマールとなるものと考えられた。しかし他の遺跡からはまったく出土しないことから、伊場遺跡だけに存在する形態である可能性が強い。

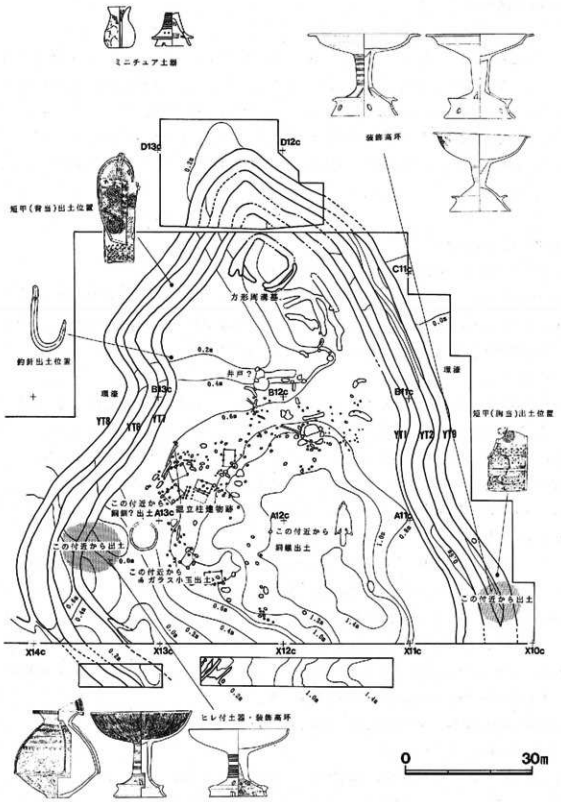
＜装飾高坏＞前記したように非常に装飾性に富んだ高坏である。伊場遺跡からは多くの破片が出土しているが、図上完形品となるものは５点のみである。第59図に示すように、東側の環濠から３点、西側の環濠から２点が出土している。

＜ミニチュア土器＞伊場遺跡からは多くのミニチュア土器が出土しているが、まだ未整理である。第59図に示したものは、今回の整理対象である第４次調査で出土した壺形ミニチュア土器と、非常に興味深い装飾高坏形のミニチュア土器である。他に、手づくね（４次－30、12次１期－30、12次２期－82等）として図化したものがある。

＜銅製釣針＞今回の整理対象である第４次調査で出土したものである。正確な出土地点を第９図に示した。大きさは縦8.2cm、横4.3cmと、やや大型品である。

＜その他＞掘立柱建物付近から銅鏃１点、銅鋲１点、ガラス小玉約10点が出土している。また土笛の可能性もある土製品も出土している。

以上の中で特に注目されるものは、木製短甲、ヒレ付土器、装飾高坏、ミニチュア土器であろう。木製短甲は装飾性に富みかつ背当部分に司祭者のシンボルである羽根が表現されている点で、ヒレ付土器は伊場遺跡だけに見られる独特の形態である点で、装飾高坏は華麗な形態をしている点で、ミニチュア土器は装飾高坏の模倣品がある点等で、非常に祭祀的な要素が強いと言えるのではなかろうか。



第59図　伊場遺跡の主な出土遺跡

・伊場遺跡周辺の遺跡

伊場遺跡の周辺には次のような遺跡がある。

＜梶子遺跡＞伊場遺跡の北約 300mに位置し、おもに伊場様式（古）～伊場様式（新）の土器が大量に出土している。主な遺構としては、単条の環濠が数ヶ所と、その内側から掘立柱建物群や井戸などが検出されている。梶子遺跡は最大に見積もると東西１kmに及ぶ長円形の環濠集落が想定される。環濠の内側と推定される地点から近畿式銅鐸の飾耳１点と銅鏃１点が出土している。

＜梶子北遺跡＞伊場遺跡の北西約 600mに位置し、おもに伊場様式（古）～伊場様式（新）の土器が出土している。前記した梶子遺跡の集落の北西端に当たると推定される。

＜曙東遺跡＞伊場遺跡の東約 600mに位置し、おもに伊場様式（新）～欠山様式の土器が出土している。主な遺構としては単条の環濠と推定される溝が検出されている。

＜鳥居松遺跡＞伊場遺跡の南東約 700mに位置し、おもに伊場様式（新）～欠山様式の土器が大量に出土している。主な遺構としては、単条の環濠と土器の入った土坑群が検出されている。この鳥居松遺跡が集落の南端で、前記の曙東遺跡が集落の北端と推定される。

＜城山遺跡＞伊場遺跡の西約 500mに位置し、おもに伊場様式（新）～欠山様式の土器が出土している。主な遺構としては、方形周溝墓や溝が検出されている。

＜東若林遺跡＞伊場遺跡の南約 600mに位置している。弥生土器の小破片が表面採集されたのみであり、詳細は不明である。

このように伊場遺跡三重環濠集落の周辺には２～３の集落が存在し、それらは伊場遺跡を中心とした半径約１kmの円内に集中している。すなわち伊場遺跡群は伊場遺跡三重環濠集落を核とする集落群であったと推定される。では、その中央に位置する三重環濠集落はどのような集落であったのであろうか。次の３点からみて、特別な集落であったと考えることができる。第一に、周辺の集落は単条の環濠をもつだけであるが、伊場集落は三重環濠をもつ点である。第二に、伊場遺跡の三重環濠は東西約120m、南北約140mと、やや小規模である点である。第三に、彩色された木製短甲やヒレ付土器、ミニチュア土器という特殊な遺物が出土している点である。

伊場遺跡の三重環濠集落を、例えば、祭祀を行う場所であったとか、集落群の司祭者が居住していた場所であったとか、考えることはできないだろうか。

・点在する遺跡群と銅鐸

伊場遺跡群と同様の遺跡群が浜松市の南部海岸平野および天竜川西岸平野に点在している。南部海岸平野には角江遺跡群と伊場遺跡群があり、天竜川西岸平野には南から北に向かって芳川遺跡群、飯田遺跡群、和田遺跡群、長上遺跡群が連なっている。角江遺跡群には角江遺跡・中平遺跡・天の峰遺跡が属する。伊場遺跡群は前記した通りである。芳川遺跡群は現在までのところ海東遺跡だけである。

飯田遺跡群には三和町遺跡・開戸遺跡・醴遺跡が属する。和田遺跡群には松東遺跡・越前遺跡・山の神遺跡・篠ケ瀬遺跡が属する。長上遺跡群には天王中野遺跡・天王遺跡・田見合遺跡が属する。

そして、これらの遺跡群と密接な関係が想定されているものに銅鐸がある（文献26）。銅鐸本体は、和田遺跡群の木船遺跡から突線紐３式に属する三遠式銅鐸が２点と、芳川遺跡群のツツミドオリ遺跡から突線紐３式に属する三遠式銅鐸が１点出土している。後者からはもう１点出土したとされているが、現在は行方不明となっている。銅鐸の破片は、伊場遺跡群の梶子遺跡から突線紐３式に属する近畿式の飾耳が１点と、和田遺跡群の松東遺跡から突線紐３式に属すると推定される近畿式の飾耳が１点出土している。さらに浜松市の南方海岸から出土したとされる破片が２点ある。詳しい出土地点は不明である。銅鐸関係品として、角江遺跡群の角江遺跡から小銅鐸に使われた石製の舌が１点と銅鐸形上製品が１点出土している。

このように銅鐸および飾耳はすべて突線紐３式であり、ほぼ同時期に製作されたものである。このことは当地域において銅鐸が急速に普及し、短期間使用されただけで突如として消え去ったことを物語っている。では、急速に普及した時期はいつであろうか。現段階では、平野部の開発が急激に進み遺跡群が形成された伊場様式新段階と考えるのが妥当であろう。それを裏付けるものとして、梶子遺跡出土の飾耳が伊場様式新段階の土器と供伴している点と、伊場様式新段階の土器が主体を占める松東遺跡から飾耳が出土している点があげられる。

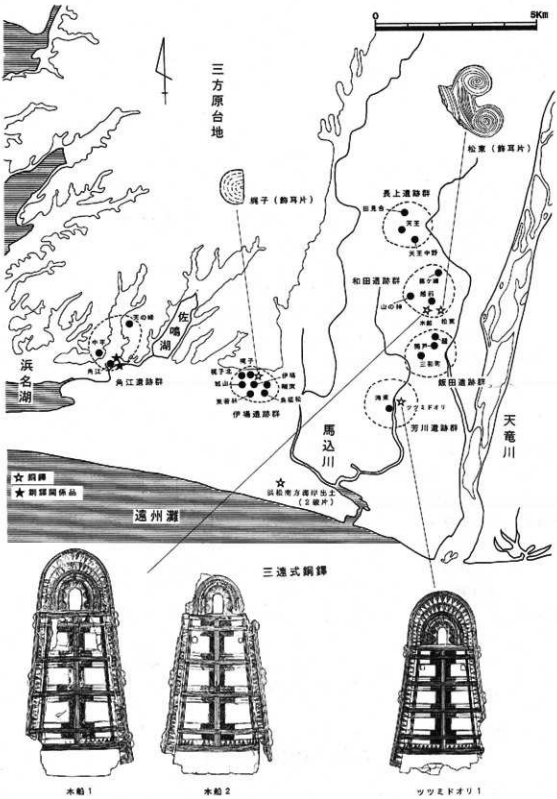
南部海岸平野および天竜川西岸平野への進出は、山の神遺跡・田見合遺跡・海東遺跡・梶子遺跡・角江遺跡等から中期弥生土器が出土していることから、すでに弥生時代中期には始まっていたことが確実である。しかし出土土器の量やその遺構からみて、集落は小規模なものであったと考えられる。そして、本格的に平野部が開発されたのは伊場様式新段階になってからである。この時期には急激な遺跡数の増加と集落の規模拡大がみられ、また大量の土器が出土している。なぜこのような急激な平野部の開発が可能であったのであろうか。天竜川西岸平野の急激な開発の要因として次の３点が指摘されている（文献27）。

（１）天竜川流路の安定化と湿地帯の形成（自然的条件）

（２）天竜川の水を制御し得るような灌漑技術の発達、農具の発達（技術的条件）

（３）大規模な水田経営を行い得る集団関係の成立（社会的条件）

このなかで特に注目したいのが、（３）の集団関係の成立である。水田開発や灌漑工事を単一の集落だけで行うことは不可能であり、当然のこととして、いくつかの集落が共同して作業を行ったことであろう。その集落の集まりの最小単位が平野部に点在する各遺跡群であったと想定したいのである。むろん、農具および武器の製作や金属器の流通もこの単位で行われたと思われる。そして、この強い集落間のまとまりの背景として、共同して行う「銅鐸のまつり」という農耕祭祀を想定するも可能であろう。



第60図　遺跡群と銅鐸関係品出土地

群名称	主な遺跡	主な出土土器	銅鐸関係品
角江遺跡群	角江遺跡	伊場（古）～伊場（新）	小銅鐸の石製舌、銅鐸形土製品
	中平遺跡		
	天の峰遺跡		
伊場遺跡群	伊場遺跡	伊場（古）～伊場（新）	
	梶子遺跡	伊場（古）～伊場（新）	近畿式飾耳（突線鈕３式）
	梶子北遺跡	伊場（新）～欠山	
	畷東遺跡	伊場（新）～欠山	
	鳥居松遺跡	伊場（新）～欠山	
	城山遺跡	伊場（新）～欠山	
	東若林遺跡	小破片	
芳川遺跡群	海東遺跡		
	ツツミドオリ遺跡	－	三遠式銅鐸（突線鈕３式）
飯田遺跡群	三和町遺跡	欠山	
	開戸遺跡		
	體遺跡		
和田遺跡群	松東遺跡	伊場（新）～欠山	近畿式飾耳（突線鈕３式？）
	越前遺跡		
	山の神遺跡	伊場（新）～欠山	
	篠ヶ瀬遺跡		
	木船遺跡	－	三遠式銅鐸（突線鈕３式）
長上遺跡群	天王中野遺跡	伊場（新）～欠山	
	天王遺跡		
	田見合遺跡	伊場（新）～欠山	

第7表　遺跡群と銅鐸関係品

引用・参考文献

1 浜松市遺跡調査会　1972　『伊場　第4次発掘調査月報合本』
2 浜松市教育委員会　1978　『国鉄東海道線線路敷内埋蔵文化財発掘調査報告書』
3 浜松市遺跡調査会　1981　『伊場遺跡第8～13次発掘調査概報』
4 浜松市教育委員会　1982　『伊場遺跡遺物編3』
5 (財)浜松市文化協会　1990　『都田地区発掘調査報告書　下巻』
6 (財)浜松市文化協会　1991　『梶子遺跡Ⅷ』
7 国学院大学伊場遺跡調査隊　1953　『伊場遺跡』
8 浜松市教育委員会　1971　『伊場遺跡第3次発掘調査概報』
9 浜松市遺跡調査会　1973　『伊場遺跡第5次発掘調査概報』
10 浜松市遺跡調査会　1975　『伊場遺跡第6・7次発掘調査概報』
11 浜松市教育委員会　1978　『国鉄浜松工場内遺跡発掘調査概報Ⅲ』
12 浜松市教育委員会　1979　『国鉄浜松工場内遺跡発掘調査概報Ⅳ』
13 浜松市遺跡調査会　1980　『国鉄浜松工場内遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
14 浜松市遺跡調査会　1983　『国鉄浜松工場内遺跡第Ⅵ次発掘調査概報』
15 浜松市遺跡調査会　1983　『国鉄浜松工場内遺跡第Ⅶ次発掘調査概報』
16 浜松市教育委員会　1986　『浜松市山の神遺跡発掘調査報告書－範囲確認調査－』
17 雄　踏　町　1973　『雄踏町誌　資料編5』
18 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　1994　『祝田遺跡』
19 浜松市遺跡調査会　1982　『椿野遺跡』
20 浜松市遺跡調査会　1985　『椿野遺跡』
21 浜　北　市　1989　『浜北市史　通史・上巻』
22 静　岡　県　1992　『静岡県史　資料編3　考古三』
23 本郷遺跡調査団　1990　『海老名本郷Ⅵ』
24 見晴台考古資料館　1992　『見晴台遺跡－第30次発掘調査の記録－』
25 松川町教育委員会　1987　『倉平遺跡』
26 向坂鋼二　1989　「浜松の弥生時代再考」『浜松市博物館館報』1
27 向坂鋼二　1968　「原始」『浜松市史　一』浜松市役所
28 佐原　真　1960　「銅鐸の鋳造」『世界考古学大系　第2巻』平凡社
29 佐原　真　1964　「銅鐸」『日本原始美術4』講談社
30 佐原　真　1974　「銅鐸のまつり」『古代史発掘5』講談社
31 梅原末治　1985　『銅鐸の研究』復刻版　木耳社
32 鈴木敏則　1987　「欠山様式とその前後－西遠型－」『欠山様式とその前後　研究報告編』愛知考古学談話会

石製品・土製品等報告

吉賭善品賤士・品賤百

Ⅰ　石製品

1．石製品の概要

伊場遺跡からは、縄文時代から平安時代（あるいはそれ以降も含むか）にかけての石器が多数出土している。年代が確実な遺構内からの出土品と、形態から時代幅が推定できる出土品を別にして、自然礫をそのまま利用した砥石など大多数の資料は、時代ごとの特色や変遷が認めにくく、年代の決定が困難である。

形態から縄文時代の所産と考えられる資料は、全体のごく一部である。当該期の遺構は検出されておらず、砂堤列（浜堤）への一時的な進出ととらえられている。しかしながら、村西遺跡（文献58）などの周辺の遺跡からも縄文時代前期・後期の遺物の出土が報告されるようになり、梶子北遺跡では、砂堤列上に集石遺構が検出されるにいたった。伊場遺跡においても、鉄道用地内に埋め戻して保存された律令期の遺構面の下層に、未検出のまま縄文時代の遺跡が埋まっている可能性もあろう。

石製品の大半は、当然ながら、伊場遺跡が盛行する弥生時代後期以降の所産となる。

伊場遺跡発掘調査区のうち東部地区の出土品には、弥生時代後期から古墳時代後期の資料が多いものと考えられる。とくに、弥生時代後期環濠内の出土資料は、時代を限定できる資料と考えている。環濠に囲まれた内部の集落部分は、弥生時代と古墳時代の遺構が混在しているので、確実に時代を限定できる資料は少ない。それでも、古墳時代住居跡内の出土品など、若干の資料を抽出することができる。

調査区のうち西部地区では、大溝内で発見された資料が多く、前述したように、大溝が河川であるという性格上と、当時の発掘調査の層位区分の精度があやうい（文献８）ことから、表記された出土層位によって年代を決定するのはむずかしい。大溝内の出土土器と比較するなら、古墳時代後期から奈良平安時代の資料がほとんどで、弥生後期の資料は含まれていないということはいえよう。大溝より西の建物跡の集中域には、祭祀遺構に関連する滑石製の一括資料などがある。

石製品の材質については、一部をパリノサーヴェイに委託し、また財団法人愛知県埋蔵文化財センターのご教示を得たが、全点について、出自が明らかにできたわけではない。伊場遺跡の所在する静岡県西部（西遠江）において、岩石の露頭に関する情報を当館が収集していないという現状もある。少ないとも沖積平野に位置する伊場遺跡周辺には有用な岩石の露頭は存在しない。磨製石斧や滑石製品などの特殊な石材だけでなく、大量に出土する白色流紋岩の自然礫を利用した砥石なども、奥三河などかなり遠方から運ばれた可能性がある。いわゆる軽石製の砥石も検出されているが、これらは、村西遺跡ほかでの出土状況から判断して、海流に乗って運ばれ、海岸に打ち上げられたものが利用されたのだろう。伊場遺跡の旧地形を復元する際の傍証となりうるかもしれない。

2．おもな出土遺物

縄文時代の資料は、第72図の56～60などで、Ａ１１区に集中して出土している。石斧は西遠江に多い緑色片岩、石錘は河川礫である。60は砥石として再利用されている。58、59は黒曜石を加工している。これらはかつて、浜松市南西部の砂堤列の陸化時期が縄文時代中期以前であること示すものとして報告された（文献11）。この見解は近年の周辺遺跡の発掘調査によって、さらにさかのぼるものとなってきている（文献58等）。Ａ１１区は、発掘区中で砂丘がもっとも高い位置にあたる。遺構は確認されていない。

弥生時代の資料としては、第65図17、18、第67図30、33のような太形蛤刃磨製石斧があげられる。おそらく遠江に採集地があると思われる緑色系の石と、出自のはっきりしない石がある。近年報告されているハイアロクラスタイト（文献31）に表面上似ている石斧が指摘されているが、結論は得ていない。仮にそうだとすれば、尾張との関連を示す資料として注目されるものになろう。

17、18などは、刃部が何度となく再生され、全体に長さが短くなっている。再生時の調整には凹凸があり、必ずしもていねいに仕上げてはいない。30、33は、刃部に損傷があり、最終的には再生されずに廃棄されたものであろう。とくに33には刃部先端に使用痕が著しく、刃がつぶれている。また、33や第69図39では基部中央に円環状に擦痕が認められる。木の柄に装着した痕跡と考えられる。

第72図61は、柱状片刃石斧である。伊場遺跡では、弥生時代に特徴的なこれらの石斧の出土数はごく少ない。石包丁等は、整理作業でも抽出されなかった。

第68図38は、かつて古墳時代の剣形模造品として報告されている。出土層位の検討はなお必要であるが、他の古墳時代の模造品が滑石を使用しているのと石材が異なること、また出土位置には弥生時代の遺構が集中することから、弥生時代の石槍と判断したい。赤変していることから、火を受けた可能性もある。

このほか同図34、35のような平板な紡錘が、遺構から見ても弥生時代の所産と考えられる。直径や形状がおよそ共通する。片面がほぼ平坦に仕上げられているのに対し、対面はやや丸みをおびて作られていることから、平坦面を上面として図示した。それぞれ凝灰岩または砂岩と思われる。第70図45には小さな穴による文様がほどこされている。

古墳時代の資料としては、白色流紋岩の自然礫を利用した砥石があげられるが、前代、また後代の奈良平安時代の資料を含んでいる可能性がじゅうぶんにある。第68図37は古墳時代後期住居跡のＫＤ１２から出土している。自然礫の４面を適当に利用している。利用の仕方や頻度は礫それぞれの個体によって異なるようである。礫本体が細くなるまで有効に利用した個体と、若干の磨り痕だけが残る個体がある。鋭い刃痕が残るものもあり、鉄製品用の砥石であることはまちがいない。この石材は伊場遺跡周辺では産出しない。自然礫の状態で遠方から大量に搬入されているものと推定される。　石製紡錘のうち、第64図15、16、第65図19、第69図42、43など断面逆台形の資料が古墳時代のものと考えられる。これらはいずれも滑石製である（蝋石の可能性もあるが判断できない）。形状や直径はよ

く似通っているが、径の大小に２種類ありそうである。紡錘としての使用状況を検討し、平坦な面を上面として図示した。43は鋸歯文が両面にていねいに彫刻されている。特別な布を織るための糸を績む道具かもしれないが、破片となって出土しており、実用品と考えたい。第71図52、54の紡錘にも彫刻が認められる。

なお、43は大溝内Ｖ層から出土していた半身の破片と、今回の整理作業で大溝内の貝塚Ｓ（略記ＳＳ）内から選別された破片（図のむかって左半）が接合したものである。ＳＳは奈良時代の遺構であり（第95、96図）、正当な年代判断をくだすことができない。けれども、実際にＳＳからは古墳時代後期の土器も混入して取り上げられているので（第96図）、評価については諸兄にゆだねることにしておく。

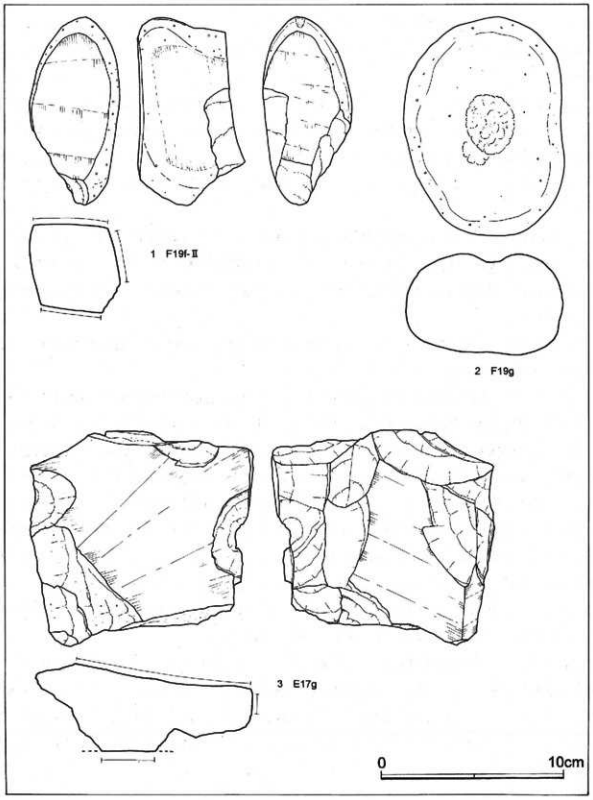
リ５区のＢ層中からは、滑石製の玉類が一括して出土している（第66図20、21）。勾玉１点と臼玉39点のほか、土師器・須恵器・小形土製品も出土し、祭祀遺構２（略称ＫⅠ－２）として報告されている（文献６）。周囲からは遺構は検出されていない。後述する祭祀遺構１では、滑石製品は検出されていない。

これらの滑石製品は、既報告のとおり５世紀後半と判断したい。遺構内での祭祀の内容については考察する材料をもたない。

このほか、Ｂ１１区から滑石製双孔円板が出土し、臼玉も発掘区各所から散発的に発見されている。これらは、伊場遺跡の古墳時代出土土器と比較して、５世紀後半から６世紀代と判断してよいだろう。

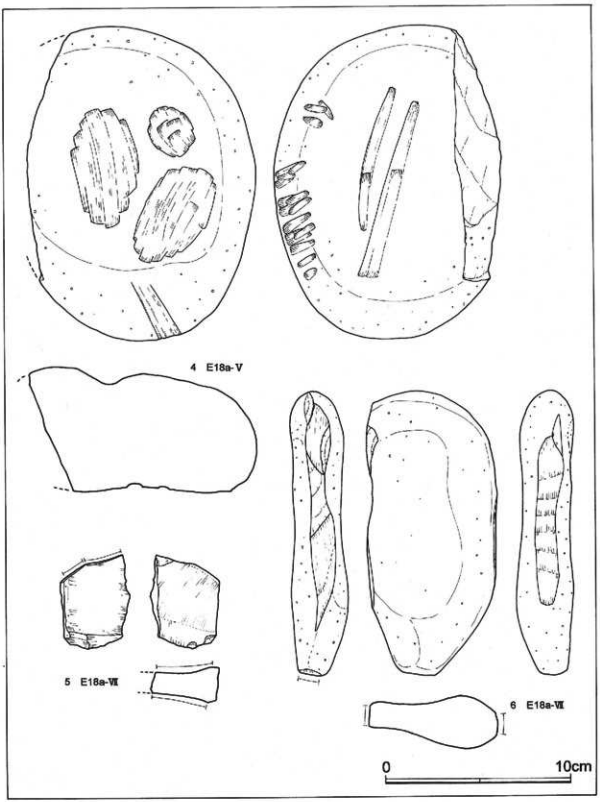
なかでも第66図25の臼玉は、Ａ１１区の土坑ＫＰ－１内から大量の炭化米に混じって検出された（文献２）。この炭化米は砂質の覆土の中に混入していたもので、炭化米だけが層をなしていたわけではない。砂から選別された米は、５リットル以上と推定されている（文献11）。土坑出土遺物は臼玉以外になく、炭化米の時期を古墳時代後期と推定することになった貴重な資料である。覆土の状況から、もともとこの土坑に米を埋設する意図はなく、炭化した段階で土砂とともに処分されたものと判断された。なお、この土坑に近接して古墳時代住居跡ＫＤ３が位置し、この住居跡が火災にあっていることから、米はこの住居に保管されていたという推論も調査員の中にある。臼玉は住居内に存在したのか、土坑への埋設時に新たに入れられたのかはっきりしない。

奈良平安時代の石製品を峻別することは困難であった。Ｆ区やＥ区の上層から出土した資料は、周辺の遺構から判断して、当該期の可能性がある。第61図３のような砥石は、幅の広い刃をもつ金属製品を、第62図４のような砥石は、先端の細い金属を研いだものであろう。なお、各区に凹石状の石器があるが、これらも年代は特定できない。第63図10のように凹石を砥石として再利用する例も数多く認められる。



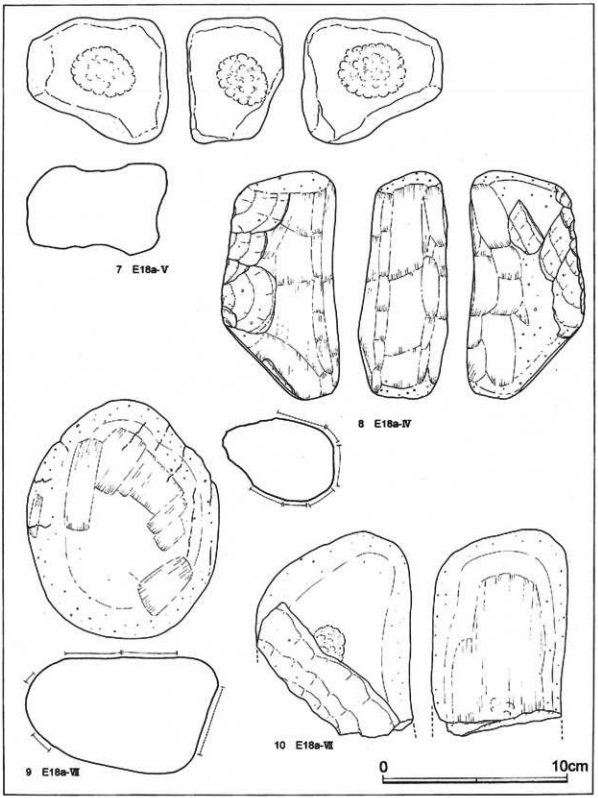
第61図　伊場遺跡出土石器実測図1

1は白色凝灰岩の自然石を利用した砥石。2は河原石の凹石。3は砂岩製の砥石。



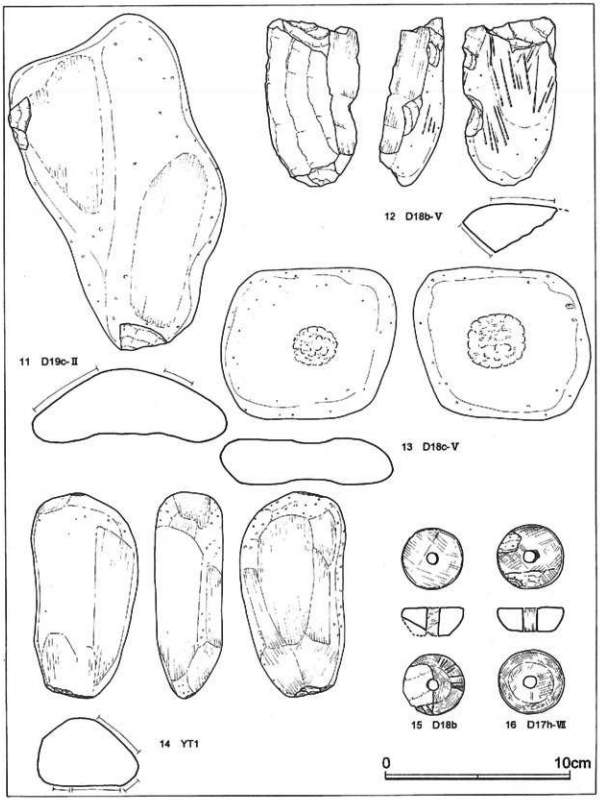
第62図　伊場遺跡出土石器実測図2

4の砥石は先端の鋭利な金属を研いだものと思われる。刃先は長くないようである。



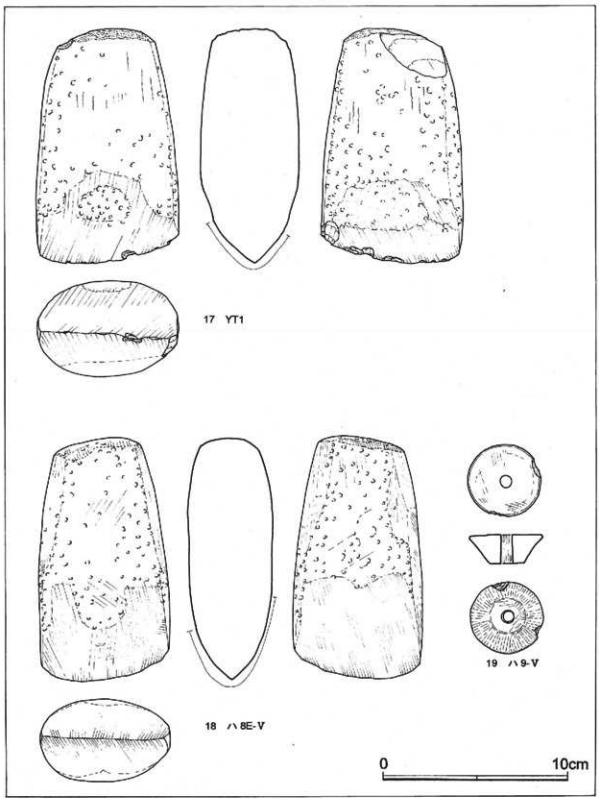
第63図　伊場遺跡出土石器実測図３

７は３面を凹石として利用。10は凹石の破片を砥石として再利用している。



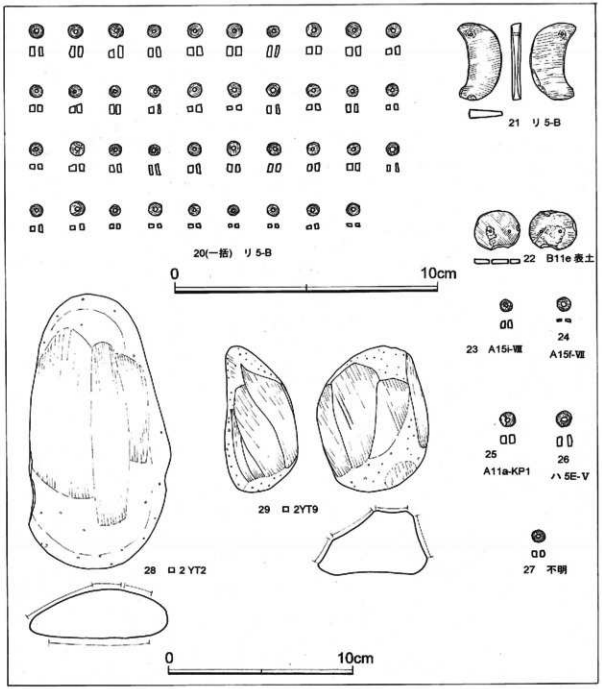
第64図　伊場遺跡出土石器実測図 4

12は鋭い刃痕の残る砥石、背面は欠損する。15の滑石製紡錘は下面に刻み文様がある。



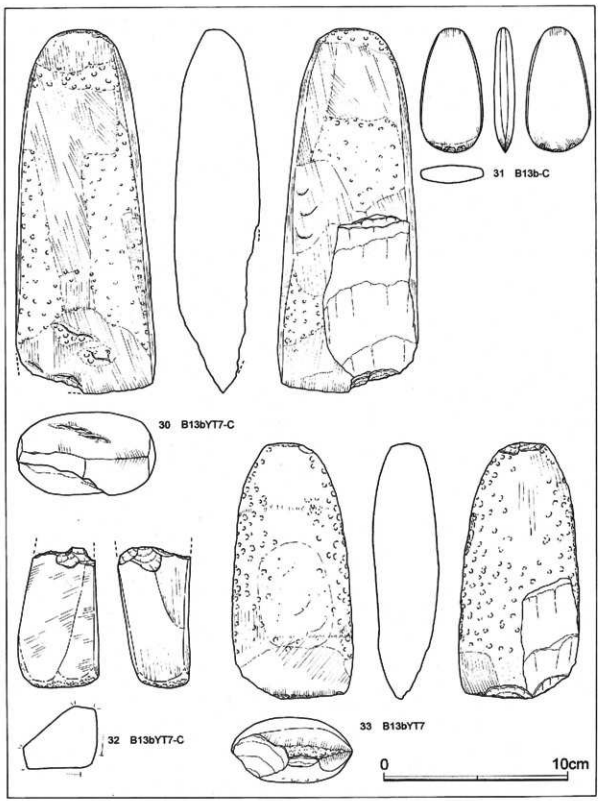
第65図　伊場遺跡出土石器実測図5

17、18の太形蛤刃石斧はいずれも刃部を何度か再生している。19は古墳時代滑石製紡錘



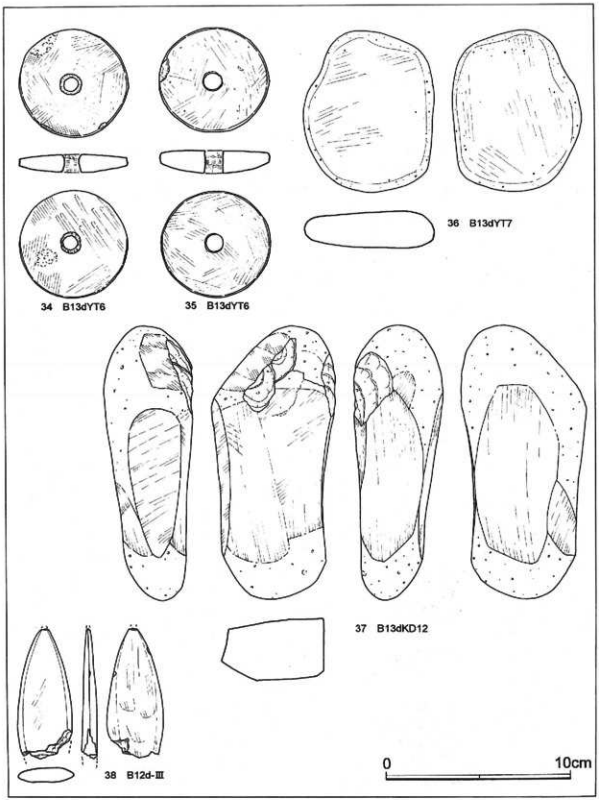
第66図　伊場遺跡出土石器実測図 6

20とした滑石製の臼玉39点は、リ５区のB層発掘時に、ほぼまとまって発見された。遺構は検出されなかったが、21の滑石製勾玉や、土器（文献６）も出土したことから、祭祀遺構があったものと推定されている。臼玉・勾玉とも平板を加工したもので、ていねいに仕上げてはいない。勾玉の孔の周辺には玉ずれの痕跡がある。このほかの滑石製品は散発に発見されている。22の双孔円板は、地盤の高い発掘区東部の表土内からの発見である。



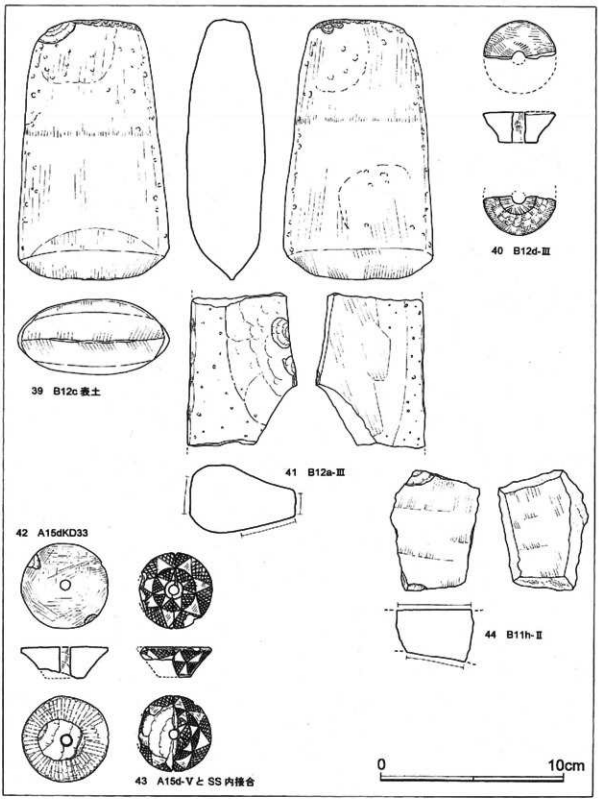
第67図　伊場遺跡出土石器実測図７

30、33は使用痕の著しい弥生時代石斧。31の磨製石斧は縄文時代の製品と考えられる。



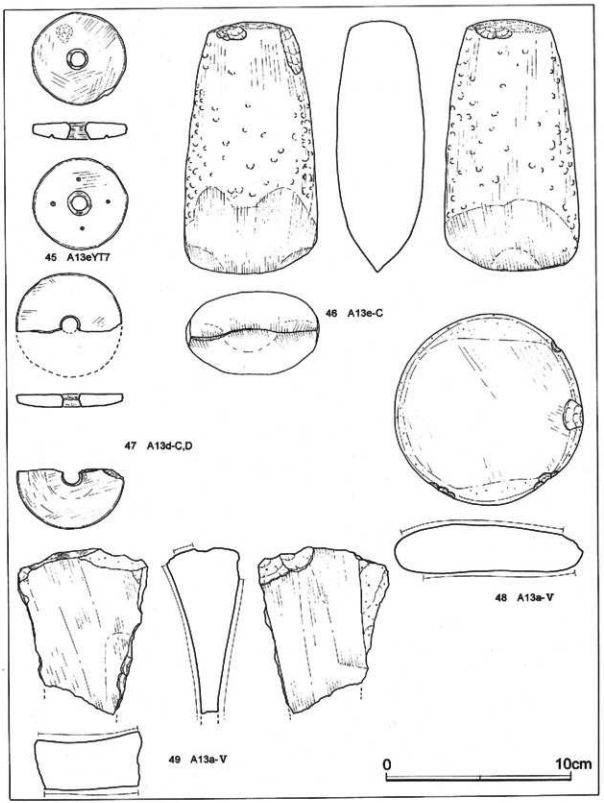
第68図　伊場遺跡出土石器実測図 8

34、35は出土位置も近く形態もよく似る弥生時代紡錘。38は弥生時代の石槍と考えたい。



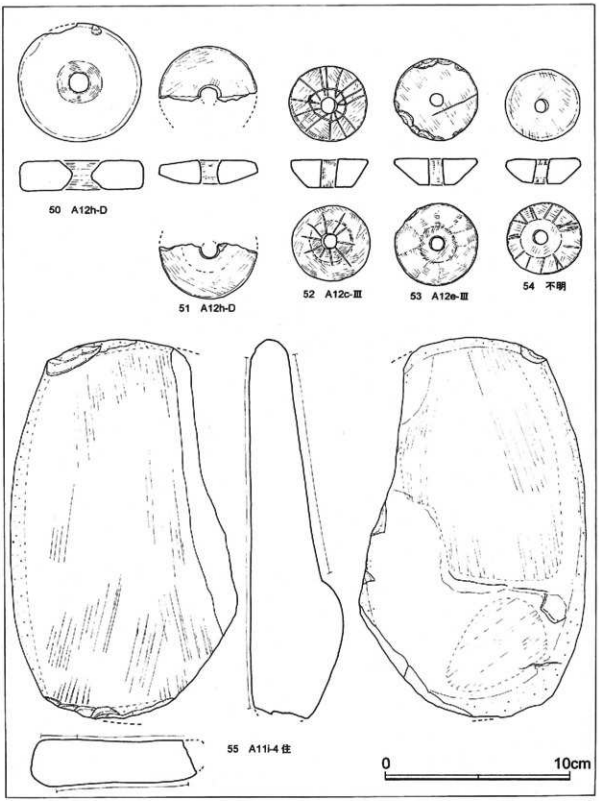
第69図　伊場遺跡出土石器実測図 9

39の石斧には木柄への装着痕が残る。43の紡錘には天地とも精巧に鋸歯文が彫られる。



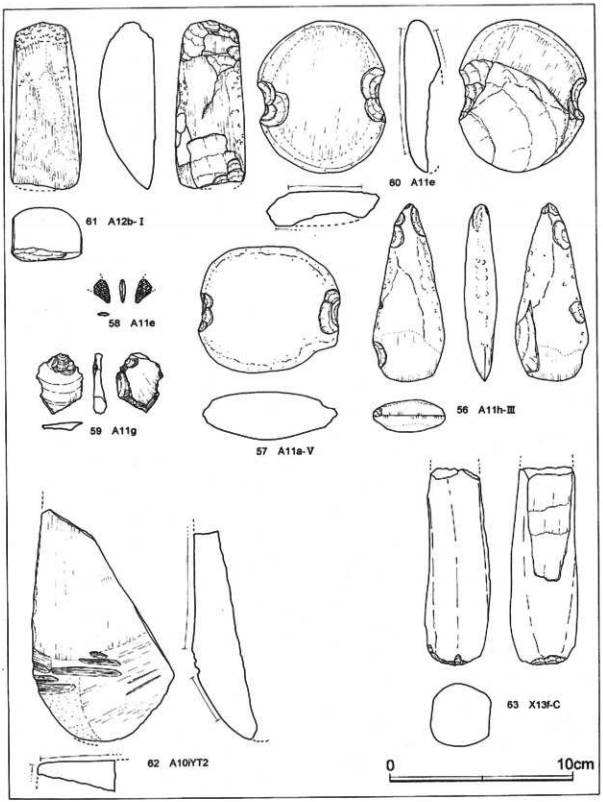
第70図　伊場遺跡出土石器実測図１０

45の弥生時代紡錘は、片面に小穴による文様がある。46の石斧は若干の使用痕がある。



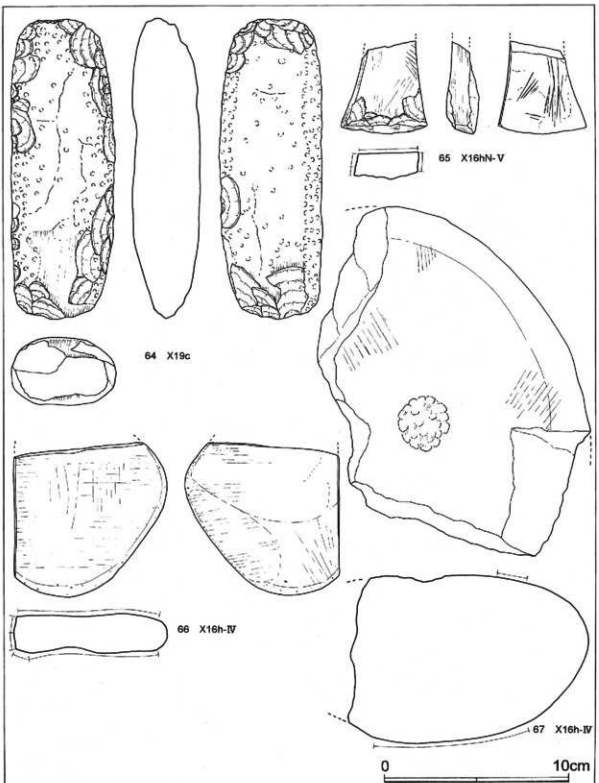
第71図　伊場遺跡出土石器実測図１１

50は弥生時代の環石。52～54は古墳時代の滑石製紡錘。52、54は刻み文様がある。



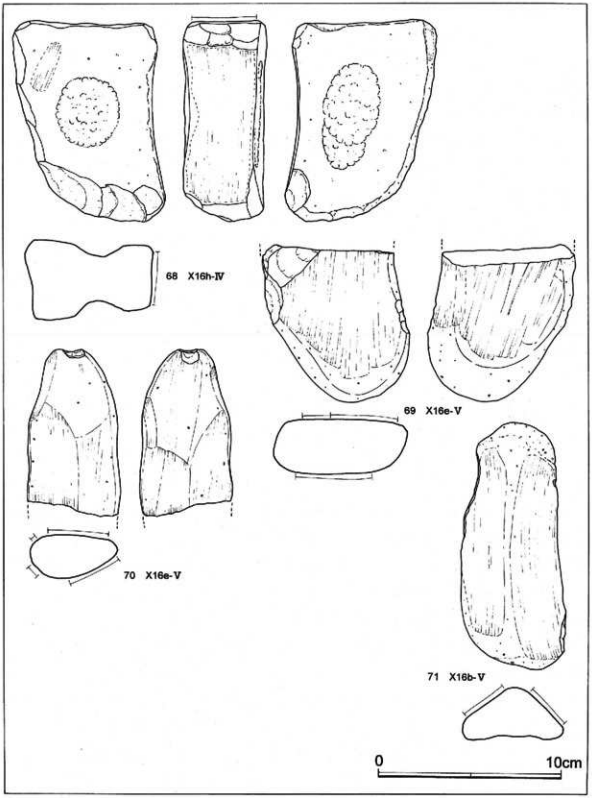
第72図　伊場遺跡出土石器実測図１２

61は唯一の柱状片刃石斧。56～60は縄文時代の資料で、近接地から出土している。



第73図　伊場遺跡出土石器実測図１３

64は磨製石斧の刃部が大きく欠損したもので、縄文時代の資料と考えられる。



第74図　伊場遺跡出土石器実測図14

いずれも砥石。68は凹石を再利用している。

II　土製品ほか

ここで報告する土製品とは、弥生土器や土師器・須恵器などのうちで、既報告書に掲載したいわば食器や貯蔵器といった実用品を除いたものを示す。すなわち紡錘などの小形の実用品のほか、模造品、用途不明の小形土製品などである。整理途上で確認された実用土器も、一部含まれていることをご了承いただきたい。用途不明の土製品の多くは、通常祭祀遺物と考えられるものである。小形の土製品がほとんどで、実測可能な個体数もそれほど多くないので、年代を限定せず、既報告書で扱われなかった資料を掲載した。

また、この章では、一部の金属製品とガラス製品を合わせてとりあげた。

1．紡錘

植物などの繊維によりをかけて糸をつくるための紡錘（紡輪）は、弥生時代から普遍的に存在している。材質には石器や土器のほか骨角器などもあり、形態もさまざまである。伊場遺跡では各時代の資料が得られたので、この項で前述した石製品も含め概述してみたい。最近では、向坂鋼二氏が静岡県史においてまとめている（文献42）。

前述した石製品以外の資料を第75、76図にまとめた。このうち、1～4は骨製である。重量が3～5gと非常に軽く、紡錘として役に立つのか判断しかねるが、そのまま報告しておく。これらも片面を平坦に、対面をやや丸く仕上げており、天地の意識があって製作使用されたものと考えられる。真円に近く加工されており、4点とも形状も共通しているが、3は欠損している。3、4には加工痕がよく残っている。2の同心円状の擦痕は、使用痕だと思われる。大溝内の貝塚ＳＥとＳＳ付近に集中して出土した。けれども、骨角器でもあり、貝殻周辺のものだけが腐食せずに残存したのかもしれない。年代は、ＳＥからの出土であり、奈良時代と考えたい（第96図参照）。しかし、ＳＳからは前述した石製紡錘43（第69図）が採集されているのであって、報告者としては表現がむずかしくなった。古墳時代までの紡錘と材質や形態が異なると報告するにとどめる。

このほか301～316はすべて土製品である。このうち断面横方向に平板に製作されているもの(303,304,306,307,309,310,312,313,315,317)は、石製品同様、弥生時代のものと判断している。出土層位や遺構からみて、おおよそ首肯できるものと思われる。この形態のものの多くは、指でなでた調整痕をはっきり残している。片面を平坦に作るもののほか、むしろ凹面に製作してあるものが多い(304,305など)。やはり天地が意識された製作手法と考えてよいだろう。直径では6cm前後、5cm前後、4cm前後の3種類程度に分類できそうである。小形のもの（306,309等)では、軸木の径も細いことを観察することができる。中形・大形のものは、軸木の太さも石製品と共通する。312のように、石製品そっくりの形態をとるものもある。用途も同様と考えてよいだろう。

313はＡ１２区の古墳時代住居跡からの出土品であるが、両面に篦磨きの痕跡が残り、弥生時代（あるいは古墳時代前期まで）のものと推定される。両面とも平坦に作られているが、片面の中央に同心円状の擦痕があることから、こちらを上面と判断した。

305と311は逆円錐形で、重量が180ｇほどの大形の土製紡錘である。軸木の孔はいずれも細い。おそらく302の破片も同様の形態をとるものと推定される。これらの年代については、305がＹＴ７と呼ぶ弥生時代環濠内から出土していること、311も古墳時代の遺構が希薄な、弥生時代の遺構が多い発掘区から出土していることから、やはり弥生時代と考えたい。302と305には、篦磨きによる調整も認められる。したがって、弥生時代後期から古墳時代初頭の製作品と判断してよいものと思われる。他の弥生時代の紡錘と形態や重量が著しく異なり、製作する糸やその後の工程も別であろう。ただ、軸木が細いことから類推して、太い糸を製作する意図はないものと考える。撚りの少ない糸が推定されるが、詳細はわからない。305の上面にも、同心円状の擦痕が残る。

このほか308、314など、断面逆台形の土製紡錘は、石製紡錘との形態の共通性から古墳時代のものと考えられる。直径でも滑石製の紡錘と同様の大きさのものが多い。また軸木の太さも共通する。なでによって調整されるが、滑石製品ほどていねいな作りではない。

301は径に対して天地が長い特異な形態をとる。Ⅴ層の出土品ではあるが、ハ区はもともと古墳時代の土器を多量に取り上げた発掘区であり、この紡錘も古墳時代の所産である可能性は高い。上面に若干の刻み文様がほどこされているようで、滑石製紡錘に似る。

以上、石製・土製とも紡錘は、弥生時代の平坦なものから、古墳時代（後期）には断面逆台形のものに移行していくように見受けられる。また、それぞれに数種類があり、績む糸の材質や用途によって使用する製品が異なったものと推定される。極端に重量のある逆円錐形の紡錘は双方の系譜にのるものではなく、異なった用途の糸を績むためのものと判断しておきたい。

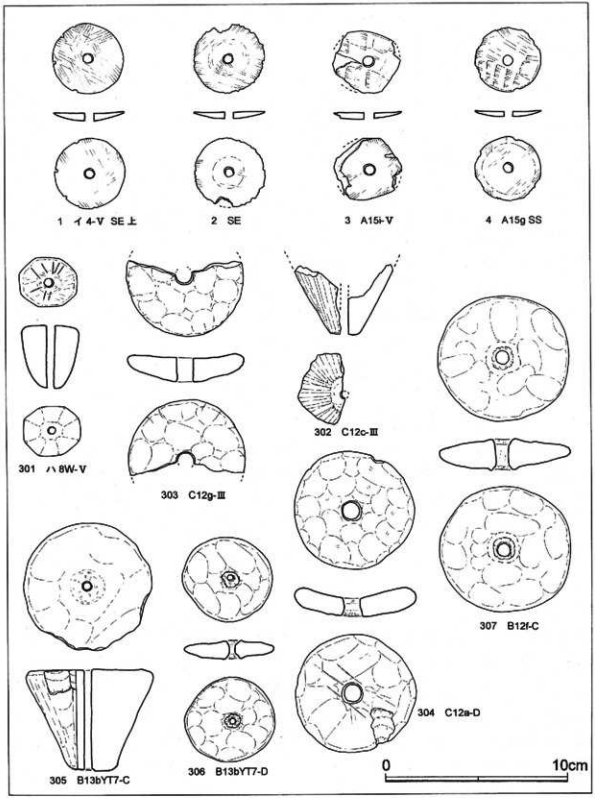
石製と土製の区別ははっきりさせられないが、古墳時代のものについては、滑石が使用されており、鋸歯文などの彫刻をほどこされたものもあることから、やはり石製紡錘では、特別な糸が製作されたと考えるのが妥当であろう。

伊場遺跡で見る限り、古墳時代後期にいたって、特殊な用途に利用する糸（あるいは布）が要求されるようになったように判断される。

なお、軸木となりうる木製品は、現在のところ抽出されていない。

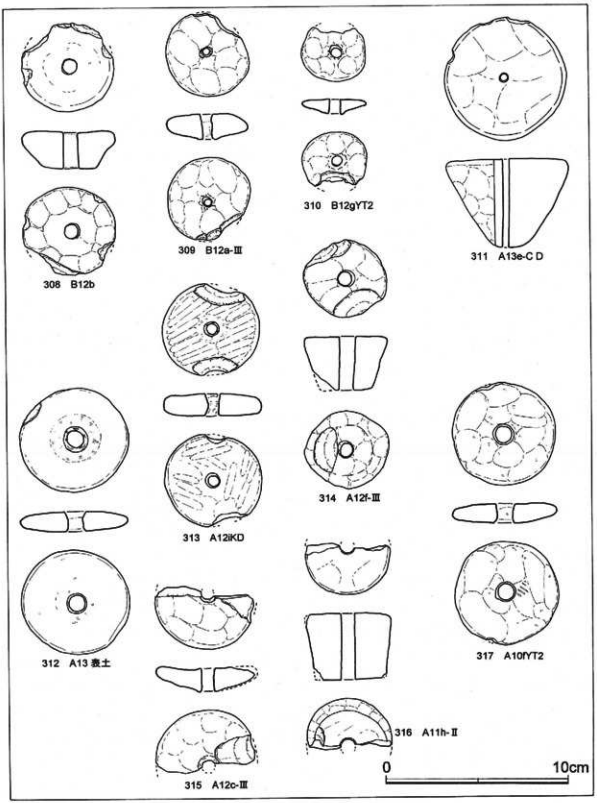
古墳時代末から奈良時代にかけての伊場遺跡では、木製の織機の部品が多数出土しており（文献３）、調布などが製作されたと考えられている。この布を織るための糸が、１～４のような紡錘で績まれたのか、他に紡錘があるのか、はっきりさせられなかった。出土土製品の中に、奈良時代に下る資料が含まれるのかもしれない。

伊場遺跡には、一次製品としての糸が納入されたという考え方も成り立つ。



第75図　伊場遺跡出土土製紡錘実測図1

1～4は骨角器、奈良時代と考えられる。以下は土製品。302は305と同様の形態か。



第76図　伊場遺跡出土土製紡錘実測図２

いずれも土製品。313は出土位置から見れば古墳時代の資料となる。

2．小形土製品

伊場遺跡の各区から小形土器（ミニチュア土器）が出土している。これらを年代順に紹介することは簡単ではないので、ここでも、発掘地区・層位順に一括して掲載する。大溝内ならびにその周辺からの出土品と、弥生時代環濠内の出土品がとくに多い。

弥生時代の所産と考えられるものに、当該時期の土器を忠実に模した254や258がある（第90図）。258は櫛描文様による平行線や扇形文もていねいに表現している。全体にはなでによって仕上げているが、頸部には篦磨きも見られる。この時代のミニチュア土器は基本的に、実物を忠実に再現していると考えてよかろう。

第79図26や31、第90図243は壺蓋と思われる。31は出土遺構・層位によってそう判断したが、古墳時代の鏡形土製模造品にも形態が似ている。243は片面のみ赤彩されているので、こちらを上面と判断した。

このほか第77図７、第79図29、第90図244～246など、いわゆる算盤玉状の土製品が環濠内や、弥生時代包含層とされるD層内から出土している。これらは中心の孔から一方向に向かって浅い溝が残るものが多い。用途はわからない。また、第90図248、249のように、中央に径の大きな孔のある土製品もある。用途はわからない。同図250、251は紡錘かもしれないが、績んだ糸を巻き取るには不向きである。

同図259は、かつて西日本の綾羅木遺跡ほかで出土例があり、中国に起源のある陶埙と比較して、「土笛？」として速報した資料である。速報当時から、出土例の分布域から大きく逸脱することや、弥生後期という時期から疑問も示されていた。しかしながら、積極的に評価していただく機会が多く、原始古代の楽器として、各地の展示などにも紹介された経歴が重なっている。今回この報告書に掲載するにあたって、今一度検討しなおしておきたい。まず、陶埙という表現だが、この名は、中国に起源を持つ楽器の名称であって、日本における出土例が未だに西日本に限定される現状で、伊場遺跡出土品にこの名を冠するのはふさわしくないと考える。それでは、西日本の陶埙にならって製作された楽器かどうかということになるが、陶埙でいう音階を生じるための孔の位置が、伊場遺跡出土品では異なっている。通常片面の胴部に４つある孔が見られず、口元にごく近い位置に両側から２孔ずつ穿孔されている。大きさも４cm弱と小さく、孔と孔の間隔は１cmに満たない。したがって、指で操作するには極めて不向きであろう。楽器として製作された可能性はほとんどなく、また陶埙を模して作った可能性も少ないものと思われる。口を絞じる意図のある容器を写実的に模した小形土製品と判断したほうが良いだろう。なお、この項については、下関市教育委員会文化課ならびに下関市立考古博物館のみなさんのご助言を得た。

古墳時代以降の土製品のうち、器を模したものは簡略化がすすみ、ていねいな作りのものは少ない。また、形態によっては、奈良時代以降の土製品との判別もむずかしい。古墳時代の祭祀遺構にともなう資料については、別に節をもうけて後述する。

とくに、イ区、ホ区、Ａ１５区付近の大溝内に、多くの小形土製品が集中している。詳細に観察していけば、とりあげられた10m四方の小区ごとに、共通した器形を見出すこともできる。多数の土製品を一度期に使用する祭祀が行われていたものと思われる。大溝は集落内の水辺として重要な役割を担っていたものと想像される。

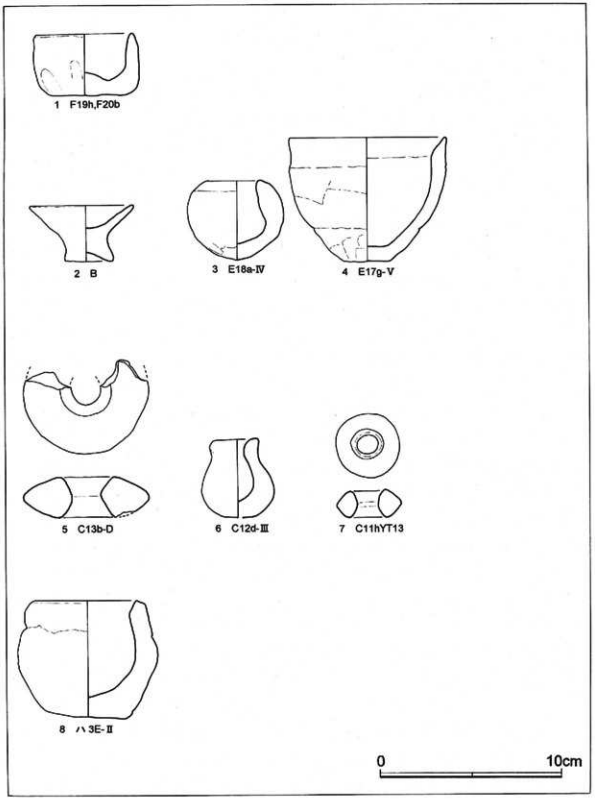
イ２区の出土資料は、古墳時代の一括資料と考えられる（第80図）。Ⅴ層は本来、奈良時代の包含層とされているが、この小区・層位からは、古墳時代の土師器が大量に出土している（文献８）。調査時点での層序の誤認か、大溝肩部の崩落による混入のためと判断されている。土師器は高坏と坏（塊）がほとんどで、土製品とともに一括性は高いものと思われる。したがって、これらの土師器実物を含めて、大溝周辺で何らかの祭祀が行われたものと考えたい。

ホ５区の資料は、土師器を含めて掲示した（第81、82図）。確証は得られないが、奈良時代の一括資料とも考えられる。また、Ａ１５区Ⅴ層出土資料（第85、86、87図）の多くが形態や調整の共通する塊で、やはり奈良時代の一括資料と考えておきたい。個体の過半数は塊を模した形である。そのほか甕や高坏を模したと考えられる個体も存在する。古墳時代に比べ、さらに作りは簡略化されているが、祭祀にあたり大量の土製品が使用されたのだろう。この報告書では、土製品のみを抽出することになったが、既報告書の土師器・須恵器や木製品等を含めて、祭祀の内容を復元する課題は残したままである。とくに、奈良～平安時代については、既報告のとおり大溝内から祭祀にかかわる木簡（文献１）や、おびただしい量の木製人形・馬形・舟形などが出土している（文献３）ことにも留意しなければならない。

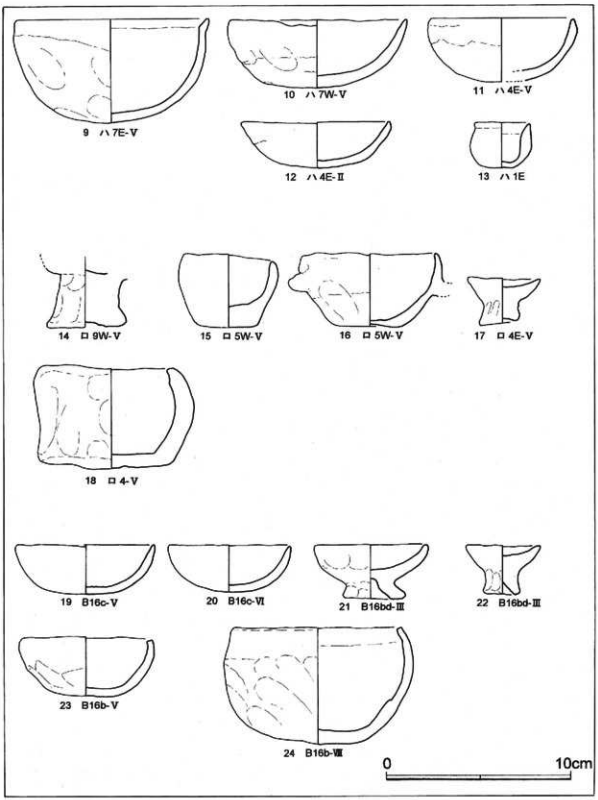
第87図199、第88図213などは、土師質のいわゆる土馬の破片である。粘土による馬の本体胴部に粘土紐を貼付することで鞍を表現している。いずれも大溝内の出土品である。同図205のように尾部の破片も若干あるが、脚部や頭部の破片は整理作業で抽出されなかった。この種の土馬は、明確な頭部を作り出していない可能性もある。市内では、阿弥陀堂遺跡（文献52）や西畑屋遺跡に類例があり、奈良時代のものと考えられる。須恵質の陶馬は後述する。なお、伊場遺跡では土製品の人形は発見されていない。

第81図55、56は、三河湾周辺に分布する製塩土器の基部破片と思われる。貝塚内遺物の整理作業中に抽出された。いずれもＳＥ内に廃棄されていた。ＳＥは、上下２層の貝塚が重複している可能性があり、年代観は安定していない。それでも、奈良時代以降のものと思われる。貝層内からの破片での出土であり、また当遠江地域でこれまでに古代における製塩関連の遺跡が確認されていない実態を見ても、伊場遺跡周辺での製塩を示すものではなく、製品としての塩が容器ごと流通していたと考えるべきだろう。製塩の流通だけでなく、伊場遺跡の性格を類推する上でも注目すべき出土品といえよう。

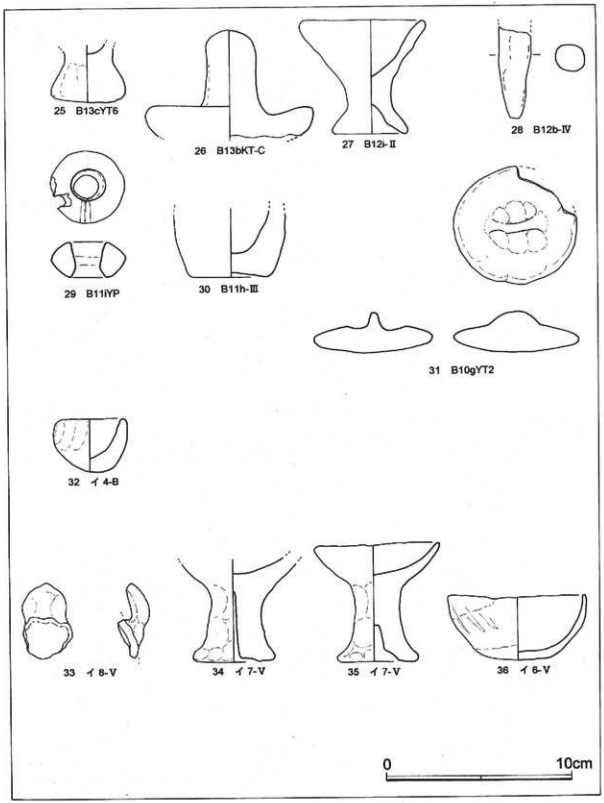
第80図40は土錘である。この種の土錘の出土数も伊場遺跡ではごく少ない。



第77図　伊場遺跡出土小形土製品実測図1

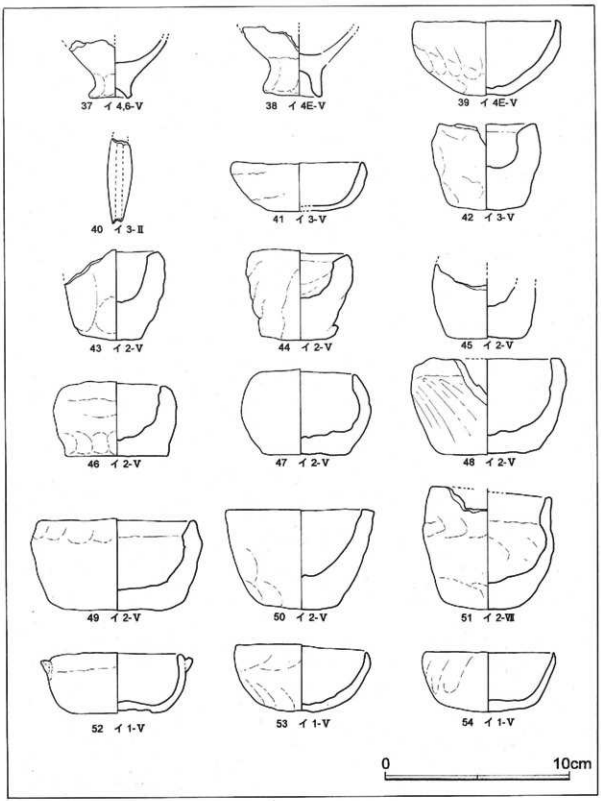


第78図　伊場遺跡出土小形土製品実測図2



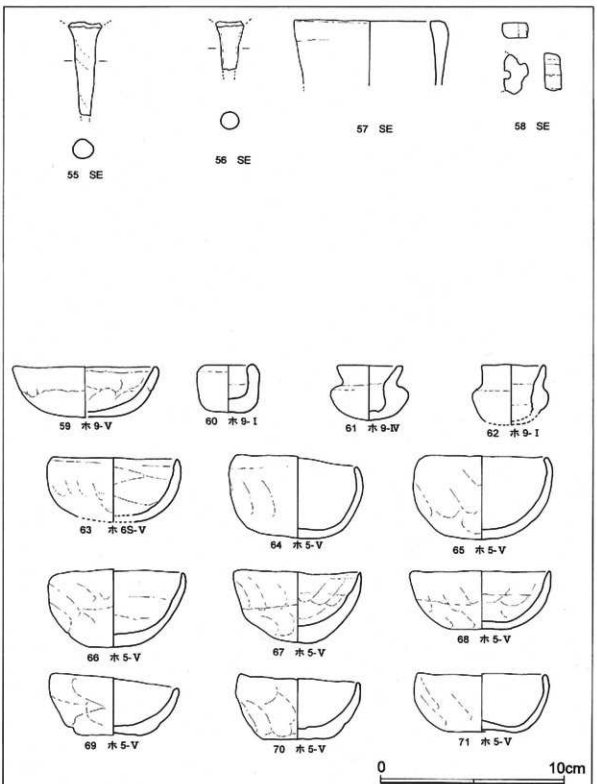
第79図　伊場遺跡出土小形土製品実測図３

31はＹＴ２からの出土品であるが、古墳時代の鏡模造品に似る。



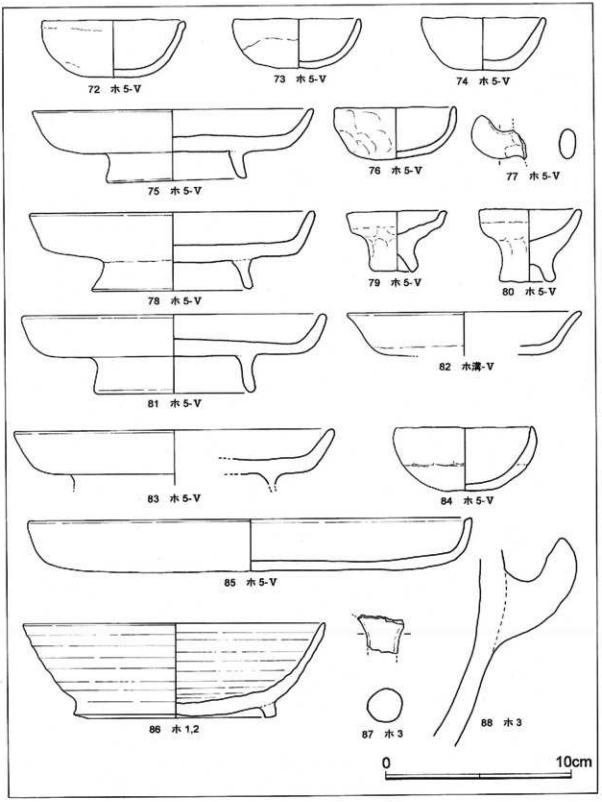
第80図　伊場遺跡出土小形土製品実測図４

イ２区の資料は整形方法から古墳時代の土製品と思われる。



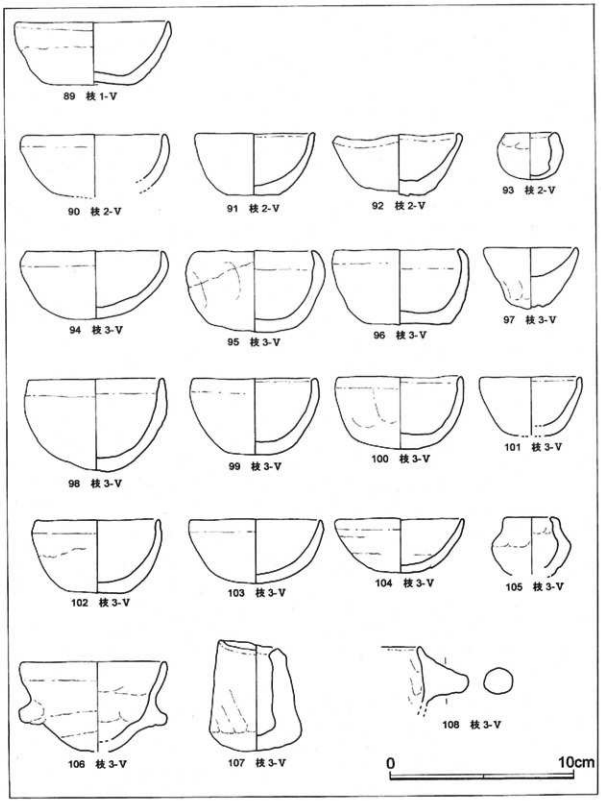
第81図　伊場遺跡出土小形土製品実測図5

55、56は尖底となる製塩土器の破片である。遠江からの出土はきわめてめずらしい。



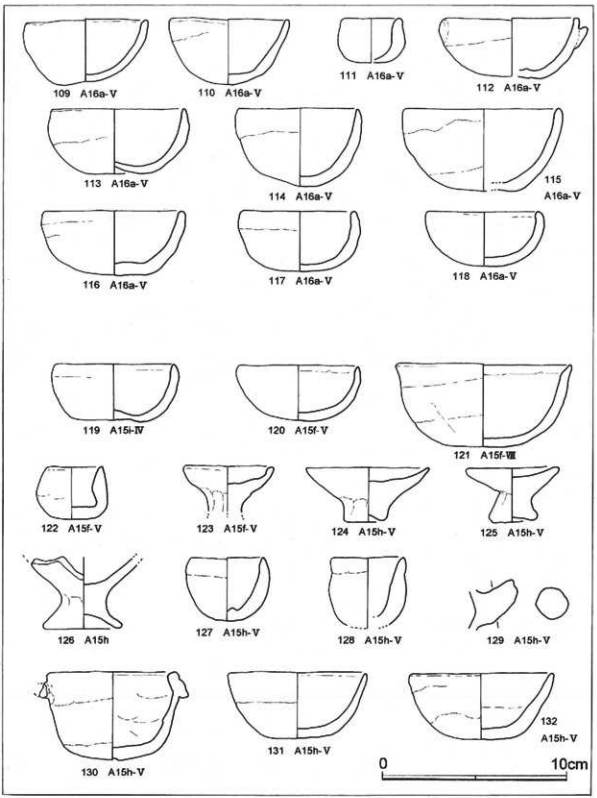
第82図　伊場遺跡出土小形土製品実測図6

土師器・須恵器は土製品と供伴する可能性があるので掲載した。確証はない。



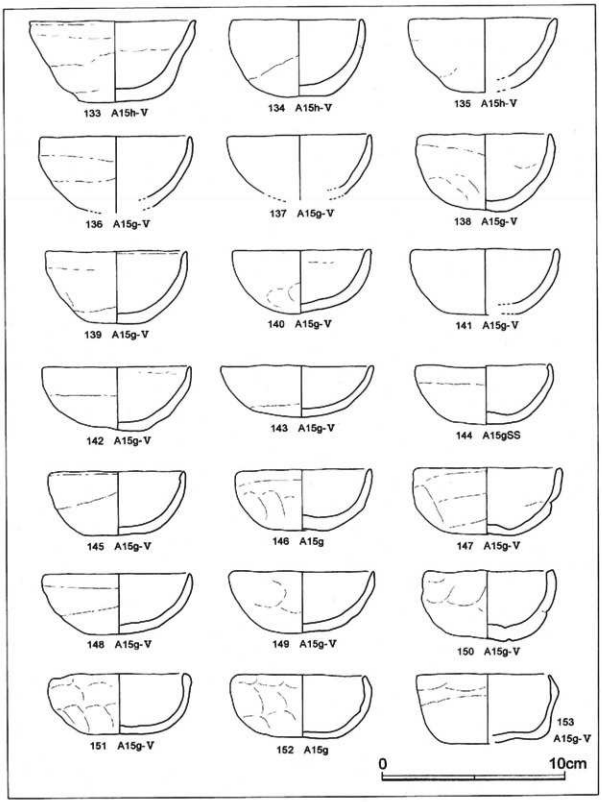
第83図　伊場遺跡出土小形土製品実測図7

枝溝は人工掻削の可能性がある直線溝で、若干の土製品が出土している。



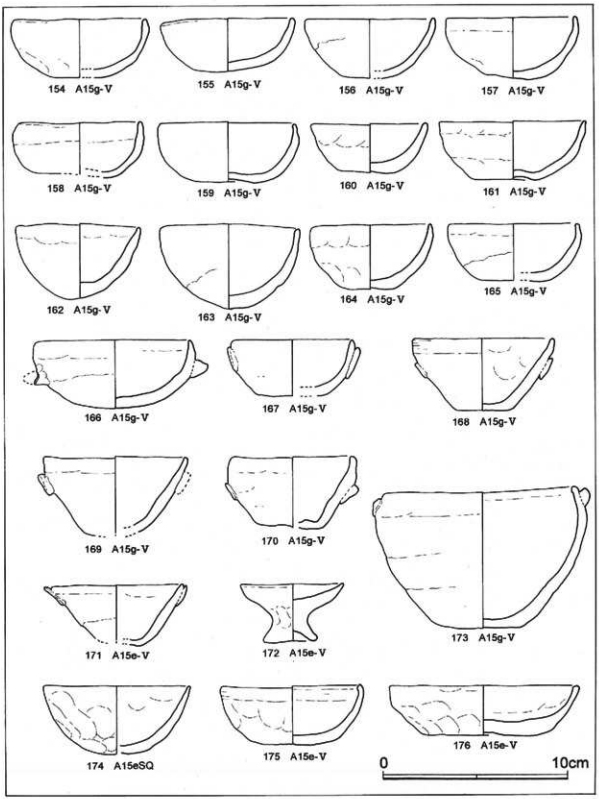
第84図　伊場遺跡出土小形土製品実測図８

Ａ１６区Ｖ層出土土器は、次ページの資料と一括資料の可能性がある。



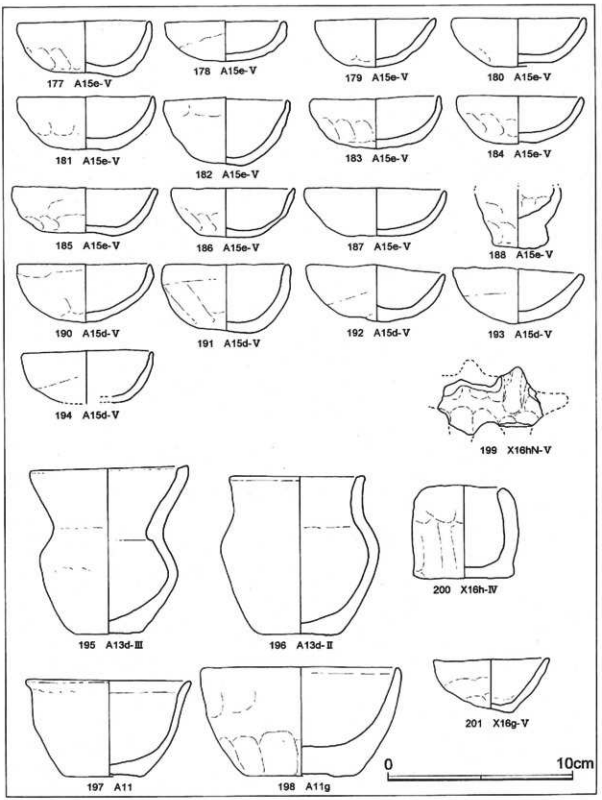
第85図　伊場遺跡出土小形土製品実測図９

本図と次ページ図の資料は、出土位置・層位が近く、一括廃棄品を含むものと思われる。



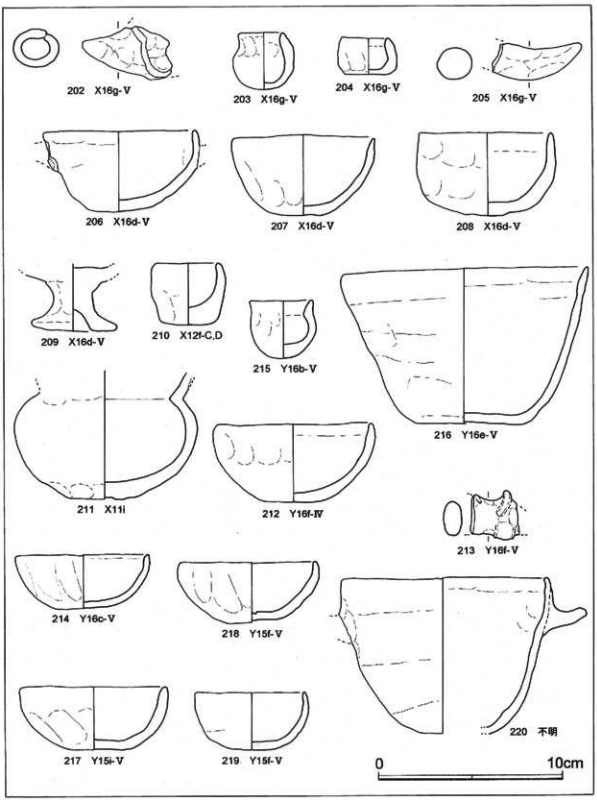
第86図　伊場遺跡出土小形土製品実測図１０

169～171の土器は底部に孔があく可能性が高いが、破片のため不明である。



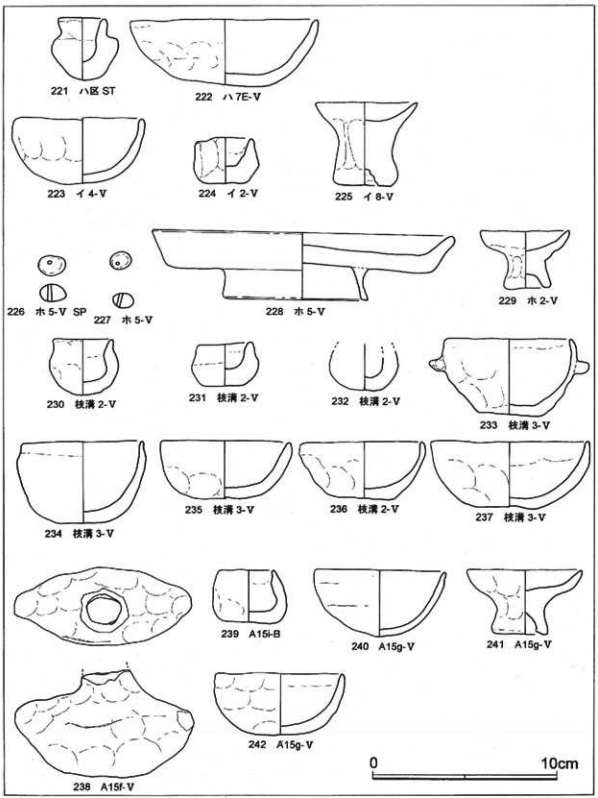
第87図　伊場遺跡出土小形土製品実測図１１

177～194は、前ページの土器とともに、一括廃棄の可能性が高い。



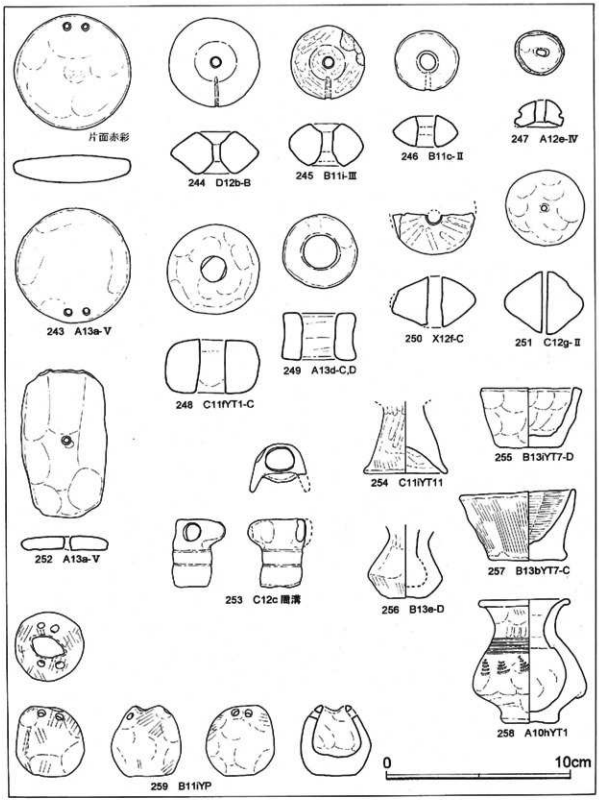
第88図　伊場遺跡出土小形土製品実測図１２

202は皮袋形土製品の破片。205は土馬の尾部であろう。220は底部のない甑と考えられる。



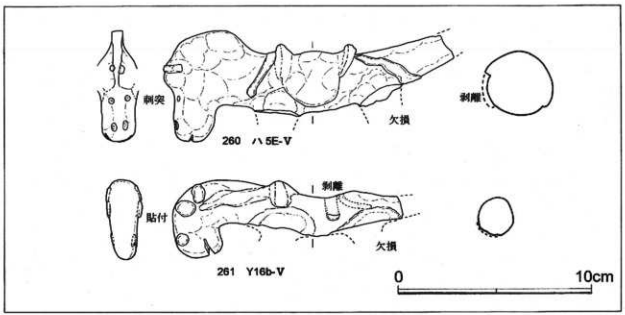
第89図　伊場遺跡出土小形土製品実測図１３

228の土師器は、226、227の土玉と近接地から出土している。



第90図　伊場遺跡出土小形土製品実測図１４

253は中空の土製品で、用途は不明。259は土笛として広く紹介されているが、疑問。



第９１図　伊場遺跡出土陶馬実測図

３．陶馬

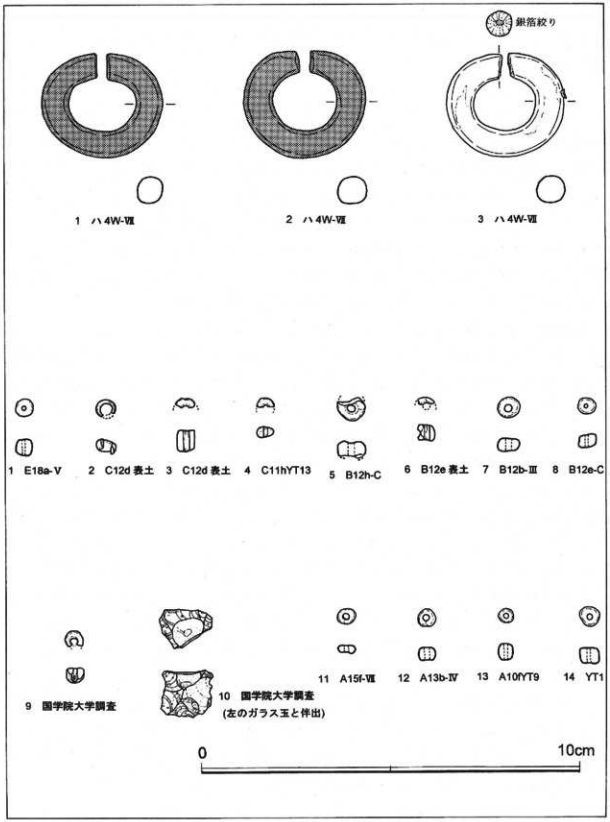
伊場遺跡では、既報告のとおり木製の馬形が多数出土している（文献３）。これに対し土製の馬形は少ない。前述した土師質の土馬の破片のほか、須恵質の陶馬がある。図示した２点のほか、若干の尾部の破片が出土した。上図260の陶馬は、大溝内貝塚ＳＵの周辺から出土した（写真図版３１下）。尾部と４脚を欠く。たてがみを指などによって作り出し、鞍などの馬具は別の粘土片を貼付して表現している。目と鼻の穴は刺突による。奈良時代湖西窯の製品と考えられる。

261の陶馬は、目のほか鼻の穴と思われる部分も貼付文によって表現している。発掘区大溝の南部という出土位置からは、奈良時代後半の可能性を指摘できる。

４．銅製耳環とガラス小玉

銅製の耳環が、大溝内下層から近接した位置で３点発見されている。古墳時代の所産であることはまちがいない。ただ、右図１と２は銅の素環であり、発掘当時、粘土から取り出されたおりに銅本来の色を保っていたという。銅を直接肌に付けることは考えにくく、出土時の状況から判断しても未使用品といえよう。３は、銅環に銀箔を巻き付け金メッキがほどこされている。これらは、伊場遺跡内における耳環製作の可能性を示している。

ガラス小玉は、弥生時代の遺構が集中する区域を中心に散発的に発見されている。まとまって出土した場所はない。しかし、近年の城山遺跡の調査ではガラス小玉の集中域が検出されており（文献18）伊場遺跡群の出土数は市内で卓越する。いずれも薄い青色（ライトブルー）に発色する。右図10は、緑色に発色するガラス塊である。出土層位から、弥生時代の可能性も指摘されているが、確証は得られていない。



第92図　伊場遺跡出土銅製耳飾・ガラス小玉実測図

銅製耳環のうち1と2は、銅芯そのままで、金銀の表面処理の痕は見られない。

5．古墳時代祭祀遺構

大溝西側の発掘区で、古墳時代の祭祀跡が２カ所確認されている。既報告書でＫＩ－１、ＫＩ－２とした遺構がそれである（文献２，６）。

ＫＩ－１は、ト５～８区で検出された遺構で、掘立柱と柱痕が東西６m、南北５mほどの方形に並んで検出された（第94図）。柱穴と考えられる直径50cm程度に掘られた穴の中に炭化物の多い黒色の部分が観察できるものがあったので、これを木製柱の痕跡と判断して図示している。この方形の施設の中に、土師器や須恵器それに小形の土製品が集中して発見された。土製品が検出された高さと比較すると、柱穴の掘られた深さは検出されたとおりの15～20cm程度でさほど深くない。柱痕の太さもまちまちで上屋のある建物とは考えにくいことから、柵囲いの施設だと推定されている。方形柵列の南東・南西の隅には、それぞれ１本の柱が南に張り出し、また南辺中央の柱間が広く開いており、南に入口のある施設が想定される。施設内部にも他の柱穴よりやや細い２本の柱穴があり、土製品はその周辺に集中していた。何らかの祭壇あるいは斎場が祭かれていたのかもしれない。木製品なども同時に使用されていた可能性は高いが、残存していない。

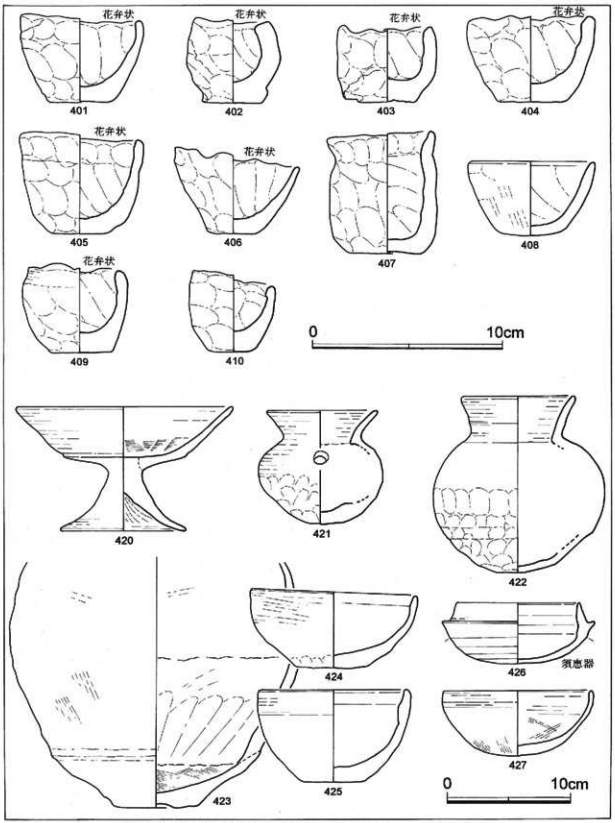
出土している小形土製品とともに、おもな土器を右図に再掲した。土製品は、指なでの痕を著しく残す個体が多く、口縁が波状（花弁状）に整形されるなど、他の地区の出土品とやや形態が異なる。土器は、須恵器坏身１点を除いてすべて土師器である。土師器高坏の個体数が多いことに特色がある。

当時、古墳時代（５世紀後半か）の、柵列で囲った空間での祭祀の状況を示すものとして注目を集めた。近接して同時期の方形周溝墓が位置するが関連性は不明である。

ＫＩ－２は、ＫＩ－１の北西方向、リ５区で小形土製品や土器、滑石製模造品が集中して出土した場所である。土製品や上器の組み合わせは、ＫＩ－１と共通し、年代にもほとんど差がないと考えられている（文献６）。ただし、周囲に遺構を検出することができなかった。ＫＩ－１と同様の簡便な施設であったとすれば、失われていたか、検出できなかった可能性も残されている。

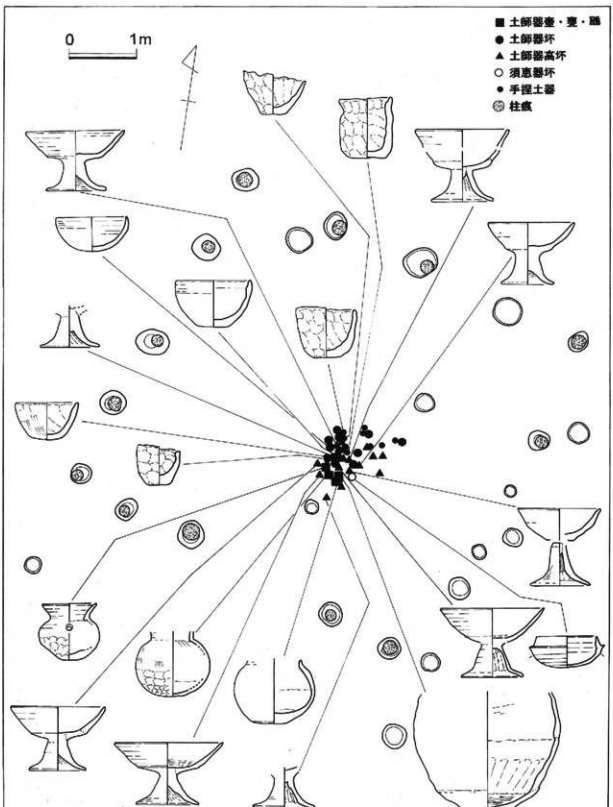
ＫＩ－２では、ＫＩ－１では出土していない滑石製の勾玉１点と臼玉39点が出土しており、大きな差がある。臼玉の個数は既報告書では「35点」とするが、整理作業の成果として、ここで修正しておく。両者は土器の年代観で見る限り、差がないようである。時代的な前後関係にあるのか並存していたのかも含め不明である。

しかしながら、古墳時代中期（５世紀後半）集落において、祭祀の空間が設定されていたことを示す貴重な例といえる。大溝に面した地区での祭祀遺構であり、水辺の祭祀として注目して良いと思われる。ＫＩ－１とＫＩ－２における滑石製品の有無が、同時並存における差異なのか、若干の時期差による差異と考えるのか、性格の異なる結論を導き出すことになり得よう。



第93図　伊場遺跡出土小形土製品実測図１５　　祭祀遺構内

ＫＩ－１出土の小形土製品と、おもな土師器・須恵器（文献６参照）を掲載した。



第94図　伊場遺跡　祭祀遺構ＫⅠ－１内　主要土器出土状態図

南に入り口のある構囲いの中央に土器が集中している。土器の縮尺は土製品の２分の１。

III　大溝内貝層

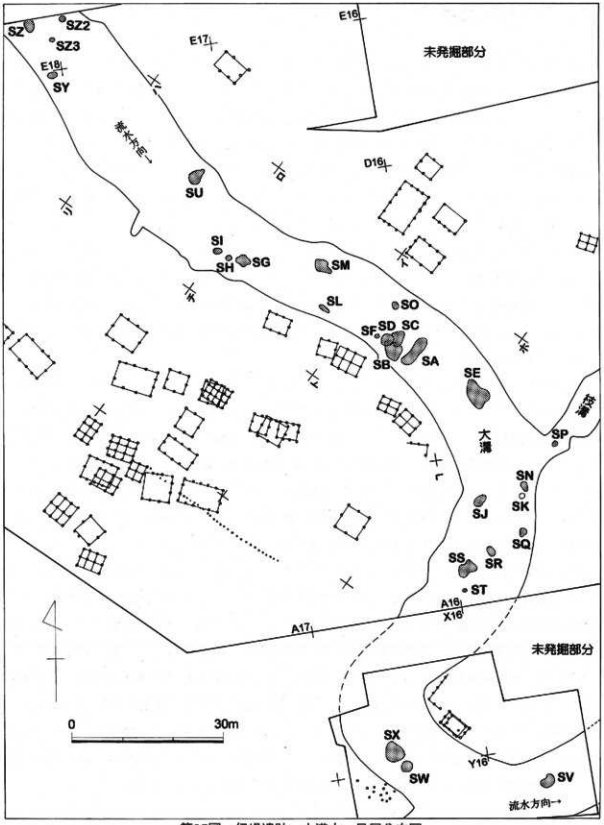
伊場遺跡の発掘区中央を大きく蛇行して流れる大溝は、現段階では自然河川と考えられている。この大溝の両岸から約30カ所の小貝塚が検出され、当時の人々の営みと河川の利用方法の一端を知らせてくれている。小貝塚が点々と形成されている状況は発掘区周辺に限られたことではなく、近年調査された大溝の延長部、梶子遺跡の第９次調査地区でも確認された（文献26）。したがって、少なくとも大溝両岸では、約200～300m間にわたり、多数の小貝塚が形成されているものと予想される。貝塚には、規模に違いはあるものの、各貝塚ごとに非常に集中したまとまりを示しており（第95図）、ひとつの貝塚が形成された時期がいずれも短期間であったことが推定される。

これらの貝塚は、大溝の層位と、貝の中に混在して出土した木簡や土器等から、おおよそ奈良時代初頭から平安時代中期ころまでに、順次形成されたものと判断されている。また、大溝の斜面に建設されている遺構（階段状施設や桟橋状の施設）の周囲に形成されているものが多く、廃棄の方法を予想させる。当然ながら自然堆積ではなく、大溝周辺での人々の生業の結果、不要の土器片などとともに廃棄されたものである。

貝塚の年代や規模については、既報告に示されている（文献２）。Ⅳ層内の貝塚ＳＮ、ＳＯ、ＳＵ等が平安時代、Ⅴ層内の貝塚のうち上層のものＳＸ、ＳＩ、ＳＱなどが奈良時代後半、同下層のＳＡ、ＳＭ等は奈良時代前半と想定されている。またＳＥは上層と下層の年代が異なるものとして分層発掘された。これらの貝塚の資料は、前回報告した奈良～平安時代の膨大な土器群の編年の根拠となりうるものとして、若干の分析を行っているが（文献８）、必ずしも良い成果を得られず、概報当時の見解を補完できなかった。今回の報告でも出土品の一部を示してみた（第96図）が、同一貝塚ながら年代の異なる資料が採取されているものが多く、確実な年代を推定できなかった。

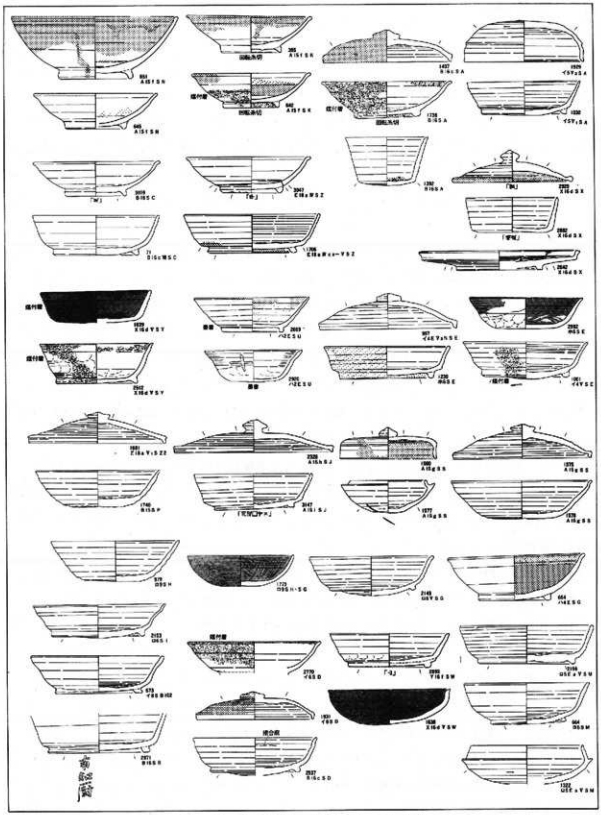
量的に目立つ貝は、シジミとダンベイキサゴ（ナガラミ）であり、貝殻の大半を占めている。このほかの種別については、パリノサーヴェイの成果を参照していただきたい。なお、貝塚周辺では、桃の種などの種子、その他の自然遺物が良好に残存していることが多い。貝塚の総量については、現在では計測するすべがないが、保管されているコンテナ分だけで３㎥（3000リットル）を越えている。

これらは、伊場遺跡周辺での食用に供されたものであろう。各貝塚の形成期間が短いことを極論するなら、一度期の供食に使用された残滓が一つの貝塚を形成していると推測することも許されよう。伊場遺跡周辺での供食にはかなりの人数が集合していたことが予想され、「布知尉」墨書のもつ意味を再認識させるものとなろう。貝塚群の形成されていく時期は、まさに奈良時代初頭から平安時代中期であり、当遺跡周辺がもっとも地方官衙的な色彩を示す時期にあたるのである。



第95図　伊場遺跡　大溝内　貝層分布図

蛇行して流れる大溝内に、小規模な貝塚（貝層）が点在している。廃棄の単位を示すか。



第96図　伊場遺跡　大溝内貝層の年代観

おもな貝層の出土品を抽出した。SA、SG、SEなど、出土品には混入品が見られる。

Ⅳ　まとめ

伊場遺跡の第２～13次発掘調査で出土した石器、小形土製品、その他若干の遺物について、年代を問わずご紹介してきた。また、貝塚については、その存在自体にも意味づけをしようと試みた。これにより既報告書遺物編１～６と合わせて、金属製品や骨角器を除いた伊場遺跡の出土遺物の大概を報告することができたものと考えている。膨大な量の遺物コンテナに紛れ、整理途上で所在が確認できなかった資料があることを正直に記載しておこうと思う。今後、なお数冊の正式報告書が刊行される予定であるので、その整理作業段階で確認された資料は「補遺」として掲載していくことでご容赦いただきたい。

出土石器・土製品は、他の遺構遺物と同様、伊場遺跡発掘区のうち東半には弥生時代後期と古墳時代中後期、西半には古墳時代中後期～奈良平安時代の遺物が集中する傾向は認められる。けれども確実な時代区分はできなかった。大溝内や遺構内の層位区分に、統一されたよりどころをもてないのも一因である。ただし、この点については、当時の発掘担当者にはそれぞれの判断があったと考えられるので、各区におけるその内容は尊重しておきたいと思う。各小区と層位ごとに分離した遺物は、近接する小区の同一名称の層位との相互関係には疑問を生じているが、小区内での斉一性は出土品から見て保たれているものと判断した。とくに表記上の操作をすることなく、遺物取り上げ時点（発掘当時）のままの表現で掲載しているので、資料を有効にご検討いただくよう期待したい。

石器では、縄文時代の資料が散見される。石材として黒曜石が使用されるものがあり、中期にさかのぼる可能性がある。弥生時代を特徴づける太形蛤刃石斧も出土している。石材として遠江に露頭が予想される緑色の岩石のほか、遠方から搬入されたと考えられる塩基性岩があり今後の検討を要する。石包丁は確認されていない。

白色の自然礫を利用した砥石は、古墳時代以降さかんに使われたらしい。この石の露頭が遠江ではなく奥三河に想定されるのも注目される。砥石の素材として、円礫が広く流通していた可能性がある。軽石を利用した砥石も出土しているが、こちらは海岸部に打ち上げられたものを採集していたのかもしれない。

石製・土製の紡錘は、弥生時代のものは材質を問わず形態が共通している。古墳時代の紡錘では、石製のものには滑石が利用され線刻も見られる。製作する糸の用途に差異があるとも考えられる。弥生時代と推定した重量のある土製紡錘は、類例が少なく、用途を含めなお検討しなければならない。

小形の土器の多くは祭祀に用いられたものと考えている。しかし、いずれも単体で存在したわけではなく、既報告の遺構や遺物群と有機的に関連していたはずである。小区や層位の記載をたよりに一括性を推定し、祭祀の内容を復元していく必要がある。時代が下るにしたがい、より多量の遺物が製作・使用されたという傾向はうかがえる。

参考文献

1 浜松市教育委員会　1976．3　『伊場木簡』
2 浜松市教育委員会　1977．2　『伊場遺跡遺構編』
3 浜松市教育委員会　1978．3　『伊場遺跡遺物編１』
4 浜松市教育委員会　1980．3　『伊場遺跡遺物編２』
5 浜松市教育委員会　1982．12　『伊場遺跡遺物編３』
6 浜松市教育委員会　1987．3　『伊場遺跡遺物編４』
7 浜松市教育委員会　1990．3　『伊場遺跡遺物編５』
8 浜松市教育委員会　1994．12　『伊場遺跡遺物編６』
9 國學院大學　1953．9　『伊場遺跡　西遠地方に於ける低地性遺跡の研究』
10浜松市教育委員会・遠江考古学研究会　1968．11　『伊場遺跡予備調査の概要』
11浜松市教育委員会　1971．2　『伊場遺跡第３次発掘調査概報』
12浜松市遺跡調査会　1972．3　『伊場　第４次発掘調査月報合本』
13浜松市遺跡調査会　1973．2　『伊場遺跡第５次発掘調査概報』
14浜松市遺跡調査会　1975．3　『伊場遺跡第６・７次発掘調査概報』
15浜松市教育委員会　1978．3　『国鉄東海道線線路敷内埋蔵文化財発掘調査報告書』
16浜松市遺跡調査会　1981．3　『伊場遺跡第８～13次発掘調査概報』
17可美村教育委員会　1981．3　『城山遺跡』
18(財)浜松市文化協会　1993．12　『城山遺跡Ⅴ』
19浜松市遺跡調査会　1977．6　『国鉄浜松工場内遺跡発掘調査略報Ⅱ』
20浜松市教育委員会　1978．3　『国鉄浜松工場内遺跡発掘調査概報Ⅲ』
21浜松市教育委員会　1979．9　『国鉄浜松工場内遺跡発掘調査概報Ⅳ』
22浜松市遺跡調査会　1980．1　『国鉄浜松工場内遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
23浜松市遺跡調査会　1983．5　『国鉄浜松工場内（梶子）遺跡第Ⅵ次発掘調査概報』
24浜松市遺跡調査会　1983．12　『国鉄浜松工場内遺跡第Ⅶ次発掘調査概報』
25(財)浜松市文化協会　1991．12　『梶子遺跡Ⅷ』
26(財)浜松市文化協会　1994．3　『梶子遺跡Ⅸ』
27浜松市役所　1968．3　『浜松市史　一』

31(財)愛知県埋蔵文化財センター　1993．3　『朝日遺跡Ⅳ』
32浅羽町教育委員会　1993．3　『古新田Ⅱ　遺物編』
33湯美町郷土資料館　1993．10　『古代の塩づくり』
34安城市教育委員会　1996．9　『御用地遺跡』

35安城市歴史博物館　1995．7　『古代集落遺跡を掘る』
36茨城県立歴史館　1995．11　『音の考古学』
37磐田市教育委員会　1996．3　『大宝院廃寺遺跡　第７次発掘調査報告書』
38磐田市史編さん委員会　1993．3　『磐田市史　通史編上巻　考古・古代・中世』
39国立歴史民俗博物館　1985．3　「共同研究　古代の祭祀と信仰」
『国立歴史民俗博物館研究報告』第７集
40御殿・二之宮遺跡調査会　1995．3　『御殿・二之宮遺跡　第６次発掘調査報告書』
41静　岡　県　1989．3　『静岡県史　資料編４　古代』
42静　岡　県　1992．3　『静岡県史　資料編３　考古三』
43静　岡　県　1994．3　『静岡県史　通史編１　原始・古代』
44静　岡　県　1994．3　「文化財保護行政と県指定史跡伊場遺跡の保存運動」
『静岡県史　資料編21　近現代６』
43静岡県教育委員会　1989．3　『静岡県の窯業遺跡　本文編』
44(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　1989．3　『大谷川Ⅳ』
45(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　1990．8　『いのりとまつり』
45(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　1992．3　『坂尻遺跡　本文編』
46(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　1992．3　『川合遺跡　遺物編２』
47(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　1994．3　『角江遺跡』
48(財)千葉県文化財センター　1992．3　「生産遺跡の研究２　玉」『研究紀要』１３
49奈良国立文化財研究所　1991．3　『平城宮発掘調査報告ＸⅢ』
49浜松市遺跡調査会　1982．3　『越前遺跡発掘調査報告書』
50浜松市遺跡調査会　1983．3　『西鴨江　中平遺跡』
51浜松市遺跡調査会　1984．3　『半田山古墳群Ａ小支群・半田山Ⅲ遺跡』
52浜松市遺跡調査会　1985．　『下滝遺跡』
53(財)浜松市文化協会　1992．3　『佐鳴湖西岸遺跡群　本文編』
54(財)浜松市文化協会　1994．3　『社口遺跡』
55(財)浜松市文化協会　1994．8　『宮竹野際遺跡２』
56(財)浜松市文化協会　1995．3　『西鴨江　中平遺跡２』
57(財)浜松市文化協会　1996．3　『川の前遺跡』
58(財)浜松市文化協会　1996．3　『若林　村西遺跡』
59藤枝市教育委員会他　1981．3　『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ
ー奈良・平安時代編ー志太郡衙跡』
60細江町教育委員会　1993．3　『川久保船渡遺跡』
61細江町教育委員会　1996．3　『井通遺跡』

71内山眞龍　1789．8　『遠江國風土記傳』(1979．1復刻)歴史図書社
72金子裕之　1996．5　「まじないの世界Ⅰ」『日本の美術』３６０　至文堂
73鬼頭清明　1985．1　『古代日本を発掘する６　古代の村』岩波書店
74佐々木虔一　1973．10　「伊場遺跡と古代交通路」『日本史研究』136
75佐藤達雄　1994．3　「古墳時代集落における祭祀の変遷」
『地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念論集刊行会
76椎名慎太郎　1994．1　『遺跡保存を考える』岩波書店
77芝田文雄　1972．3　「敷智郡竹田郷考ノート」上下
『伊場　第４次発掘調査月報合本』所収
78鈴木敏則　1995．11　「古代敷智郡衙発見」『静岡の原像をさぐる』静岡県教委他
79竹内理三編　1981．9　『伊場木簡の研究』東京堂出版
80巽淳一郎　1996．6　「まじないの世界Ⅱ」『日本の美術』３６１　至文堂
81坪井俊三他　1983．12　『浜松の歴史』東洋書院
82平川　南　1991．11　「墨書土器とその字形ー古代村落における文字の実相」
『国立歴史民俗博物館　研究報告』第35集
83馬渕和夫　1973．6　『和名類聚抄　古写本声点本　本文および索引』風間書房
84水野正好　1977．5　「伊場放生木簡の顕現」『三浦古文化研究』21
85宮本達希　1994．3　「静岡県における奈良・平安時代の祭祀」
『地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念論集刊行会
86向坂鋼二　1964．7　「浜松市都田町中津・坂上出土の祭祀遺物」
『考古学雑誌』50ー1
86向坂鋼二　1971．3　「静岡県伊場遺跡の奈良時代遺物」『考古学雑誌』56ー3
87向坂鋼二　1976．12　「伊場遺跡における律令制時代遺構の性格をめぐって」
『遠江』創刊号
88向坂鋼二　1979．3　「伊場遺跡出土の灰釉陶器」
『須恵器ー古代陶質土器の編年』静岡県考古学会
89山中敏史　1976．1　「古代郡衙遺跡の再検討」『日本史研究』161
90山中敏史他　1985．6　『古代日本を発掘する５　古代の役所』岩波書店
91山中敏史　1995．9　「国府・郡衙跡調査研究の成果と課題」
『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所　同朋舎出版

付載　浜松市伊場遺跡の自然科学的分析

伊場遺跡の貝塚の動・植物遺体

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

伊場遺跡が位置する静岡県浜松市は、天竜川により形成された沖積低地、三方原台地があり、三方原台地の西側に浜名湖が存在する。また、沿岸部の低地では砂丘が発達しており、この砂丘列の間の低地に溜池が存在し、さらに砂丘列の最北端のものの中には台地の開析谷の出口をふさいでいるものがある（磯見・井上, 1972）。本遺跡では、海浜砂丘上ないし砂堤列間湿地の堆積物を基盤とし、弥生時代の環濠、古墳時代の竪穴住居跡、砂堤列間の窪地を蛇行する大溝など、弥生時代以降の遺構・遺物が確認されている。この大溝は、7世紀後半～13世紀代に安定した状態であり、奈良・平安時代頃に食物残渣を破棄する貝塚が構築されている。

今回、奈良・平安時代の周辺植生を検討するために花粉分析を実施した。また、大溝内に形成された貝塚層から検出された種実遺体および骨・貝類の同定を行い、当時の食料事情に関する情報を得ることにした。なお、骨・貝類の同定は、早稲田大学金子浩昌先生にお願いし、著名原稿として頂いた。

1．試料

花粉分析は、試料201（不明貝層下部）と試料202（ＳＥ下）の2点実施した。種実同定は、送付された試料28点（試料番号1～28）全てについて同定を行った。骨・貝類同定は、試料番号101（Ｂ16－ＳＡ）、試料番号102（Ａ15－ＳＣ）、試料番号103（ホ6－ＳＥ）、試料番号104（Ａ15ｇ－ＳＳ）の4試料中に含まれる動物遺体について実施した。

2．分析方法

（1）花粉分析

花粉・胞子化石は、湿重約10ｇの試料について水酸化カリウム処理、篩別（250μｍ）、重液分離（臭化亜鉛，比重2.3）、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理（無水酢酸：濃硫酸＝9：1）の順に物理・化学的な処理を施して分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら、出現する全ての種類について同定・計数を行う。

結果は同定・計数結果の一覧表および主要花粉化石群集の変遷図として表示する。図中の出現率は、木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子が総花粉・胞子数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基数とした百分率で算出する。なお、図表中で複数の種類をハイフォン（－）で結んだものは、種別間の区別が困難なものである。

（2）種実遺体同定

双眼実体顕微鏡下で、その形態的特徴から種類を同定する。

（3）骨・貝類同定

土壌試料を0.5mmの水洗・篩別し、その残渣に認められた骨・貝類を種類毎に同定・分類する。

3．植物遺体からみた植物利用と植生

3－1．分析結果

（1）花粉化石の産状

結果を表1・図1に示す。2試料とも花粉化石が良好に検出される。花粉化石群集は2試料とも類似しており、コナラ属アカガシ亜属が多産し、マツ属・スギ属・クマシデ属－アサダ属・コナラ属コナラ亜属・クリ属－シイ

ノキ属（大半はシイノキ属）・アカメガシワ属などが検出される。草本花粉ではイネ科が多産し、オモダカ属・カヤツリグサ科・ミズアオイ属・ヨモギ属・ミズワラビ属などが検出される。

（2）種実遺体

結果を表2に示す。28試料の中で、試料番号21・22は魚骨片である。以下に検出された種類と、その形態の特徴について記す。

・マツ属（*Pinus densiflora* Sieb. etZucc.）　マツ属マツ科

球果の破片が検出された。大きさは3cm程度。上部の鱗片は脱落し、球果軸の一部が残存する。柄はほとんどない。種鱗は長楕円状の矩形を呈し、先端部は肥厚する。

・オニグルミ（*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim) Kitamura）　クルミ科クルミ属

核の破片が検出された。褐灰色で、大きさは2cm程度。木質で厚く、堅い。表面は粗いしわ状となる。内部は子葉が入るくぼみがある。

・モモ（*Prunus persica* Batsch）　バラ科サクラ属

核（内果皮）が検出された。褐色～黒褐色で大きさは2.5cm程度。核の形は楕円形でやや偏平である。基部は丸く大きな臍点がありへこんでおり、先端部はやや尖る。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は、不規則な線状のくぼみがあり、全体として粗いしわ状に見える。

・スモモ（*Prunus salicina* Lindl.）　バラ科サクラ属

核（内果皮）が検出された。黒褐色。大きさは1cm程度。核の形は楕円形で、偏平である。下端には、丸く大きな臍点がありへこんでおり、上端部は丸い。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は浅いくぼみが不規則にみられる。

・センダン（*Melia Azedarach* L. var. *subtripinnata* Miquel）　センダン科センダン属

核が検出された。褐色で堅い。側面観は楕円形で、上面観は星型。大きさは1cm程度。縦方向に数本の稜が見られる。

・ホルトノキ（*Elaeocarpus sylvestris* (Lour.) Poir. var. *ellipticus* (Thunb.) Hara）　ホルトノキ科ホルトノキ属

核が検出された。大きさは1cm程度。褐色、楕円形で先端部はやや尖る。核は堅く、表面には縦方向にしわが存在する。

・トウガン（*Benincasa hispida* Cogn.）　ウリ科トウガン属

種子が検出された。種子は褐色。長さ7mm程度。長楕円形をしており、種皮は厚くやや堅い。上端に明瞭なへそがある。縁に段差があり、薄くなっている。

・ヒョウタン類（*Lagenaria* sp.）　ウリ科ユウガオ属

種子と果皮の破片が検出された。種子は褐色で長さ1cm程度。長楕円形をしており、周辺の縁の部分が厚い。上部に大きく明瞭な「へそ」が存在する。果皮は、大きなもので2cm程度。肉厚で弾力がある。

表1　花粉分析結果

種類	試料番号	201	202
木本花粉			
マキ属		4	3
モミ属		2	2
ツガ属		4	7
マツ属維管束亜属		1	1
マツ属複維管束亜属		24	7
マツ属		34	12
コウヤマキ属		1	1
スギ属		27	11
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科		2	3
ヤナギ属		1	1
ヤマモモ属		7	1
サワグルミ属		-	3
クルミ属		1	1
クマシデ属－アサダ属		8	12
ハンノキ属		12	6
ブナ属		9	10
コナラ属コナラ亜属		30	32
コナラ属アカガシ亜属		116	105
クリ属－シイノキ属		15	7
ニレ属－ケヤキ属		3	4
エノキ属－ムクノキ属		2	1
サクラ属		1	-
キハダ属		1	2
アカメガシワ属		9	28
ウルシ属		1	-
トチノキ属		-	-
クロウメモドキ科		-	1
ブドウ属		3	9
フタバ属		1	-
ノブドウ属		1	1
ツバキ属		-	3
ウコギ科		1	1
カキ属		1	-
イボタノキ属		2	4
トネリコ属		-	1
スイカズラ属		1	1
草本花粉			
ガマ属		7	-
ミクリ属		1	-
サジオモダカ属		1	-
オモダカ属		4	3
スブタ属		-	1
イネ科		109	127
カヤツリグサ科		15	29
ミズアオイ属		6	6
ユリ属		-	-
クワ科		6	5
ギシギシ属		1	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節		5	3
アカザ科		6	3
ナデシコ科		1	1
キンポウゲ科		1	-
アブラナ科		2	-
バラ科		1	5
マメ科		-	1
キカシグサ属		1	-
ヒシ属		2	-
アリノトウグサ属		1	-
フサモ属		1	-
セリ科		5	3
ガガブタ		1	-
アサザ属		-	1
ヨモギ属		27	29
オナモミ属		2	2
他のキク亜科		2	5
タンポポ亜科		-	1
不明花粉		7	7
シダ植物胞子			
ミズワラビ属		1	1
サンショウモ		2	-
他のシダ類胞子		42	27
合　計			
木本花粉		325	281
草本花粉		211	216
不明花粉		7	7
シダ類胞子		45	28
総計（不明を除く）		581	525

3－2．考察

両試料とも暖温帯常緑広葉樹林（照葉樹林）の主要構成要素であるアカガシ亜属が多産し、マキ属・ヤマモモ属・シイノキ属・アカメガシワ属、種実遺体のセンダンやホルトノキなど、暖温帯林に特徴的な種類が検出される。したがって、当時、周辺は暖温帯性の気候下に属していたと推定される。また、針葉樹のマツ属・スギ属、落陽広葉樹のクマシデ属－アサダ属・コナラ亜属・ニレ属－ケヤキ属・エノキ属－ムクノキ属なども森林構成要素としてごく普通に認められたのであろう。この他にも、現存植生で林縁部や林床などに認められるウルシ属・ブドウ属・ツタ属・ノブドウ属・イボタノキ属・スイカズラ属なども生育していたと考えられる。このように遺跡周辺は、種類構成の豊富な暖温帯林が形成されていたと考えられる。本地域で行われている植生史研究例（堀木・吉野，1995；Matushita & Sanukida，1988；守田・中村，1977；吉野，1991）でも同様にアカガシ亜属が多産することから、今回得られた花粉化石群集も地域的な植生を反映しているものとみられる。

表2　種実同定結果

試料番号	試料名	種類名（個数）
1	不明	スモモ(2)
2	A15g-SS	スモモ(3)
3	α2	スモモ(1)
4	A15f-SN	スモモ(1)
5	^z	オニグルミ(1)
6	46-SE	トウガン(3)
7	A15f-SN	ホルトノキ(1)
8	A15f-SN	スモモ(9)
9	不明	センダン(18)
10	右	トウガン(3)
11	不明	不能
12	42	スモモ(1)
13	不明	不能
14	-3	スモモ(1)
15	-3	トウガン(1)
16	46-SE	マツ属(4)
17	右	ヒョウタン類(100)
18	不明	スモモ(100)
19	α	モモ(60)
20	Y15f-V-SV	タケ類(20)
21	Y15f-V-SV	魚骨(1)
22	Y15f-V-SV	魚骨(1)
23	Y15f SV	ヒョウタン類(1)
24	Y15f SV	ヒョウタン類(5)
25	D12c-YT9 1023	ヒョウタン類(8)
26	P20cⅡ13-106	モモ(2)
27	Y15f SV	ヒョウタン類(1)
28	47-SB128pit1sel	モモ(12)

また、種実遺体の中で渡来した種類は、モモ、スモモ、ヒョウタン類、トウガンである。これらは、弥生時代以降各地の遺跡から多数の検出例があり（粉川，1989）、広く栽培・利用されていたと推測される。木遺跡で生活していた人々もこれらの種類を食用等として利用していたと思われる。また、大溝の内部で比較的水深があるところに浮葉植物のガガブタ・アサザ属・ヒシ属や沈水植物のフサモ属が、その縁辺部の水深の浅いところにガマ属・サジオモダカ属・オモダカ属・ミズアオイ属・ミズワラビ属や浮水性シダ類のサンショウモなどが生育していたと思われる。これより、大溝の内部は比較的水の流れが穏やかな安定した状態であったと想定される。また、その砂堤列上などにはイネ科を中心として、カヤツリグサ科・クワ科・ヨモギ属などが生育していたと考えられる。

4．出土骨・貝類の鑑定　　金子浩昌

4－1．同定結果

大溝の4カ所の貝集中部より採取された試料中の動物遺体については次のような種類が同定された。個々の標本については表3に示す。

Ⅰ．軟体動物門　Phylum MOLLUSCA

腹足綱　Class GASTROPODA

前鰓亜綱　Subclass PROSOBRANCHIA

原始腹足目　Order Arcaeogastropoda

ニシキウズガイ科　Family Trochidae

ダンベイキサゴ　*Umbonium giganteum*

アマオブネ科　Family Neritidae

カノコガイ　*Clithon sowerbianus*

中腹足目　Order Mesogastopoda

タニシ科　Family Vivipariidae

オオタニシ　*Cipangopaludina japonica*

カワニナ科　Family Pleuroceridae
カワニナ　*Semisulcospila libertina*
ウミニナ科　Family Potamididae
フトヘナタリガイ　*Cerithidea rhizophororum*
ウミニナ　*Batillaria multiformis*
新腹足目　Order Neogastropoda
アクギガイ科　Family Muricidae
アカニシ　*Rapana venosa*
斧足綱　Class ＰＥＬＥＣＹＰＯＤＡ
イガイ目　Order ＭＹＴＩＬＯＩＤＡ
イガイ科　Family Mytilidae
イガイ　*Mytilus coruscum*
真弁鰓亜綱　Subclass ＥＵＬＡＭＥＬＬＩＢＲＡＮＣＨＩＡ
マルスダレガイ目　Order Veneroida
シジミ科　Family Corbiculidae
ヤマトシジミ　*Corbicula japonica*
マルスダレガイ科　Family Veneridae
アサリ　*Ruditapes philippinarum*
ハマグリ　*Meretrix lusoria*
オオノガイ目　Order Myoida
エゾオオノガイ科　Family Myidae
オオノガイ　*Myaarenaria oonogai*

4－2．食用とされた貝種

巻貝7種、二枚貝5種が認められた。この中では、二枚貝のヤマトシジミが大部分を占めており、当時の食用に当てられた主要な貝種であったと考えられる。殻長は最大30mm程度で25mm前後のものが多い。このようなヤマトシジミが卓越する傾向は時期は異なるものの、本遺跡北側に位置する縄文時代後期の蜆塚貝塚でも認められる。集落域がラグーンに面していたことがこのような貝類の採捨を促したのであろう。淡水産のオオタニシやカワニナなども食用として利用されていた可能性がある。

ヤマトシジミに次いで多い巻貝のダンベイキサゴは、沿岸流の影響を直接受ける場所に棲息する外洋の貝種であり、ハマグリ・アサリは内湾に棲息する種類である。このように本遺跡の貝塚は、ヤマトシジミの多産から湾奥貝塚の様相を呈するが、外洋の貝類も多獲しており、当時は豊かな水産活動をはたしていた様相が認められる。

本地域における貝塚の分布は当時の地形と関係が深く、蜆塚貝塚が形成された縄文時代後期から伊場遺跡が成立していた奈良・平安時代にかけての地形発達過程と、各時期の貝塚の分布との関係について検討していきたいと考える。

引用文献

堀木真美子・吉野道彦(1995)　御殿・二之宮遺跡の花粉化石．「御殿・二之宮遺跡　第6次発掘調査報告書」，p.71-73，山武考古学研究所．

磯見　博・井上正昭(1969)　浜松地域の地質．地域地質研究報告5万分の1図幅，35p.，地質調査所．

粉川昭平(1988)　穀物以外の植物食．「弥生文化の研究2　生業」，金関　恕・佐原　真編，p.112-115，雄山閣．

Mariko Matushita and Satoshi Sanukida (1988) Holocene Vegetation History around Lake Hamana on the Pacific Coast of Central Japan. The Quateernary Research, 26, p.393-399.

守田益宗・中村　純(1977)　浜名湖周辺の稲作の起源に関する花粉分析学的研究．昭和51年度特定研究「稲作の起源と伝播」年次報告，p.36-43.

吉野道彦(1991)　静岡県御殿・二之宮遺跡における花粉分析．「御殿・二之宮遺跡　市立二之宮保育園建設に伴う発掘調査報告書」，p.68-75，磐田市教育委員会．

表3　骨・貝類同定結果

種類				試料番号 101	102	103	104	合計
貝類	腹足綱	ダンベイキサゴ	完形	32	1	112	58	203
			破片	6		7	7	20
		カノコガイ	完形				1	1
		オオタニシ	完形			6		6
			幼貝			3		3
			破片			4		4
		カワニナ	完形	1	1	3	5	10
		フトヘナタリガイ	完形			1	7	8
		ウミニナ	完形	1		1		2
		アカニシ	破片			1		1
		イガイ	破片	1		1		2
	斧足綱	ヤマトシジミ	右	91	189	73	89	442
			破片	6	37	23	25	91
			左	101	287	86	107	561
		アサリ	右				2	2
			破片			3	4	7
			左			2		2
		ハマグリ	右	6		1	3	10
			破片	3		4		7
			左	3			1	4
		オオノガイ	右			2		2
			破片			6	2	8
			左				1	1
	合計（破片含む）			251	495	339	312	1397
鳥類	骨片					1		1
魚類	鱗						14	14
	淡水魚鰓蓋骨の一部						1	1

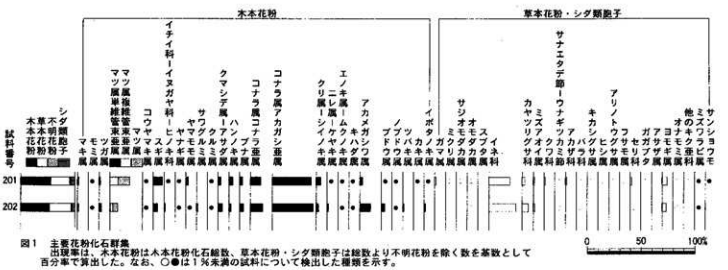


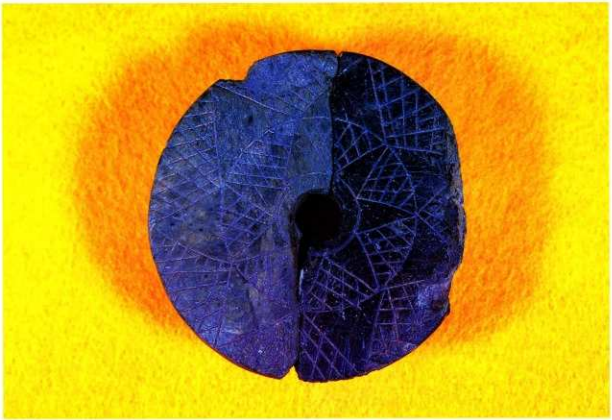
図1　主要花粉化石群集
出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、○●は1%未満の試料について検出した種類を示す。

カラー写真図版1

伊場遺跡出土短甲（背当て）

伊場遺跡出土短甲（胸当て）

カラー写真図版2



伊場遺跡出土　滑石紡錘

伊場遺跡出土　製塩土器片

写真図版　1　　YT1出土土器（第4次調査東地区）

2
3
4

7
8
9

写真図版　2　　YT1出土土器（第4次調査東地区）

10
11
13
15
17
18
22
23

写真図版　3　出土地不詳（第4次調査東地区）・YT7出土土器（第4次調査西地区）

25
32
33
34

35
30　36
37
38
40

写真図版　4　　YT7出土土器（第4次調査西地区）

41
43
44
45
46
49
50
51
52
53

写真図版　5　YT7出土土器（第4次調査西地区）

56
57
54
58
62

83　88　84
85　87　86
71
89
93

写真図版　6　　YT7出土土器（第4次調査西地区）

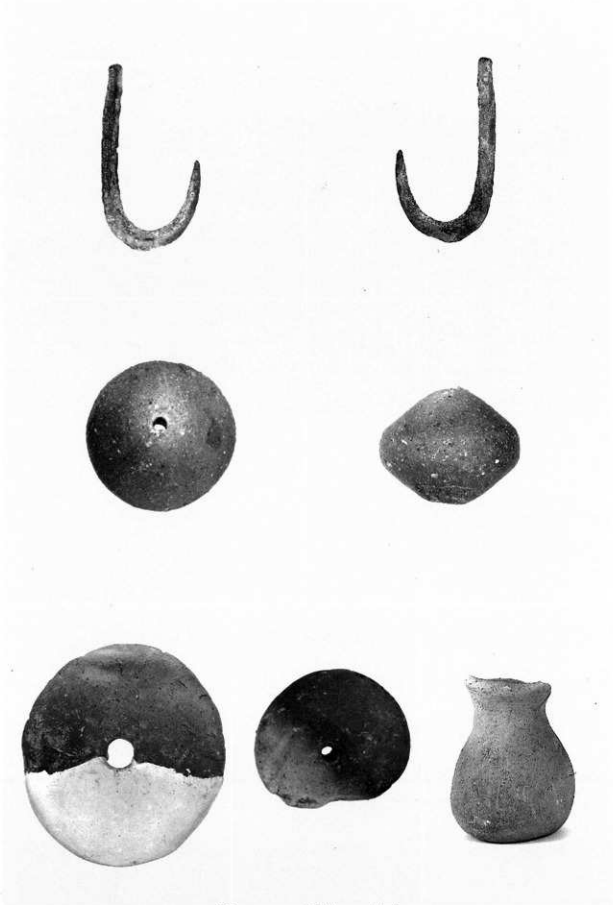
102　94
95　120
104　96
101　97
105　103

106　109
111　122
113
124
132

写真図版　7　　YT7・その他出土土器（第4次調査西地区）

116
119
127
133
134
136
137
138

写真図版　8　　釣針・土製品（第4次調査）



1　釣針　　（表面）　（裏面）
2　算盤玉壮土製品　（上から）　（横から）
3　紡錘車　　4　紡錘車　　5壺形土製品

写真図版　9　　YT7・YT6出土土器（第12次1期調査中地区）

3
14
19
22
26

27
29
30
31
50

写真図版　10　YT6出土土器（第12次1期調査中地区）

51
95　98
97　88
86　94
87　96

85
105
89
103
108

写真図版　11　YT8出土土器（第12次1期調査中地区）

110
111
112
116　120

118
119
123
124
126

写真図版　12　土堤出土土器（第12次1期調査中地区）

127
132
135
136　398

137
139
148
149

写真図版　13　土堤出土土器（第12次1期調査中地区）

154
161
163
180

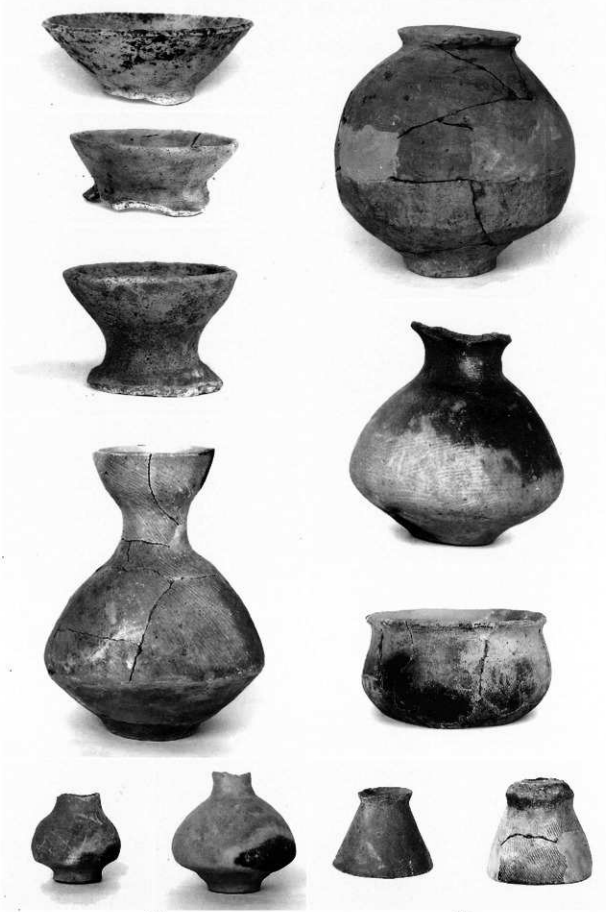
186
172
177　178
188　187

写真図版　14　環濠内側出土土器（第12次1期調査東地区）

191
192
193

195
196
200
201
205
211

写真図版　15　環濠内側出土土器（第12次1期調査東地区）



213
216
217
222
223　224

226
227
270
274　276

写真図版　16　環濠内側出土土器（第12次1期調査東地区）

279
280
281
282

293
294
295
297

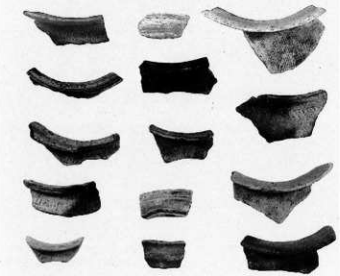
290
291
300　303
284　283

写真図版　17　窪地出土土器（第12次1期調査東地区）

305
306
307
308

309
312
323
314　322

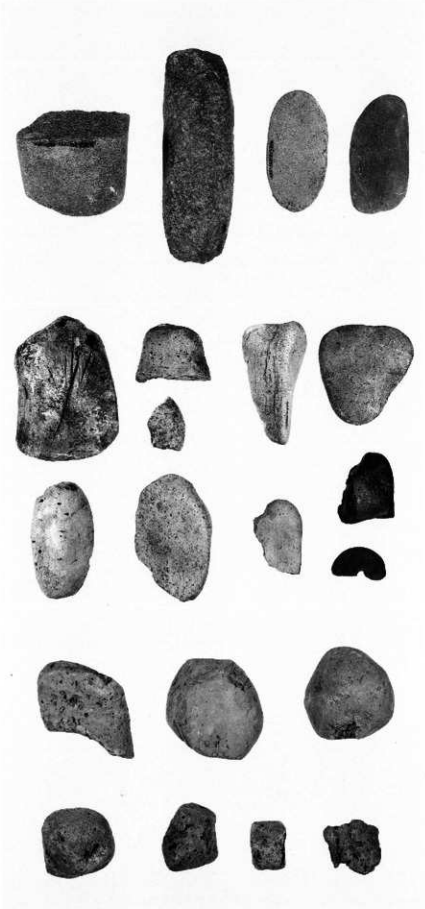
写真図版　18　その他出土土器（第12次1期調査）・環濠内側上層出土土器（第12次1期調査東地区）



324
S字状口縁台部付甕
S字状口縁台部付甕・他

326
345　380
379
391
392

写真図版　19　石製品・土製品（第12次1期調査）



2・1・4・3

10
5　6・9
11

13
7・8・12
14

15・16・17

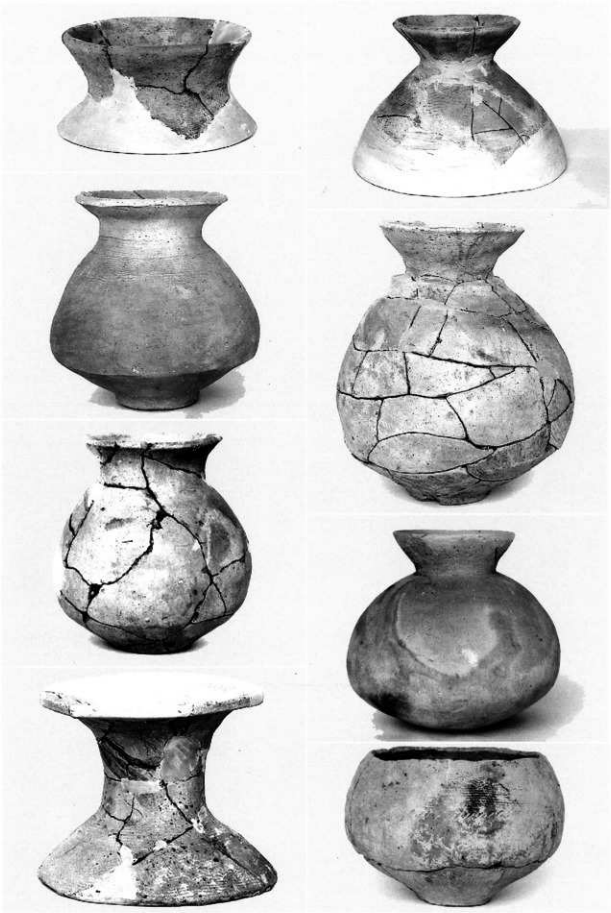
18・19・20・21

写真図版　20　YT１・YT2出土土器（第12次2期調査）

1
2
3

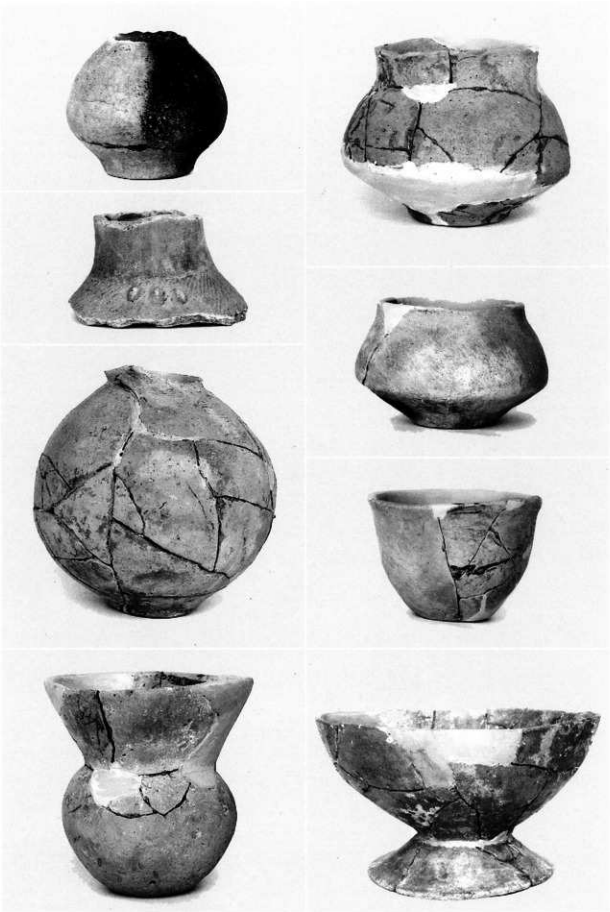
4
7
8
11
12

写真図版　21　YT2出土土器（第12次2期調査）



13
15
16
17
18
19
20
21

写真図版　22　YT2出土土器（第12次2期調査）



23
24
25
28
29
32
33
35

写真図版　23　YT2出土土器（第12次2期調査）

36　37
40
41
62

46
47
56

写真図版　24　YT9出土土器（第12次2期調査）

65
66
68
70

74
78
81

写真図版　25　YT9出土土器（第12次2期調査）

83
84
88

89
90
100

写真図版　26　YT9出土土器（第12次2期調査）

106　105
107
114　108
109　111

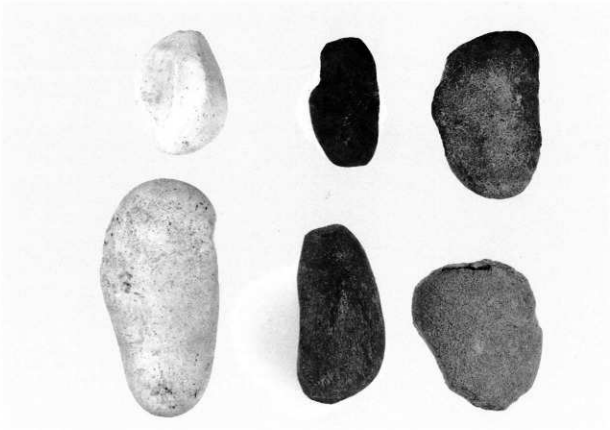
110
112
113
115

写真図版　27　その他の出土土器（第12次2期調査）

117
119
125
139

127
140
143
136

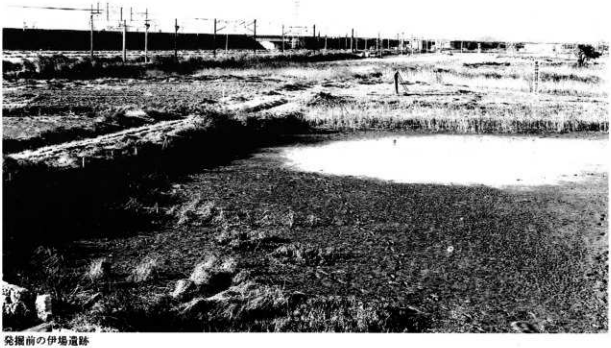
写真図版　28　石製品（第12次2期調査）



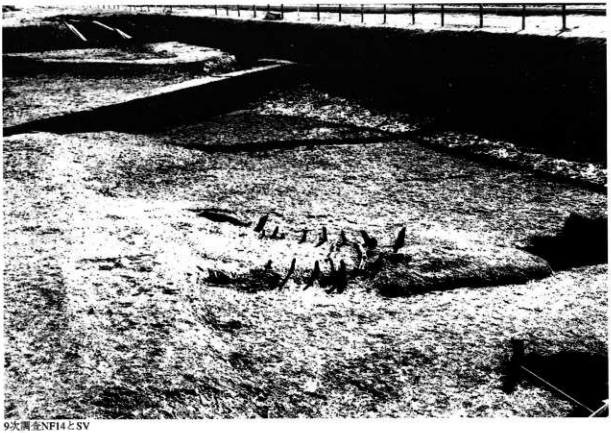
5
6

1
2

3
4



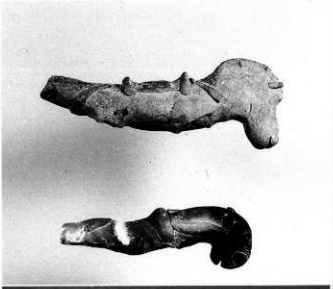
発掘前の伊場遺跡



9次調査NF14とSV

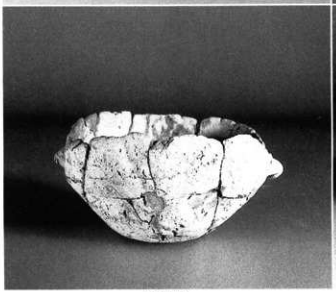
陶馬出土状況

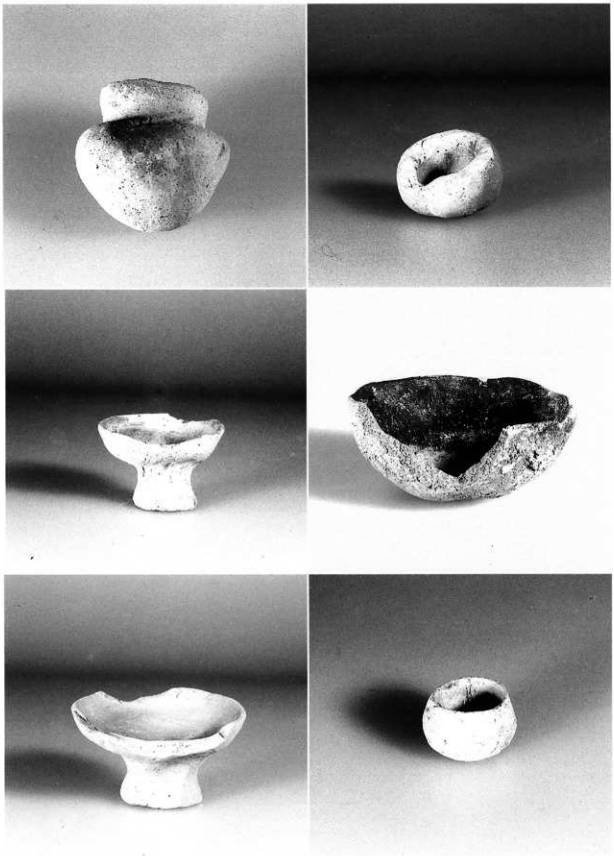
写真図版　32



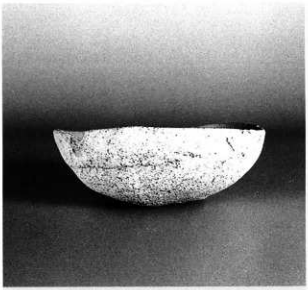
260・261
228
233

260・261
220
208

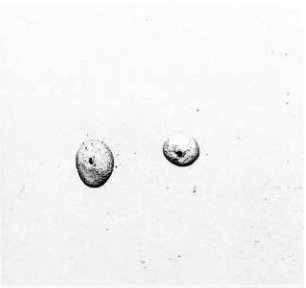




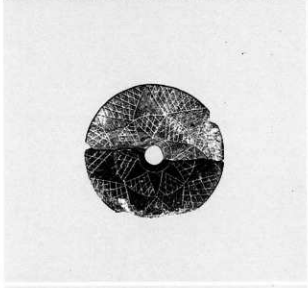
写真図版　34

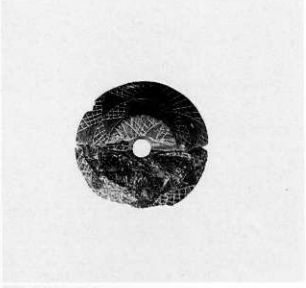


43
40

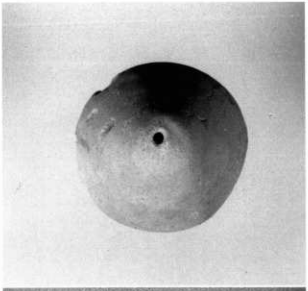


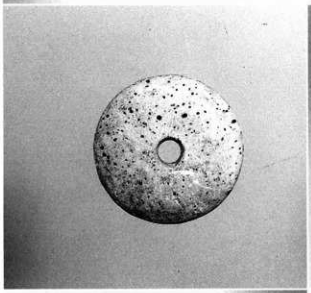
226　227
43
301

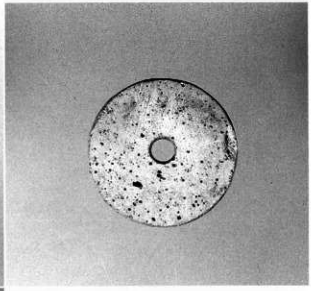


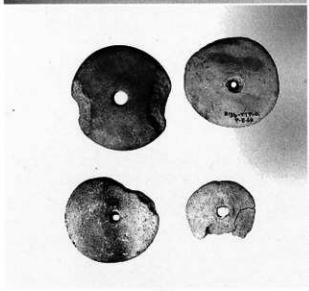


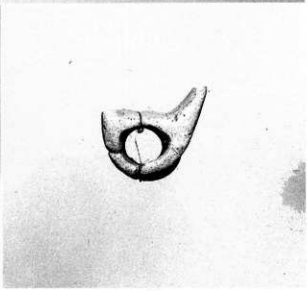
写真図版　35











305
35
313　306
309　310

311
35
253

写真図版　36

259
259
38

259
259
弧石

報告書抄録

書名（ふりがな）	伊場遺跡遺物編（いばいせきいぶつへん）7
副書名・巻次	伊場遺跡発掘調査報告書　第9冊
編著者名	大野勝美　太田好治　（株）パリノサーヴェイ
編集機関	浜松市博物館　〒432　静岡県浜松市蜆塚四丁目22-1 tel.053-456-2208
発行機関	浜松市教育委員会　〒430　静岡県浜松市元城町103-2
発行年月日	西暦　1997年3月24日
所収遺跡名・所在	伊場（いば）遺跡　静岡県浜松市東伊場二丁目22-1
遺跡コード	（市町村）22202　（遺跡）12-12
緯度・経度	（北緯）34度41分30秒　（東経）137度41分00秒
調査期間・原因	1968年1月23日～1980年3月25日・東海道線高架関連事業他
掲載遺物の概要	弥生土器・石器・土製品（縄文時代～鎌倉時代）
特記事項	奈良平安時代は敷智郡衙関連遺構か

伊場遺跡発掘調査報告書　第9冊
伊場遺跡遺物編　7
1997年3月24日
編集　浜松市博物館
浜松市蜆塚四丁目22番1号
発行　浜松市教育委員会
浜松市元城町103-2
印刷　マエダ印刷株式会社